

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第51集  
下関市文化財調査報告書 11  
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書 第40集

# 宮迫神田遺跡 的場遺跡

2005

財団法人 山口県ひとづくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
下関市教育委員会

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第51集  
下関市文化財調査報告書 11  
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書 第40集

みや さこ かん だ  
宮 迫 神 田 遺 跡  
まと ば  
的 場 遺 跡

2005

財団法人 山口県ひとづくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
下関市教育委員会

## 序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域社会の創造に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について事前に発掘調査を行い、その結果を記録にとどめ、郷土を築いてきた先人の足跡を後生に残すこととしております。

本書は、豊北町栗野地区、堀越地区の国営農地再編整備事業に先立ち、同地区内に所在する宮追神田遺跡、的場遺跡について、財団法人山口県ひとづくり財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、宮追神田遺跡では弥生時代から中世までの集落跡が発見され、縄文時代から中世にいたるまでの数多くの土器類や石器・石製品等も出土しました。また、的場遺跡では中世の遺構が発見され、縄文時代後期の土器が多量に出土しました。

これらの資料は当時の人々の暮らしを考える上できわめて貴重な資料となり、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史の基礎資料として、広く活用されることを願うものであります。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年3月

財団法人山口県ひとづくり財団

理事長 牛見 正彦

## 序

国指定史跡「上井ヶ浜遺跡」を擁し、自然と歴史に恵まれた豊北町では、2001年度（平成13年度）から、国営農地再編整備事業をおこなっています。この事業に先立って、遺跡の有無を確かめるために試掘調査を実施し、その結果に基づいて遺跡の発掘調査をおこなってきました。2004年度（平成16年度）には、江尻下地区、野地地区、寺川地区、河原地区、堀越地区、宮迫地区の発掘調査をおこないました。

本報告書は、堀越地区の的場遺跡、宮迫地区の宮迫神田遺跡の発掘調査報告書です。的場遺跡では、柱穴群と大量の縄文土器が、宮迫神田遺跡からは弥生時代と古墳時代の住居址、弥生時代の上坑、中世の建物跡などが見つかりました。また、後者からは北部九州に特有な大型甕棺の破片が発見されるなど注目される遺物も見つかっています。

栗野川沿岸の発掘調査例は少なく、この地域の縄文・弥生時代の様子はよくわからなかったのですが、今回の調査によって、栗野川周辺では縄文時代から中世にいたる期間、人々が生活していたことがわかり、この地域が豊北町でも重要な場所であったことが明らかになりました。

今回の調査によって得られた遺構・遺物群は、今後豊北町の歴史を明らかにする際の貴重な資料になるものと期待されます。

発掘された埋蔵文化財は、私たちが住んでいる地域の歴史を内容豊かに復元するために欠くことのできない文化遺産です。従って、本書が学術関係者だけでなく、地域の社会教育・学校教育などの分野でも広く活用されることを願っております。

なお、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力・ご援助いただきました関係者各位、地権者や地元の皆様方に深く感謝いたします。

2005年（平成17年）2月10日

豊北町教育委員会

教育長 岡田 忠

## 例 言

- 1 本書は、山口県下関市豊北町大字粟野に所在する「宮迫神田遺跡」、大字神田に所在する「的場遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国営農地再編整備事業に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が中国四国農政局の委託を受け、また、一部は下関市教育委員会が平成16年度の国庫補助事業として、共同で実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県ひとづくり財団	山口県埋蔵文化財センター
	下関市教育委員会	
調査担当	山口県埋蔵文化財センター	文化財専門員 堀田 浩一
	山口県埋蔵文化財センター	文化財専門員 竹安 昭博
	山口県埋蔵文化財センター	調査員 石馬 啓介
- 4 調査に当たっては、山口県教育委員会、中国四国農政局、豊北町農村整備課、並びに地元関係各位の協力、援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「豊北町全図」を複製使用したものである。第2図及び第45図は中国四国農政局提供の地図を元に作成したものである。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 資料の鑑定・分析を下記の各氏に依頼した。記して、謝意を表す。

土器表面の砂礫観察	奥田 尚	（横浜考古学研究所 共同研究員）
石材鑑定	亀谷 敦	（山口県立山口博物館 専門学芸員）
- 8 本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

SB	: 住居・建物	SK	: 土坑	SD	: 溝状遺構	SP	: 柱穴
----	---------	----	------	----	--------	----	------
- 11 本書の的場遺跡の遺物（縄土土器）の項に関しては、幸泉 満夫氏（山口県立山口博物館 専門学芸員）に執筆を依頼した。
- 12 本書の作成・執筆は、調査担当者が共同で行い、編集は堀田が行った。

## 本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
1	調査に至る経緯	3
2	調査の概要	3
III	宮迫神田遺跡	5
1	調査の方法と経過	5
2	調査の成果	9
(1)	遺構	9
(2)	遺物	30
3	まとめ	61
IV	的場遺跡	63
1	調査の方法と経過	63
2	調査の成果	67
(1)	遺構	67
(2)	遺物	79
3	まとめ	108
V	付編	109
	宮迫神田遺跡の土器の表面にみられる砂礫	

## 図版目次

### 宮迫神田遺跡

図版1	調査区遠景	図版13	宮迫神田遺跡出土遺物(3)
図版2	調査区全景	図版14	宮迫神田遺跡出土遺物(4)
図版3	調査区遠景、D区全景	図版15	宮迫神田遺跡出土遺物(5)
図版4	S B 9、8、4、3、5	図版16	宮迫神田遺跡出土遺物(6)
図版5	S B 2、1、6、7、S B 7 土器出土状況	図版17	宮迫神田遺跡出土遺物(7)
図版6	S B 18、17、21、19、20	図版18	宮迫神田遺跡出土遺物(8)
図版7	S K 35、30、3、4、6	図版19	宮迫神田遺跡出土遺物(9)
図版8	S K 27、12、1、20、26	図版20	宮迫神田遺跡出土遺物(10)
図版9	S K 9、33、34、S P 229、壺壺、咸平元宗、C区遺物包含層土器出土状況	図版21	宮迫神田遺跡出土遺物(11)
図版10	C区遺物包含層調査区北端下層、C区遺物包含層土器出土状況、C区遺物包含層遺物出土状況、C区遺物包含層トレンチ③上層、C区遺物包含層調査区北端上層	図版22	宮迫神田遺跡出土遺物(12)
図版11	宮迫神田遺跡出土遺物(1)	図版23	宮迫神田遺跡出土遺物(13)
図版12	宮迫神田遺跡出土遺物(2)	図版24	宮迫神田遺跡出土遺物(14)
		図版25	宮迫神田遺跡出土遺物(15)
		図版26	宮迫神田遺跡出土遺物(16)
		図版27	宮迫神田遺跡出土遺物(17)
		図版28	宮迫神田遺跡出土遺物(18)
		図版29	宮迫神田遺跡出土遺物(19)

図版30 宮迫神田遺跡出土遺物20  
 図版31 宮迫神田遺跡出土遺物21  
 図版32 宮迫神田遺跡出土遺物22  
 図版33 宮迫神田遺跡出土遺物23  
 図版34 宮迫神田遺跡出土遺物24  
 図版35 宮迫神田遺跡出土遺物25

図版36 宮迫神田遺跡出土遺物26  
 図版37 宮迫神田遺跡出土遺物27  
 図版38 宮迫神田遺跡出土遺物28  
 図版39 宮迫神田遺跡出土遺物29  
 図版40 宮迫神田遺跡出土遺物30

### の場遺跡

図版41 調査区遠景  
 図版42 調査区全景  
 図版43 SK 7、9  
 図版44 SK 2、4・5、8、10、12、SP 3、18、40  
 図版45 SP 1、66、82、98、D区遺物包含層土器出土状況  
 図版46 SP 76、D区遺物包含層土器出土状況、D区石列出土状況、D区石列土層断面  
 図版47 土器溜状遺構遺物出土状況、土器溜状遺構土器出土状況  
 図版48 SK 13、14、土器溜状遺構土器出土状況  
 図版49 土器溜状遺構完掘状況、土器溜状遺構遺物出土状況、土器溜状遺構土層断面  
 図版50 の場遺跡出土遺物(1)  
 図版51 の場遺跡出土遺物(2)  
 図版52 の場遺跡出土遺物(3)  
 図版53 の場遺跡出土遺物(4)  
 図版54 の場遺跡出土遺物(5)  
 図版55 の場遺跡出土遺物(6)

図版56 の場遺跡出土遺物(7)  
 図版57 の場遺跡出土遺物(8)  
 図版58 の場遺跡出土遺物(9)  
 図版59 の場遺跡出土遺物10  
 図版60 の場遺跡出土遺物11  
 図版61 の場遺跡出土遺物12  
 図版62 の場遺跡出土遺物13  
 図版63 の場遺跡出土遺物14  
 図版64 の場遺跡出土遺物15  
 図版65 の場遺跡出土遺物16  
 図版66 の場遺跡出土遺物17  
 図版67 の場遺跡出土遺物18  
 図版68 の場遺跡出土遺物19  
 図版69 の場遺跡出土遺物20  
 図版70 の場遺跡出土遺物21  
 図版71 の場遺跡出土遺物22  
 図版72 の場遺跡出土遺物23  
 図版73 の場遺跡出土遺物24  
 図版74 の場遺跡出土遺物25

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	1
宮迫神田遺跡	
第2図 宮迫神田遺跡調査区設定図	6
第3図 宮迫神田遺跡遺構配置図	7・8
第4図 竪穴住居跡実測図(1)	10
第5図 竪穴住居跡実測図(2)	11
第6図 竪穴住居跡実測図(3)	12
第7図 竪穴住居跡実測図(4)	13
第8図 掘立柱建物跡実測図(1)	15
第9図 掘立柱建物跡実測図(2)	16
第10図 掘立柱建物跡実測図(3)	17
第11図 掘立柱建物跡実測図(4)	18
第12図 SK 35実測図	20
第13図 SK 26、6実測図	21
第14図 SK 4、30実測図	22
第15図 SK 1、3、12、20実測図	23
第16図 SK 13、15、9実測図	24
第17図 SK 8・27、33、34実測図	26

第18図	S K 36実測図	27	第33図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図7)	50
第19図	埋藏遺構実測図	27	第34図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図8)	51
第20図	S P 229実測図	27	第35図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図9)	52
第21図	C区遺物包含層上層図	28	第36図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図10)	53
第22図	竪穴住居跡出土土器実測図1)	41	第37図	C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図1)	53
第23図	竪穴住居跡出土土器実測図2)	42	第38図	C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図2)	54
	・土坑出土土器実測図1)	42	第39図	C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図3)	55
第24図	土坑出土土器実測図2)	43	第40図	D区遺物包含層出土土器実測図	56
第25図	柱穴出土土器実測図	44	第41図	土製品・下類・銭・木製品実測図	57
第26図	A・B区遺物包含層出土土器実測図	44	第42図	石器・石製品実測図1)	58
第27図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図1)	44	第43図	石器・石製品実測図2)	59
第28図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図2)	45	第44図	石器・石製品実測図3)	60
第29図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図3)	46			
第30図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図4)	47			
第31図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図5)	48			
第32図	C区遺物包含層出土弥生土器実測図6)	49			

#### 的場遺跡

第45図	的場遺跡調査区設定図	64	第60図	縄文土器実測図4)	93
第46図	的場遺跡遺構配置図	65・66	第61図	縄文土器実測図5)	94
第47図	掘立柱建物跡実測図1)	67	第62図	縄文土器実測図6)	95
第48図	掘立柱建物跡実測図2)	68	第63図	縄文土器実測図7)	96
第49図	掘立柱建物跡実測図3)	69	第64図	縄文土器実測図8)	97
第50図	S K 7、9、10実測図	71	第65図	縄文土器実測図9)	98
第51図	S P 1、66、76、98実測図	72	第66図	縄文土器実測図10)	99
第52図	D区石列、S K 13実測図	74	第67図	縄文土器実測図11)	100
第53図	S K 14実測図	75	第68図	縄文土器実測図12)	101
第54図	縄文時代遺構配置図	76	第69図	縄文土器実測図13)	102
第55図	縄文土器出土状況実測図	77・78	第70図	縄文土器実測図14)	103
第56図	弥生時代以降の遺物	89	第71図	縄文土器実測図15)	104
第57図	縄文土器実測図1)	90	第72図	縄文土器実測図16)	105
第58図	縄文土器実測図2)	91	第73図	石器・石製品実測図1)	106
第59図	縄文土器実測図3)	92	第74図	石器・石製品実測図2)	107

## 表 目 次

#### 宮迫神田遺跡

第1表	掘立柱建物跡一覧表	19	第2表	石器・石製品観察表	40
-----	-----------	----	-----	-----------	----

#### 的場遺跡

第3表	掘立柱建物跡一覧表	70	第4表	石器・石製品観察表	80
-----	-----------	----	-----	-----------	----

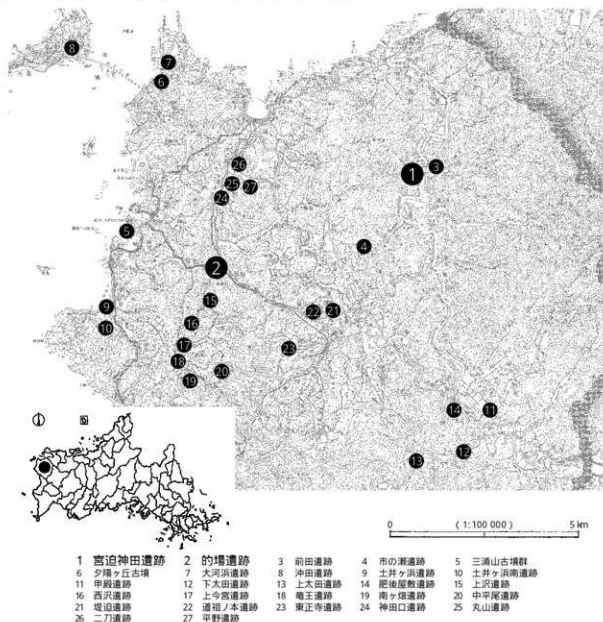


# I 遺跡の位置と環境

## 1 地理的環境

宮迫神田遺跡、的場遺跡は、山口県の北西端に位置する豊浦郡豊北町（新下関市）の、それぞれ大字粟野、大字神田に所在する。宮迫神田遺跡は弥生時代を中心に、中世までの集落跡である。また、的場遺跡は中世の集落跡であるが、遺跡の一部からは縄文時代後期の上器が多量に出土し、古くは当該期の集落が存在していたことを示唆している。

両遺跡の所在する豊北町域は、山地や丘陵地の占める割合が非常に高く、とりわけ丘陵地は町のほぼ全域を覆うように広がっている。一方、低地はこれら丘陵地の間を流れる各河川によって形成された谷底平野に限定されており、沖積平野はほとんど見られない。また、狗留孫山（616m）や白滝山（667m）に代表される山地は、町の辺縁部にあつて外部との陸路による交流を制限しているが、これらの山地を分断する断層によって南東方向の通路が確保されている。



第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

宮迫神田遺跡は、北向きの丘陵先端部に当たる台地（標高約13m）から裾部にかけて立地し、周囲には栗野川と宮迫川沿いに発達した自然堤防の背後の低地帯が広がる。一方、的場遺跡は、南向きの丘陵性の小山塊の先端部裾（標高約40m）に立地し、前面には狭い谷底平地が開けている。いずれも内陸に位置しているが、その立地条件は少し異なっている。

## 2 歴史的環境

両遺跡の所在する地区一帯でのこれまでの発掘調査例はきわめて少なく、地域の歴史的変遷等に關する情報は乏しい。そうした中で、宮迫神田遺跡の所在する栗野地区における既往の調査では、市の瀬遺跡と前田遺跡とが知られており、両遺跡ともに中世の集落跡である。市の瀬遺跡は中世後半から近世初頭に営まれた山間部の小規模な集落跡で、掘立柱建物跡や工房跡、輸入磁器や陶器等の遺構や遺物が見つっている。前田遺跡は、掘立柱建物跡や鍛冶関連の廃棄用土坑、中世十師質土器や輸入磁器等の遺構や遺物が見つっている。

一方、的場遺跡の所在する神田地区では、警備に面した沿岸部の丘陵上に、三浦山古墳群、夕陽ヶ丘古墳がある。三浦山第1号古墳は豊北町で確認された古墳の中で最も古く、5世紀代の小規模な石棺系竪穴式石室をもつ円墳で、墳丘から鉄刀2本分が出土している。夕陽ヶ丘古墳は、6世紀後半の横穴式石室をもつ円墳で、石室内からは鉄刀や馬具、丸玉・白玉等の装身具が出土している。近世の遺跡としては、埋葬跡の大河浜遺跡がある。また、沿岸部の肥中は「肥中街道」と「山陰道」を結ぶ「北浦道」の重要な道筋であったため、肥中港には中世に大内氏の船倉が置かれ、北浦の港津として重要な位置を担っていた。

こうした栗野・神田地区以外の豊北町内の遺跡では、縄文時代の遺跡としては鳥島に所在する沖田遺跡があり、縄文時代晩期に位置付けられる土器が包含層からまとまって出土している。弥生時代の遺跡として警備沿岸では、前出の沖田遺跡、弥生時代前期後半～中期後半における波来系弥生人の集団墓地として著名な上井ヶ浜遺跡、弥生時代前期の貯蔵穴や土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡等が検出され、上井ヶ浜遺跡に埋葬された人々の集落の一つであったと考えられている上井ヶ浜南遺跡が存在する。内陸部の田耕地区には、この時期の豊北町の拠点集落の一つとして位置付けられている甲殿遺跡がある。弥生時代前期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡18軒と掘立柱建物跡が20棟検出され、中国戦国時代のガラス製のトンボ玉が出土している。この他に内陸部には、小規模な集落跡として竜王遺跡や南ヶ畑遺跡等がある。古墳時代の遺跡としては、古墳時代の竪穴住居跡や初期須恵器が見つかった平野遺跡や、西沢遺跡がある。古代の遺跡としては、墨書やヘラ書きのある須恵器や緑釉陶器等が出土した二刀遺跡や輸入磁器や製塩土器等が出土した上今宮遺跡がある。中世の遺跡としては、東正寺遺跡、土沢遺跡、中平尾遺跡、神田口遺跡、上太田遺跡、下太田遺跡がある。これらの集落遺跡は概ね町内の主要な街道筋に当たる付近に位置し、こうした遺跡の立地には往時の物流との関連が想定されよう。近世の遺跡としては、集落跡の肥後屋敷遺跡、埋葬跡の堤迫・道根ノ本遺跡等がある。

いずれにしても豊北町域での広域にわたる発掘調査は、ここ数年におけるものが大半を占めているのが現状であり、それらの結果を踏まえた特異な遺跡立地等の検討を含め、今後のさらなる調査の進展によって地域の歴史がより解明されることが期待されよう。

〔参考文献〕

- 豊北町史編纂委員会『豊北町史』(1994年)
- 山口県歴史文化財センター『上太田遺跡 市の瀬遺跡 南ヶ畑遺跡』(2004年)
- 上井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム『前田遺跡I前田遺跡II』(2004年)

## II 調査の経緯と概要

### 1 調査に至る経緯

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保存するため、関係機関と事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については、記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。豊北町で始まった同営農地再編整備事業に際しても、中国四国農政局、豊北町農村整備課及び豊北町教育委員会と協議を行い、当該地域の中で遺構が埋存している可能性の高い地域について試掘調査を行った。この結果新たに遺跡が確認された宮迫地区宮迫神田遺跡と堀越地区の場遺跡においては、現状保存が困難な範囲を対象に発掘調査を行うこととなった。調査は、財団法人山口県ひとづくり財団に所属する山口県埋蔵文化財センターが中国四国農政局の委託を受けて、文化庁の国庫補助を受けた豊北町教育委員会と共同で実施することとなった。

### 2 調査の概要

発掘調査を始めるにあたっては、宮迫神田遺跡・的場遺跡とも中国四国農政局、豊北町農村整備課及び豊北町教育委員会との間で打ち合わせを行うと共に、近隣の小中学校、警察署、自治会等に安全確保のための協力と理解を要請した。

#### 【宮迫神田遺跡】

平成16年5月10日から27日まで重機による耕土除去を駐車場の整地と並行して行い、14日にプレハブ事務所を設置した。調査区は調査前の現地水田区画に従い、高所の南から順にA～D区とし、18日より作業員を動員して遺構面を確定するためのトレンチ調査を行った。この調査に基づいて20日から重機による表土除去を行い、24日からはこれと並行して作業員による遺構検出作業を開始した。その結果、A・B区では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑や多数の柱穴等の遺構が検出された。また、C・D区では、竪穴住居跡や土坑、調査区全体を広く覆う遺物包含層が検出された。このような状況を踏まえ、計画的・効果的に調査する必要から調査方法や掘り込みの順序を検討し、28日からA・B区の遺構の掘り込み作業を開始した。また、その間、6月2日に国上座標杭を設置した。A・B区の掘り込み作業が終了した6月14日から、C・D区の掘り込み作業を開始し、7月14日にはD区の掘り込み作業が終了した。また、6月29日には粟野小学校6年生の発掘体験学習を受け入れ、7月31日には発掘調査の成果を広く公開すべく現地説明会を開催した。現地説明会の当日は、悪天候にもかかわらず、地元の人たちを中心に約100名の来訪者があり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構や遺物包含層の弥生土器の出土状況、出土した土器や石器等の遺



表土除去（的場遺跡）



遺構掘り込み（的場遺跡）



空中写真撮影（宮迫神田遺跡）



発掘体験学習（宮迫神田遺跡）



現地説明会（宮迫神田遺跡）

世の面とD区の中世の包含層を重機を使って除去し、15日には中世の面の遺構の掘り込み作業が終了したので、22日に空中写真撮影を実施した。その後、27日に中世以前の包含層を確認するためのトレンチ調査を行い、これに基づいて9月30日から2日間、B区からD区にかけての中世の面を重機を使って除去し、10月4日から縄文土器を含んだ包含層の検出及び掘り込み作業を開始した。その間、縄文土器の出土状況を図面や写真による記録保存作業を行った。29日に掘り込み作業は終了したので、11月1日に遺物包含層の範囲や出土した遺構を平板実測し、2日に発掘調査現場でのすべての作業を終了した。

前半の宮迫神田遺跡の発掘調査は、天候にも恵まれて当初の予定通り作業を進めることができた。後半の的場遺跡の発掘調査は、8月・9月と併にわたる台風の上陸・接近により、進捗状況に少なからずの影響が出たが、両遺跡とも大過なく作業を終えることができた。多くの調査資料を山口県埋蔵文化財センターに持ち帰って検討を加え、出土遺物の復元、実測、写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。

物を見学してもらった。その後、7月22日の空中写真撮影を経て、7月下旬にグリッド実測による遺構の記録保存作業を行った。8月4日には、C区遺物包含層の地山確認のためのトレンチ掘削と礫層の除去作業を重機によって行った。8月20日の撤収日までC区遺物包含層の掘り込み作業を継続して行い、最後にC区の平板実測を行ってすべての作業が終了した。

#### 【的場遺跡】

調査に先立って豊北町農村整備課の立ち会いのもと、地権者と駐車場及びプレハブ設置場所の整地について確認を行った。7月27日から重機を使って駐車場の整地及び調査区の耕土除去を行い、8月9日にプレハブ事務所を設置した。調査区は調査前の現地水田区画に従い、高所の東から順にA～D区とし、試掘調査の結果に基づいて8月3日から6日まで重機による表土除去を行った。8月9日から作業員による遺構検出を開始し、24日に終了した。その結果、B区とD区を中心に土坑や多数の柱穴等の遺構と中世の遺物を含んだ包含層が検出された。また、中世の遺物を含んだ包含層の下に、縄文土器を含んだ包含層のあることが確認された。8月23日から中世の遺構と包含層の掘り込み作業を開始し、26日には国土座標杭を設置した。遺構の掘り込み作業が済んだ所から、個別遺構の実測とグリッド実測を並行して行った。9月13日にはB区の近

## Ⅲ 宮迫神田遺跡

### 1 調査の方法と経過

宮迫神田遺跡は、豊北町北東部の粟野地区にあり、豊田町に流れを發し支流を集め油谷湾へと注ぐ粟野川の左岸に位置する。調査区は南側の丘陵先端部に当たる標高約13.0mの台地（A・B区）と、そこから東側に落ち、粟野川と宮迫川沿いに発達した自然堤防の背後の低地（C・D区）に分かれ、調査面積は約2,300㎡の広さである。

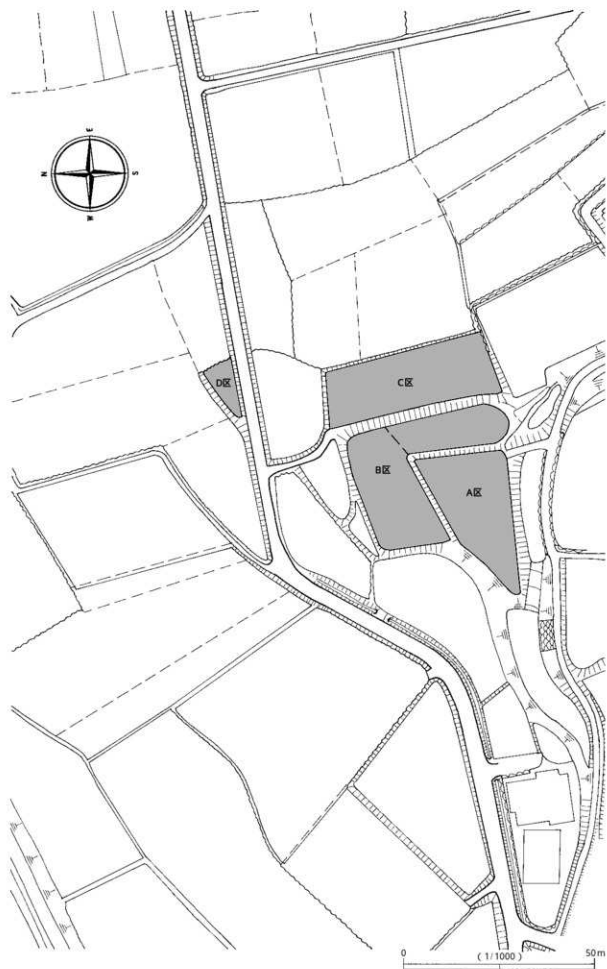
調査区は、調査前の現地水田区画に従い、高所の南から順にA～D区とした。B区については水田としては別の区画であったが、比高差がほとんどなかったため、同一の調査区名にした。

重機による耕土除去後、予察調査で試掘を行っていなかったB区北半部東側と南端部、C区南端部と北端部に6本のトレンチを設定し、遺構面の確認を行った。B区北半東側では、町だおし（近世以降の水田拡張に伴う造成）に伴う多量の礫を含む造成土が40～50cm存在することを確認した。また、C区では予察の段階で、黒褐色粘質土の遺物包含層が1m以上厚く全体を覆っていることが確認されていたが、トレンチ調査でも予察の試掘結果と同じように、弥生土器、須恵器、土師器等の土器を多量に含んだ遺物包含層が調査区全体を広く覆って堆積していることが確認できた。

この結果を受けて、A区から順に重機を投入して慎重に表土除去を行った。表土除去を行うにつれてA区では南半部東側で町だおしに伴う良砂土の客土層が現れたので、重機によるトレンチ調査をしながら除去した。B区北半東側において確認された町だおしの造成土は北半西側でも現れたため、重機による表土除去の段階ですべて除去した。A・B区の町だおしの造成土により、当初想定していた土量よりも多量の排土が出た。C区では南半部のトレンチ調査やその土質観察において、整地土が確認されたので表土除去の段階ですべて除去した。

表土除去が終了した地区から順に遺構検出を行った。A区では竪穴住居跡、土坑、柱穴等の遺構が検出された。検出された竪穴住居跡7軒は、町だおしによる削平を受けており遺存状態は不良であった。また、南側部分も水田化による削平が著しく遺構らしきものは確認できなかった。B区では遺構面が礫を含んで固く検出に手取取ったが、竪穴住居跡、土坑、柱穴等の遺構が確認された。しかし、A区と同じように南側部分は水田化による著しい削平を受けており、遺構らしきものは確認できなかった。また、北半部西側の竪穴住居跡や土坑等の遺構も町だおしによる削平により、遺存状態は不良であった。C区では調査区の中央部西側で遺存状態の良い竪穴住居跡が1軒と土坑が5基、北端部の遺物包含層で多数の柱穴が確認された。D区では表土除去のちに、調査区全体を覆っている遺物包含層の堆積状況を確認するために、東西・南北に2本のトレンチを設定し調査を行った。その結果、遺物包含層の下に多数の柱穴があることを確認した。遺物包含層を掘り込んで竪穴住居跡1軒と多数の柱穴を検出した。

遺構検出によって確認できた遺構を慎重に掘り込み、図面と写真による記録作成を行った。A・B・D区の掘り込みが終了し、C区はまだ掘り込みの途中ではあったが空中写真撮影を経て、グリッド実測を行った。また、調査終了日までC区の遺物包含層の掘り込み作業を行い、最後に平板実測を行った。現場での調査を終えた。



第2区 宮迫神田遺跡調査区設定図



第3図 高迫神田遺跡遺構配置図

## 2 調査の成果

### (1) 遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡20棟、土坑36基、溝状遺構2条、埋塞遺構1基、柱穴約600個である。調査区の中で、遺構が密集するのは標高の高いA区とB区で、標高の低いC区とD区は遺構が少ない。全体的に遺構の遺存状態は悪く、遺構面は削平されている可能性が高い。出土遺物などから弥生時代～中世の所産と考えられる。

ここでは、主な遺構を取り上げ、説明を加えることとする。

#### ① 竪穴住居跡（第4～7図、図版4・5）

竪穴住居跡は、A区7軒、B区1軒、C区1軒、D区で1軒の合計10軒が検出された。いずれも後世の水田開発による削平のため、遺存状態は良くない。平面形は円形が7軒、方形を呈するものが3軒である。

##### SB8（第4図、図版4）

A区南半部西側に位置する。北西側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。遺存する壁の高さは最大で28cmを測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約7.2mに達する。削平を受けているが南側には幅40～80cm、高さ12cmのベッド状遺構が設けられている。北側の床面上には焼け締まった土が残っていた。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生中期後半に属する住居であろうと考えられる。

##### SB10（第4図）

A区南半部西側に位置する。壁の大半は削平を受けて消失している。遺存する壁の高さは最大で42cmを測る。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期に属する住居であろうと考えられる。

##### SB4（第4図、図版4）

A区中央部に位置する。北側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。消失した部分を復元すれば、推定径は約7.1mに達する。遺存する壁の高さは最大で18cmを測り、壁溝は幅8～18cm、床面からの深さ6～9cmである。削平を受けているが西側には幅78cm、高さ7～10cmのベッド状遺構が設けられている。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、古墳時代初頭に属する住居であろうと考えられる。

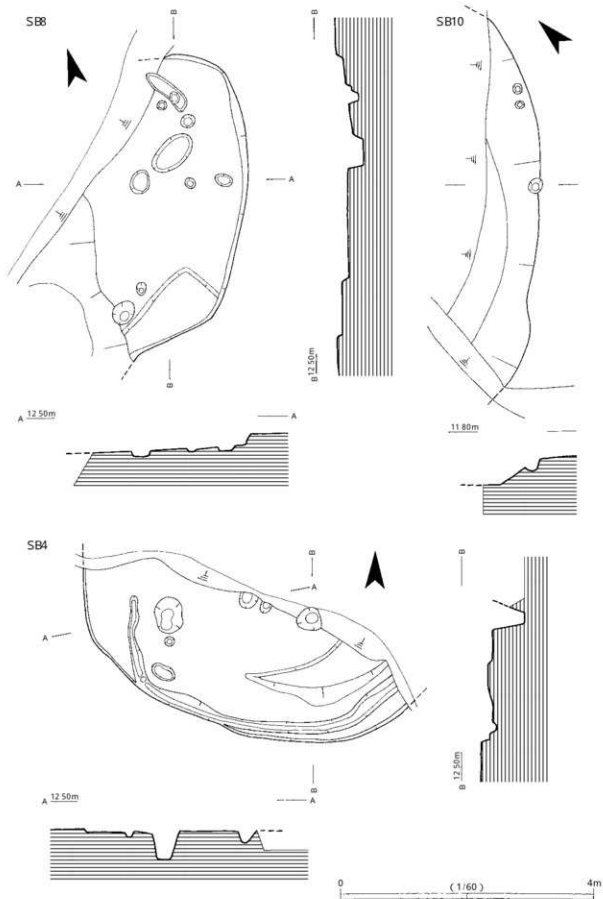
##### SB3（第5図、図版4）

A区南半部東側に位置する。北側の壁は消失し、東側はSB7に切られている。平面形は円形を呈していたと考えられる。消失した部分を復元すれば、推定径は約6.4mに達する。遺存する壁の高さは最大で26cmを測り、壁溝は幅15～21cm、床面からの深さ6～23cmである。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期に属する住居であろうと考えられる。

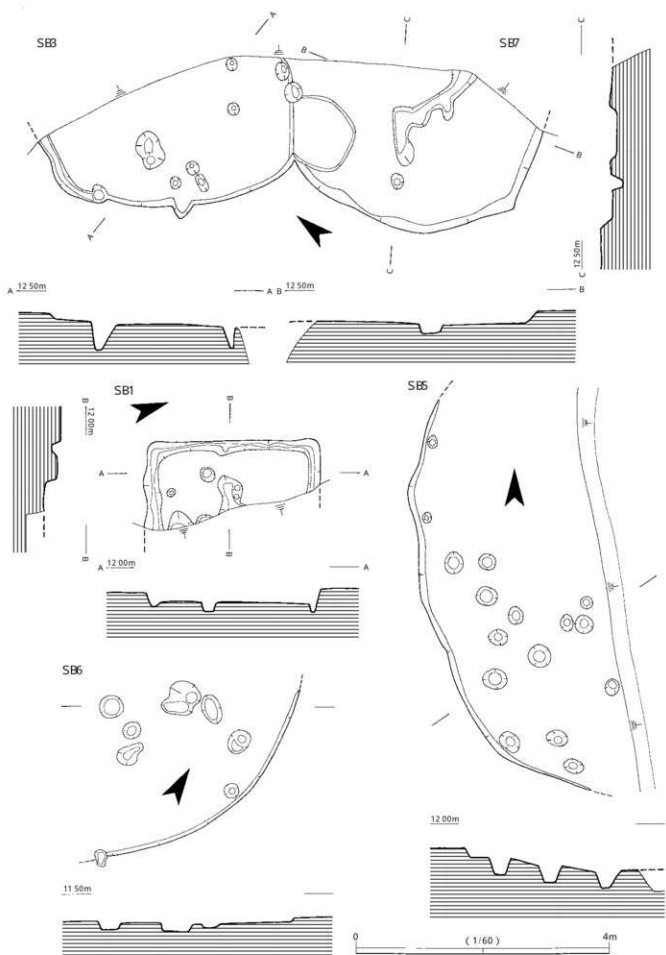
##### SB7（第5図、図版5）

A区南半部東側に位置する。遺構の南東側半分は後世の開発によって削り取られているが、南側と西側の壁と住居内の溝を確認できる。壁の高さは遺存部で最高21cm。平面形は方形を呈していたと考えられる。現存規模は東西2.6m、南北5.2mであり、小型の住居であると推定できる。幅25～37cm、

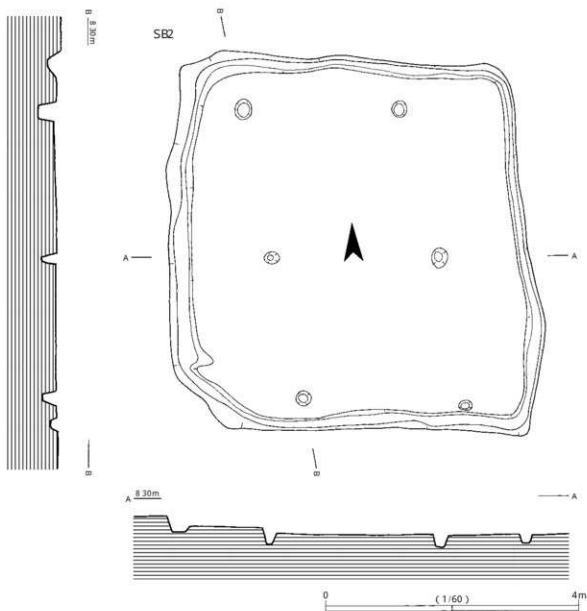




第4図 竪穴住居跡実測図(1)



第5圖 竅穴住居跡実測圖(2)



第6図 竪穴住居跡実測図(3)

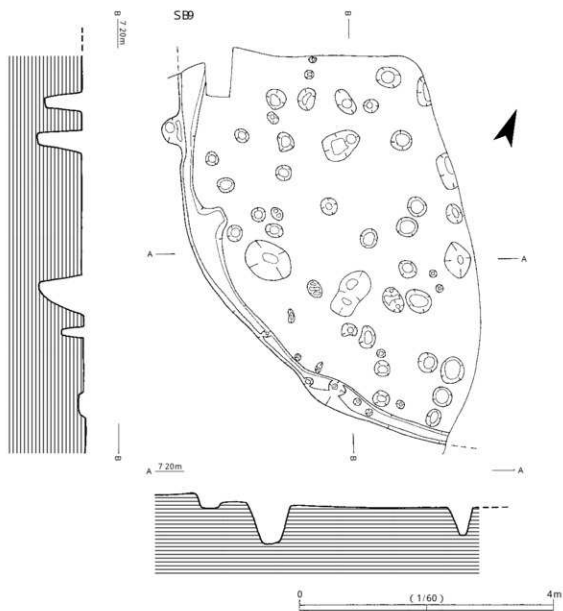
床面からの深さ10～19cmの排水溝が中央に設けられており、低位側の屋外に続いていたと考えられる。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期から5世紀代に属する住居であろうと考えられる。

**SB1 (第5図、図版5)**

A区中央部東側に位置する。遺構の東側半分は後世の開発によって刮り取られているが、西側の壁と溝を確認できる。遺存する壁の高さでは最高25cm。平面形は方形を呈していたと考えられる。現存規模は東西1.4m、南北2.8mであり、小型の住居であると推定できる。壁溝は幅18～24cm、床面からの深さ6～10cmである。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期から古墳時代に属する住居であろうと考えられる。

**SB5 (第5図、図版4)**

A区北平部東側に位置する。東側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。



第7図 竪穴住居跡実測図(4)

遺存する壁の高さは最大で30cmを測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約9.0mに達する。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期後半の時期に属する住居であろうと考えられる。

**SB 6 (第5図、図版5)**

B区北半部西側に位置する。西側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。遺存する壁の高さは最大で9～11cmを測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約6.2mに達する。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期後半に属する住居であろうと考えられる。

**SB 2 (第6図、図版5)**

C区南半部西側に位置する。平面形は正方形に近く、長軸6.12m、短軸5.68m、遺存壁高は最大で

32cmの規模をもつ。主柱穴は6本で、黒褐色粘質土が堆積していた。壁溝は幅20～40cm、床面からの深さ8～30cmである。遺物は細片の上師器が多く、復元できるものはなかった。時期は古墳時代に属する住居であろうと考えられる。

#### SB9 (第7図、図版4)

D区東側に位置する。北側と東側は調査区外で検出できなかった。平面形は円形を呈していたと考えられる。遺存する壁の高さは最大で30cmを測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約9.8mに達し、今回出土した堅穴住居では最大の規模である。壁溝は幅12～50cm、床面からの深さ6～10cmである。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、古墳時代初頭に属する住居であろうと考えられる。

### ② 掘立柱建物跡 (第8～11図、第1表、図版6)

調査で確認できた掘立柱建物跡はSB11～30の20棟であり、そのうち時期のわかる建物跡は弥生時代が1棟、古墳時代が1棟、中世が10棟である。その他については時期がわからない。これらの建物跡は、高位のA区とB区に集中する。

#### SB17 (第8図、図版6)

B区北半部中央に位置する2間×1間の建物で、棟方向はN16° E。建物規模は桁行4.72m×梁行2.24m、床面積約10.6㎡である。柱穴の直径は50～102cmで、深さは11～27cmである。柱穴の遺存状態は悪く、著しい削平を受けたものと考えられる。SP6、7、8、9からは弥生土器片が出土しており、この建物は弥生時代に比定される。

#### SB18 (第8図、図版6)

B区北半部東側に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN14° E。建物規模は桁行4.32m×梁行1.92m、床面積約6.6㎡である。柱穴の直径は32～54cmで、深さは17～41cmである。SP86から出土した土師器片より、建物の時期は中世と考えられる。

#### SB21 (第8図、図版6)

B区北半部西側に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN3° E。建物規模は桁行3.92m×梁行3.00m、床面積約11.8㎡である。柱穴の直径は20～28cmで、深さは6～22cmである。SP26、36からは土師器片が出土しており、この建物は中世に比定される。

#### SB28 (第8図)

B区北半部西側に位置する。2間×1間の建物と考えられるが、北西隅の柱穴は削平のため存在しない。棟方向はN19° E。建物規模は桁行4.60m×梁行2.20m、床面積約10.1㎡である。柱穴の直径は34～54cmで、深さは18～28cmである。時期が判定できるような遺物は出土していない。

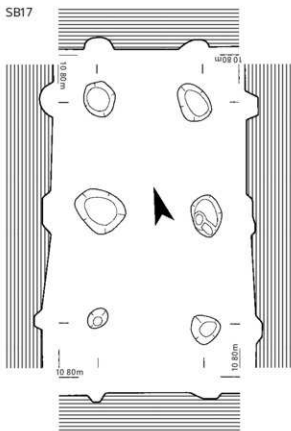
#### SB24 (第9図)

B区北半部東側に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN50° W。建物規模は桁行5.04m×梁行1.84m、床面積約9.3㎡である。柱穴の直径は36～62cmで、深さは22～40cmである。SP95から出土した土師器片や瓦質土器片から、建物の時期は中世と比定される。

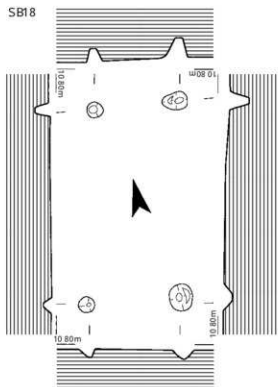
#### SB23 (第9図)

B区北半部東側に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN51° W。建物規模は桁行2.72m×梁行

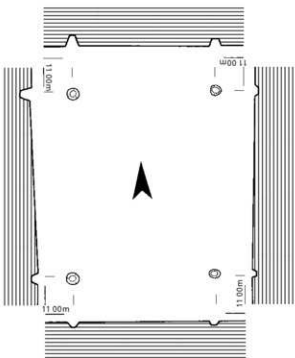
SB17



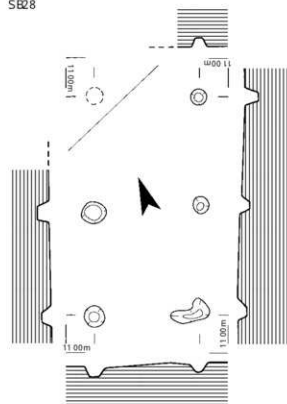
SB18



SB21



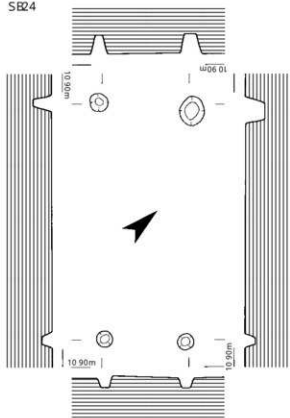
SB28



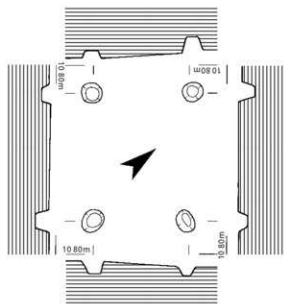
0 (1/80) 4m

第8图 掘立柱建物跡実測図(1)

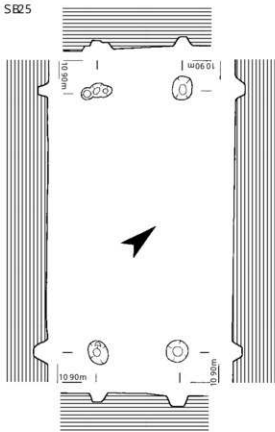
SB24



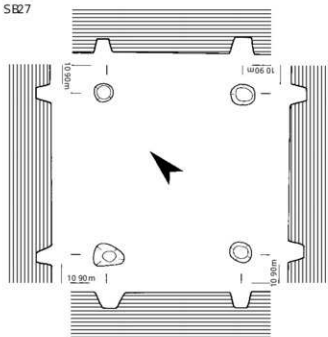
SB23



SB25



SB27



0 (1/80) 4m

第9区 掘立柱建物跡実測図(2)

2.04m、床面積約5.5m<sup>2</sup>である。柱穴の直径は44~52cmで、深さは21~35cmである。SP105から出土した土師器片から、建物の時期は中世か。

#### SB25 (第9図)

B区北半部東側に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN50°W。建物規模は桁行5.56m×梁行1.76m、床面積約9.8m<sup>2</sup>である。柱穴の直径は30~50cmで、深さは17~21cmである。棟方向や建物規模がほぼSB21と同じであることから、この2棟の建物はほぼ同時期の所産である可能性が高いと考えられる。

#### SB27 (第9図)

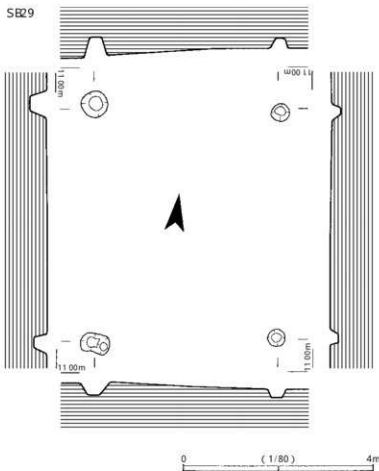
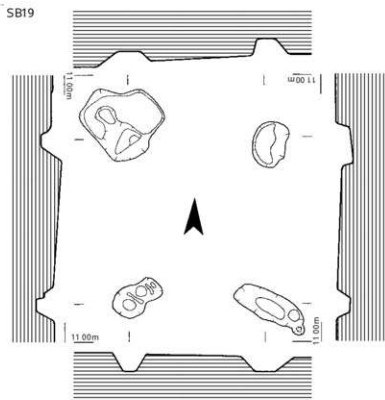
B区北半部東側に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN47°W。建物規模は桁行3.40m×梁行2.88m、床面積約9.8m<sup>2</sup>である。柱穴の直径は40~64cmで、深さは32~42cmである。SP96から出土した土師器片から、建物の時期は中世か。

#### SB19 (第10図、図版6)

B区南半に位置する1間×1間の建物で、棟方向はN4°W。建物規模は桁行3.52m×梁行2.88m、床面積約10.1m<sup>2</sup>である。柱穴の直径は44~50cmで、深さは20~32cmである。建物を構成している柱穴はそれぞれSK13、14、17、18の埋土を擲り込んでいる。SK13、14、17、18から出土した土師器片の形式から建物の時期は中世か、あるいはそれ以降と考えられる。

#### SB29 (第10図)

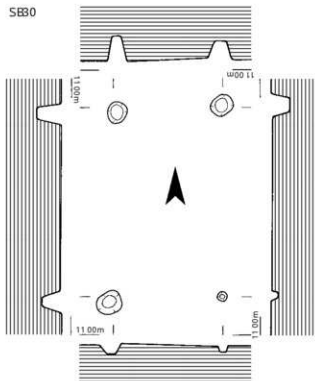
B区南半に位置する1間×1間の



第10図 掘立柱建物跡実測図(3)



SB80



建物で、棟方向は $N 9^{\circ} W$ 。建物規模は桁行 $4.92m \times$ 梁行 $3.88m$ 、床面積約 $19.1m^2$ である。柱穴の直径は $38 \sim 60cm$ で、深さは $16 \sim 35cm$ である。時期が判定できるような遺物は出土していない。

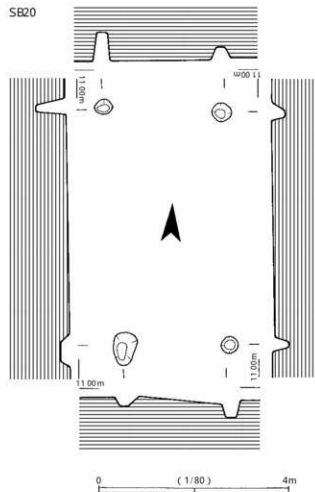
#### SB30 (第11図)

B区南半に位置する1間 $\times$ 1間の建物で、棟方向は $N 3^{\circ} W$ 。建物規模は桁行 $4.00m \times$ 梁行 $2.28m$ 、床面積約 $9.1m^2$ である。柱穴の直径は $22 \sim 56cm$ で、深さは $14 \sim 53cm$ である。SP69、89から出土した土師器片から、建物の時期は中世と考えられる。

#### SB20 (第11図、図版6)

B区南半に位置する1間 $\times$ 1間の建物で、棟方向は $N 3^{\circ} W$ 。建物規模は桁行 $4.96m \times$ 梁行 $2.56m$ 、床面積約 $12.7m^2$ である。柱穴の直径は $34 \sim 70cm$ で、深さは $19 \sim 65cm$ である。SP110から出土した土師器片から、建物の時期は中世か。

SB20



#### ③ 土坑 (第12~18図、図版7~9)

今回の調査で36基の土坑が確認された。検出された土坑の多くは遺存状態が不良で、上面がかなり削平を受けているものと考えられる。調査区別に見ると、A区が16基、B区が14基、C区が6基で、A区とB区に土坑は集中していた。平面形は円形が3基、長円形が18基、不整形が15基で、長円形が最も多かった。

#### SK35 (第12図、図版7)

A区西側SB8の南西に位置する。不整形で、規模は長軸 $445cm$ 、短軸 $234cm$ 、深さは約 $72cm$ 。埋土は黒褐色粘質土の単層である。弥生土器の壺(74・75)や甕(77~80)等が出土しており、弥生時代前期末~中期後半の遺構と考えられる。

第11図 掘立柱建物跡実測図(4)

第1表 掘立柱建物跡一覧表

遺構 番号	地区	規模(間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時期	備考
				桁 行	梁 行			
				建物の南西隅から (m)	建物の南西隅から (m)			
S B 11	A	1×1	N79° W	4.06	2.60			
S B 12	A	1×1	N78° W	2.88	2.76			
S B 13	A	1間×1	N3° W	1.64間	2.34			
S B 14	A	1間×1	N3° W	3.46間	2.30			
S B 15	A	1間×1	N70° W	2.94間	2.26	土師器片	中世	
S B 16	B	1×1	N8° W	4.00	3.10			
S B 17	B	2×1	N16° E	4.72(2.40,2.32)	2.24	弥生土器片	弥生時代	
S B 18	B	1×1	N14° E	4.32	1.52	土師器片	中世	
S B 19	B	1×1	N4° W	3.52	2.88	土師器片	中世	
S B 20	B	1×1	N3° W	4.96	2.56	土師器片	中世	
S B 21	B	1×1	N3° E	3.92	3.00	土師器片	中世	
S B 22	D	1×1	N40° E	2.00	1.60	土師器片	古墳時代	
S B 23	B	1×1	N51° W	2.72	2.04	土師器片	中世	
S B 24	B	1×1	N50° W	5.04	1.84	土師器片・瓦質土器片	中世	
S B 25	B	1×1	N50° W	5.56	1.76			
S B 26	B	1×1	N40° E	4.38	2.76	土師器片	中世	
S B 27	B	1×1	N47° W	3.40	2.88	土師器片	中世	
S B 28	B	2×1	N19° E	4.60(2.12,2.48)	2.20			
S B 29	B	1×1	N9° W	4.92	3.88			
S B 30	B	1×1	N3° W	4.00	2.28	土師器片	中世	

**SK26 (第13図、図版8)**

A区南半部東側でSB7の南西に位置する。長円形で、規模は長軸399cm、短軸183cm、深さは約38cm。埋土は3層に分かれ、上層は褐灰砂質土、中層は暗灰質粘質土、下層は黒褐色粘質土である。弥生時代中期初頭と比定される壺や甕が出土している。

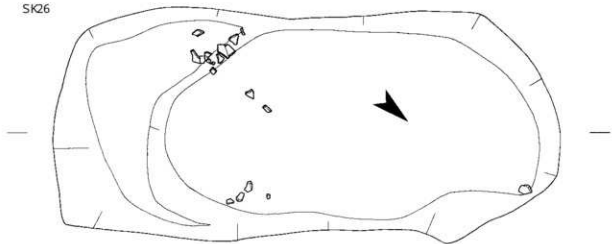
**SK6 (第13図、図版7)**

A区中央部に位置する。不整形で、規模は長軸136cm、短軸156cm、深さは約34cm。埋土は灰黄褐色粘質土の単層である。埴ね鉢(48)が出土しており、中世の遺構と考えられる。

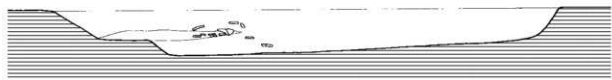


第12図 SK35実測図

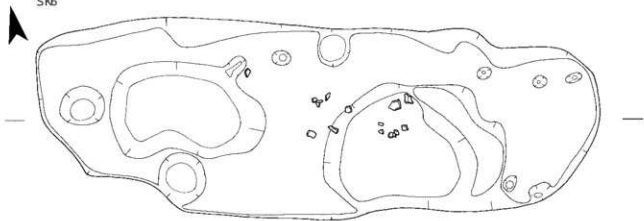
SK26



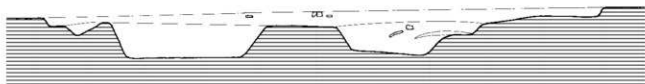
12.40m



SK6

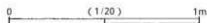
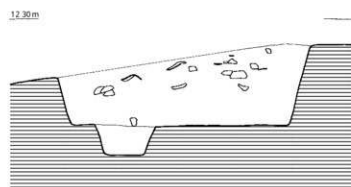
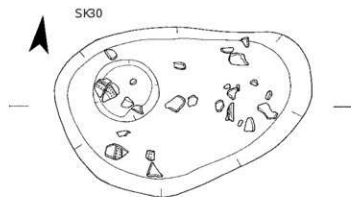
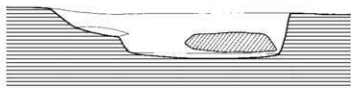
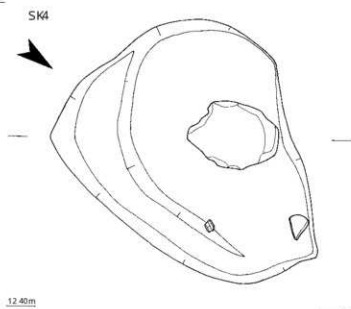


12.30m



0 (1/30) 2m

第13図 SK26・6 実測図



第14図 SK4・30実測図

**SK4 (第14図、図版7)**

A区中央部に位置する。不整形で、規模は長軸146cm、短軸123cm、深さは約23cm。埋土は灰褐色粘質土の単層である。中央部に作業台とみられる扁平な礫石が置かれていた。土師器の皿(47)等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

**SK30 (第14図、図版7)**

A区西側でSB8の北東に位置する。長円形で、規模は長軸132cm、短軸90cm、深さは約48cm。埋土は黒褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕(67)や壺(68)等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

**SK1 (第15図、図版8)**

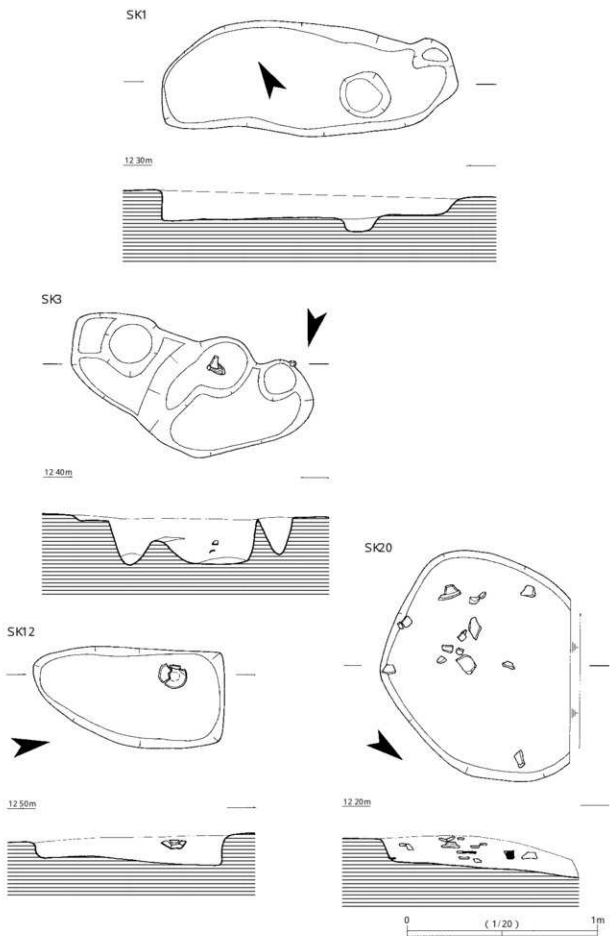
A区中央部でSB4の南西側に位置する。長円形で、規模は長軸155cm、短軸62cm、深さは約20cm。埋土は褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕(44)等が出土しており、弥生時代中期の遺構と考えられる。

**SK3 (第15図、図版7)**

A区中央部に位置する。不整形で、規模は長軸132cm、短軸66cm、深さは約24cm。埋土は褐色粘質土の単層である。土師器の碗(45・46)等が出土しており、12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

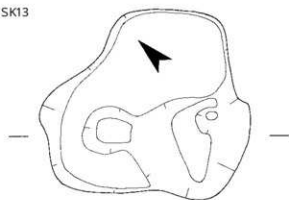
**SK12 (第15図、図版8)**

A区中央部に位置する。長円形で、規模は長軸100cm、短軸52cm、

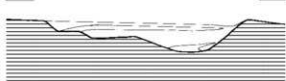


第15図 SK1・3・12・20実測図

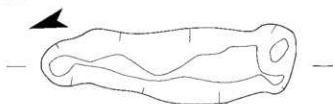
SK13



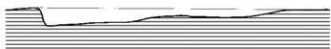
10 90m



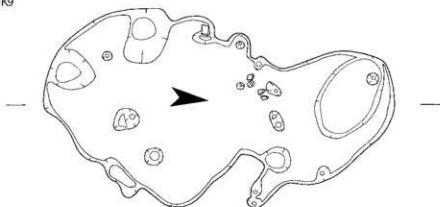
SK15



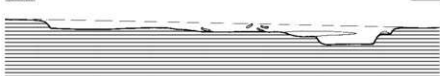
11 00m



SK9



11 00m



0 (1/30) 2m

第16图 SK13・15・9实测图

深さは約15cm。埋土は暗灰黄色粘質土の単層である。後世の水田化のために上部が削平されている。土師器の杯(50)が出土しており、12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

**SK20 (第15図、図版6)**

A区東側でSB7の中で検出された長円形の上坑で、上部はSB7に切られている。規模は長軸130cm、短軸106cm、深さは約16cm。埋土は暗褐色粘質土の単層である。弥生土器(53・54)等が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

**SK13 (第16図)**

B区南半部に位置する。不整形で、規模は長軸165cm、短軸144cm、深さは約32cm。埋土は黒褐色粘質土の単層である。土師器の杯(51)等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

**SK15 (第16図)**

B区南半部に位置する。不整形で、規模は長軸198cm、短軸63cm、深さは約14cm。埋土は褐灰色砂質土の単層である。土師器の皿(52)等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

**SK9 (第16図、図版9)**

B区北半部西側に位置する。不整形で、規模は長軸274cm、短軸152cm、深さは約14cm。埋土は褐灰色砂質土の単層である。弥生土器の甕(49)等が出土しており、弥生時代前期末の遺構と考えられる。

**SK27 (第17図、図版8)**

B区北半部西側でSB6の北東に位置する。不整形で、規模は長軸240cm、短軸128cm、深さは約22cm。埋土は褐灰色粘質土の単層である。弥生土器の甕や甕(55～66)等が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

**SK33 (第17図、図版9)**

C区北半部西側に位置する。長円形で、規模は長軸113cm、短軸84cm、深さは約12cm。埋土は黒褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕(69～71)等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

**SK34 (第17図、図版9)**

C区中央部西側に位置する。長円形で、規模は長軸88cm、短軸73cm、深さは約22cm。埋土は灰黄褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕(72)等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

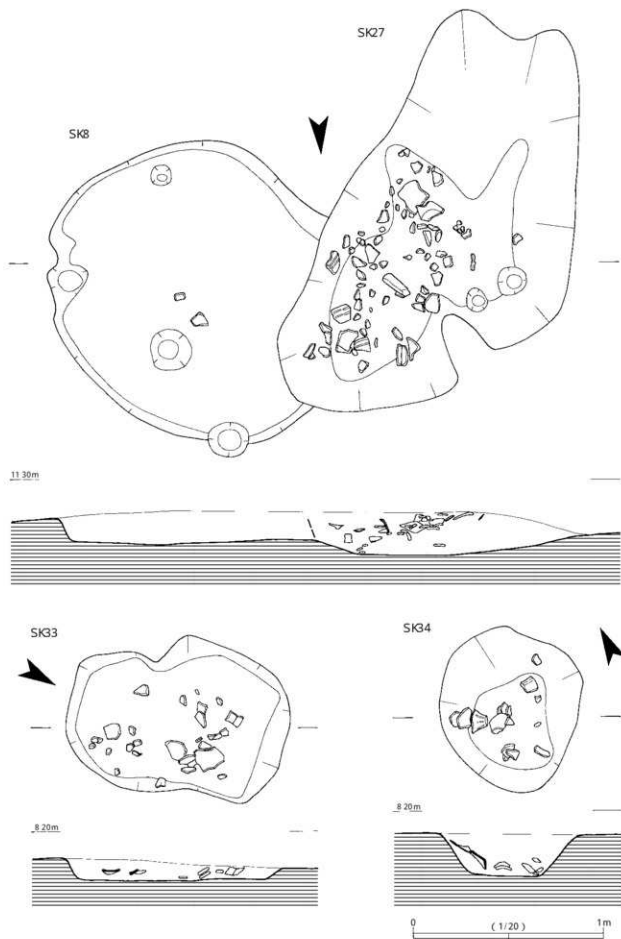
**SK36 (第18図)**

C区中央部西側に位置する。円形で、規模は長径42cm、短径40cm、深さは約32cm。埋土は褐灰色粘質土の単層である。弥生土器の甕(84)等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

**④ 埋甕遺構 (第19図、図版9)**

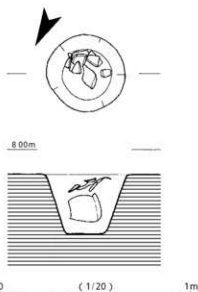
B区南半部東側に位置する。楕円形で規模は直径約50cm、深さ15cm。甕本体は瓦質焼成である。削平により口縁～胴部は失われている。埋納遺物はなく、用途も明確ではないが、中世の終わり～近世の遺構と考えられる。





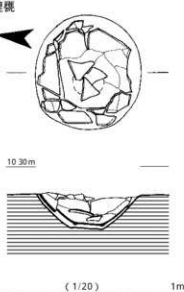
第17図 SK 8・27・33・34実測図

SK6



第18図 SK 36実測図

埋篋



第19図 埋篋遺構実測図

### ⑤ 柱穴

今回の調査によって検出された柱穴は約600個で、そのうち遺物を含むものが231個であった。

#### SP 229 (第20図、図版 9)

C区北半部東側に位置する。円形で、直径約40cm、深さ約45cm。良好な状態で土師器の杯(91~93)や緑釉陶器の碗(94)が出土しており、10~11世紀の遺構と考えられる。

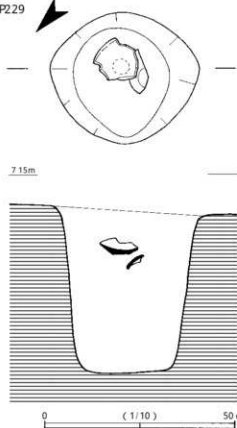
#### ⑥ 遺物包含層 (第21図、図版 9、10)

C区とD区で遺物包含層を確認した。

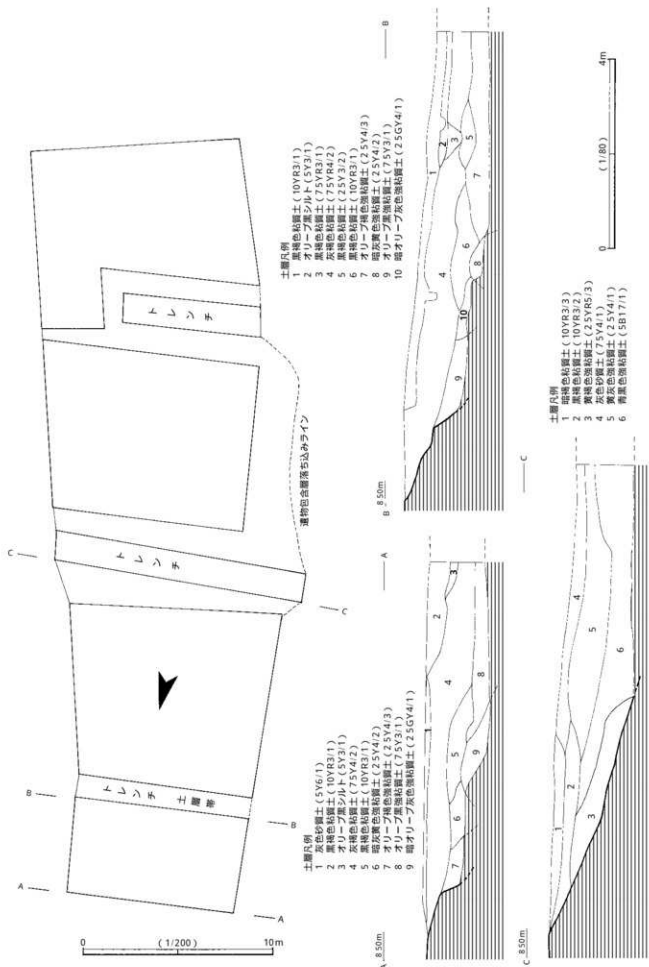
C区は栗野川と宮迫川沿いに発達した自然堤防の背後の低地である。C区遺物包含層は地形的には南西方向から北東方向に緩やかに傾斜しながら延びる谷状の落ち込みに堆積した包含層である。現在の栗野川の左岸に隣接しており、北東方向に落ち込む地形は、河岸や水辺に連なっていく斜面と考えられる状況にある。この遺物包含層下の地山面を確認するためのトレンチを重機で掘削したが、地山面が急激に落ち込んでおり、トレンチ②では、包含層落ち込みラインから東へ約5.0m、深さ1.6mまでしか地山面を確認することができなかった。

土器の出土状況についてみると、C区遺物包含層の北半西側上層では、古墳時代の高坏、小型

SP229



第20図 SP 229実測図



第21図 C区遺物包含層土層図

丸底土器、ミニチュア土器等の祭祀にかかわる土器が多量に廃棄された状況が検出された。また、その下層からも、弥生時代前期末の壺や甕の原形をとどめる土器片がまとまって検出され、その中に石剣も確認された。祭祀に使用された土器が一括廃棄されたものと判断される。

遺物包含層の北半東側上層では、須恵器、土師器、裂瑣土器、緑釉陶器、輸入磁器、土鍬等が出し、中層からは弥生時代後期～古墳時代前半の土器が出しした。中層では山陰系の土器がみられた。また、下層からは弥生時代前期末～中期の土器が多量に出し、北部九州系や瀬戸内系の土器もみられた。トレンチ①からは、弥生時代中期、北部九州だけで埋葬用として使われた壺棺の破片や丹塗り壺の土器片も出土している。

D区遺物包含層は黒褐色粘質土が厚さ40～50cmほど、堅穴住居跡や柱穴等の遺構を覆う状態でD区全体に堆積していた。主な出土遺物は縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器である。

## (2) 遺物

### 1 竪穴住居跡出土土器 (第22・23図、図版11~14)

**SB 1 (1・2)** 1・2は弥生土器壺の口縁部である。1は如意形口縁、2はくの字口縁である。ともに混入品と考えられる。

**SB 2 (3)** 3は土師器高杯である。杯底部と脚柱の接合部が残存する。

**SB 3 (4)** 4は壺形土器の底部で、上げ底である。

**SB 4 (5)** 5は山陰系の複合口縁の土器である。口縁部は外反する。

**SB 5 (6~11)** 6~8・10は壺形土器の口縁部である。6・7は口縁部がくの字状に屈曲し、7は跳ね上げ口縁である。8は鐏形口縁の壺形土器の口縁部である。10はくの字状に屈曲する口縁をもつ土師器の壺形土器である。胴部は大きく張ると思われる。9は複合口縁壺の口縁部である。11は壺形土器の底部で、平底である。

**SB 6 (12)** 12は壺形土器の口縁部である。口縁端部はやや跳ね上げ気味である。

**SB 7 (13~25)** 13・14は土師器高杯で、床面より出土した。13は杯部が稜線によって口縁部と体部に分かれる有稜高杯である。口縁部は直線的に外側に開き、脚部は円錐状に緩やかに開く。接合には充楔技法が用いられていると考えられる。14は杯底部と脚柱部が残存する。以下は埋土より出土した弥生土器である。15は如意形口縁の壺形土器である。口縁端部に刻目を施し、口縁直下には1条沈線が確認できる。16・17は内折口縁をもつ壺形土器である。16は口縁部外面にヘラ状工具による2条沈線を施し、注口状の内面凸帯が巡る。18は逆し字口縁の鉢形土器である。口縁部上面にヨコナデによる平坦面をつくる。19は壺形土器の口縁部である。口唇部をやや拡張させる。20は壺形土器の口縁部である。21は鐏形口縁の高杯形土器の口縁部である。口縁部上面はほぼ水平で、内面の突出は弱い。22・23は壺形土器の口縁部である。22はくの字口縁で、23は跳ね上げ口縁である。24・25は壺形土器の底部である。ともに平底である。

**SB 8 (26~35)** 26~30は壺形土器の口縁部である。26・27は口縁部がくの字状に屈曲し、外面にハケ目痕が残る。28・29は跳ね上げ口縁を呈し、28は口縁直下に三角凸帯、29には押圧凸帯が巡る。30は鐏形口縁である。口縁部上面はほぼ水平で、内面の突出がみられ、口唇部はコの字状に仕上げられている。須玖Ⅱ式段階に位置付けられると考える。31は瀬戸内系の無頸蓋ないし脚付鉢の口縁部と思われる。外面には頂部に刻口のある凸帯を施す。口縁部上面は内傾し、内面突出がみられる。32~35は壺形土器の底部で、いずれも平底である。26~35は弥生時代中期後半の所産である。

**SB 9 (36~40)** 36は小皿丸底土器で、やや内湾気味に外側に開く口縁部をもつ。37は山陰系の数形器台である。やや外反気味に外側に開く。器面が磨滅しており、受部か脚部かは不明である。38は壺形土器の胴部である。複雑な縦横方向の貝殻羽状文を施す。それらを区切る縦方向の2条貝殻沈線がみられる。内外面ともハケ調整であるが、外面にはミガキ調整が加えられている。39は内折口縁の壺形土器である。口縁部外面にハケ状工具による2条沈線が巡る。40は跳ね上げ口縁の壺形土器の口縁部である。38~40の弥生土器は混入品であろう。

**SB 10 (41~43)** 41は壺形土器の口縁部である。口縁部外面に3条1組の櫛状工具による斜線文を施す。42は口縁部が緩やかに外湾して開く壺形土器である。外面にハケ目痕がみられる。43は壺形

土器の底部である。やや凸レンズ状を呈す。

## 2 土坑出土土器 (第23・24図、図版13~16)

SK 1 (44) 44は壺形土器の口縁部である。くの字状に屈曲する。

SK 3 (45・46) 45・46は土師器碗である。底部に断面三角形の高台を付す。底部外面の切り難し痕は不明である。

SK 4 (47) 47は土師器皿である。底部外面の切り難し痕は不明である。

SK 6 (48) 48は土師質の握ね鉢である。内面にはハケ目が残る。外面のハケ目はナデ滑されている。

SK 9 (49) 49は壺形土器の口縁部である。如意形口縁を呈する。

SK 12 (50) 50は土師器杯である。器壁が薄く、体部がやや内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転系切り痕がみられる。

SK 13 (51) 51は土師器杯の底部である。底部切り難しは回転系切りによる。

SK 15 (52) 52は土師器皿である。底部外面の切り難し痕は不明である。

SK 20 (53・54) 53は高杯形土器の口縁部と思われる。鋤形口縁で、口唇部はコの字状に仕上げられている。内面突出は断面三角形である。54は壺形土器の底部で、平底である。

SK 27 (55~66) 55~59は壺形土器の口縁部である。55は逆L字口縁で、56~59はくの字口縁である。また、58・59は口縁端部を跳ね上げる。56~58の口縁下には1条の三角凸帯を付す。60は壺形土器の口縁部である。口縁部外面には円形浮文を付す。口縁部上端には押圧凸帯、内面に注口状の貼付凸帯を施す。61は口縁部がやや垂下する壺形土器の口頸部である。口縁部は大きく開き、外反する。垂下部に5条1組の櫛状工具による山形文が認められる。頸部には4条の三角凸帯が巡る。62・63は須玖式系の壺形土器と考えられる。62は胴部で2条の稜角付凸帯を付す。63は胴部で3条の三角凸帯が確認できる。64は壺形土器の口縁部である。垂下口縁を呈し、垂下部にはヘラ搨山形文が施されている。65は壺形土器の口縁部である。長頸口壺である。66は壺形土器の底部である。器壁はやや厚く、平底である。これらは弥生時代中期に属する土器である。

SK 30 (67・68) 67は壺形土器の口縁部である。如意形を呈する。68は有段口縁壺である。肩部には貝殻羽状文が施され、羽状文の上に1条ヘラ描沈線が、下に2条ヘラ描沈線が巡る。体部は内外面ともハケ調整後、ミガキ調整が行われていると思われる。

SK 33 (69~71) 69~71は如意形口縁の壺形土器である。69は口縁下に2条のヘラ描沈線がみられる。70の口唇部には刻目を施し、口縁下には2条のヘラ描沈線が巡る。71は胴部がやや張る。口唇部には刻目を有し、口縁下には3条のヘラ描沈線が巡る。

SK 34 (72) 72は壺形土器である。平底の底部より体部はやや内湾気味に立ち上がる。如意形口縁で、口縁下には1条のヘラ描沈線を有す。

SK 35 (73~83) 73は縄文土器の口縁部である。縄文時代前期、曾畑式の深鉢形土器で、滑石が多く混入する。内外面には列点刺突文が施されている。曾畑式1期~Ⅱ期に位置付けられる。74は壺形土器の胴部である。ヘラ搨の右軸羽状文が施され、その上に段が確認できる。内外面ともミガキ調整が行われている。75は壺形土器の胴部である。胴部最大径部に幅広の凸帯を付し、2条の貝殻沈

線文の間に竹管文を施す。その直上には縦方向の貝殻羽状文と貝殻木葉文が確認できる。76は無須壺である。胴部が張り、逆L字状の口縁を付ける。77-83は壺形土器の口縁部である。77-80・83は内面突出が明瞭な勳形口縁を呈する。79・80は口縁端部が垂下する。77・78・80・83には口縁下に三角凸帯が認められる。81は口縁部が内湾して立ち上がる。82はくの字口縁の壺形土器で胴部が張る。73の縄文土器は混入品で、74-83の弥生土器が遺構に伴うものと考えられる。

**SK 36 (84)** 84は壺形土器である。平底の底部より体部はやや内湾気味に立ち上がる。胴部はやや張り、最大径は中位よりやや上方にある。口唇部に刻目を施し、口縁下に1条のヘラ描沈線が巡る。

**埋竈遺構 (85)** 85は瓦質の土器である。内面には同心円状のタケキ目痕とハケ目痕が認められる。外面の調整痕はナデ消されている。

### 3 柱穴出土土器 (第25図、図版16・17)

**SP 108 (86)** 86は白磁碗で、底部が欠損している。

**SP 110 (87)** 87は土師器杯である。体部がやや屈曲し、口縁部が開く。

**SP 130 (88)** 88は如意形口縁の弥生土器壺である。外面にハケ目痕、内面にミガキ痕が認められる。

**SP 131 (89)** 89は如意形口縁の弥生土器壺である。口唇部に刻目を施し、口縁下に1条のヘラ描沈線が巡る。内外面にハケ目調整が行われている。

**SP 142 (90)** 90は須恵器の杯身である。体部がほぼ直線的に立ち上がる。底部外面の回転ヘラ切り痕はナデ消されている。

**SP 229 (91-94)** 91-94は一括して出土した良好な資料である。91-93は土師器杯である。体部はほぼ直線的に立ち上がるが、93は口縁部が外反する。底部の切り離しは回転系切りによる。94は緑軸陶器の碗である。底部の切り離し痕は不明で、低い高台を付す。胎土は橙色で、釉薬の遺存状態はよくない。

**SP 230 (95)** 95は土師器杯の底部である。底部の切り離しは回転系切りによる。底部には断面三角形の高台を付す。

### 4 遺物包含層出土土器 (第26-40図、図版17-36・40)

#### A・B区遺物包含層出土土器 (96-101) (第26図、図版17)

96は弥生土器壺の口縁部である。内外面にハケ目痕が認められる。97は弥生土器壺の底部である。上げ底で胴部との境がくびれる。98は土師器皿である。底部外面に回転系切り痕を残す。99-101は土師器杯である。99は器高が約3cmで、体部が直線的に外側へ大きく開く。底部外面には回転系切り痕がみられる。100は体部がほぼ直線的に立ち上がる。底部外面の切り離し痕は不明である。101は体部がやや内湾気味に立ち上がる。

#### C区遺物包含層出土土器 (第27-39図、図版17-34・40)

##### 弥生土器 (102-224) (第27-36図、図版17-28・40)

102-150は壺形土器である。

102・105・106は有段口縁壺である。102は肩部に段がみられ、4条のヘラ描沈線とヘラ描羽状文からなる文様帯を有す。口唇部平坦面には2条沈線を巡らす。106の頸部内面にはミガキの痕跡が認められる。103は壺形土器の胴部で肩部に段を有す。肩部文様帯には縦方向の4条ヘラ描沈線により区画されるヘラ描羽状文を施す。107は半球形の胴部で最大径は中位にある。肩部には段を有し、縦横方向のヘラ描羽状文を巡らす。縦方向の2条ヘラ描沈線により区画される。頸部には縦方向の3条ヘラ描沈線が肩部より延びる。底部には1条のヘラ描沈線が巡る。103・107の外面にはハケ目痕やミガキ痕が残る。104は肩部に段を有し、ヘラ描有軸羽状文とヘラ描重弧文を施す。内面にはミガキ痕がみられる。

108・109は小型の壺形土器である。108は有段口縁壺である。肩部の段下に3条のヘラ描沈線を巡らす。口縁部には1箇所穿孔がある。外向には胴部から底部にかけて明瞭な黒斑が認められる。109の肩部文様帯は貝殻羽状文と貝殻木葉文からなる。肩部の段は認められない。口縁部の内面凸帯は1箇所切れる。110～112の壺形土器は肩部に段を確認できる。肩部文様帯は貝殻羽状文からなり、上下の沈線は二枚貝の腹縁によるものである。112は胴部最大径が上位にあり、羽状文帯の拡幅化がみられる。いずれも外面には丁寧なミガキ調整が施されている。113の肩部文様帯は貝殻羽状文で構成される。最下段は縦方向と横方向の羽状文からなる。内外面にはミガキ調整が行われている。114は胴部が張る有段口縁壺である。肩部に段を有し、文様帯は貝殻有軸羽状文、貝殻山形重弧文からなる。有軸羽状文は12単位で方向を変えろと思われ、山形重弧文は基本的に3つの山形文と1つの重弧文が1単位となる。口唇部平坦面には2条の貝殻沈線が巡る。内外面とも丁寧なミガキ痕が残る。115は主文様帯である貝殻羽状文の下に貝殻山形文を施す。頸部の沈線は多条化する傾向を示すが、肩部の段は残る。内外面ともハケ調整の後ミガキ調整が行なわれている。116・117は半球形の胴部で最大径は中位にある。116の肩部には貝殻羽状文と貝殻山形重弧文が施されているが、114に比べ施文が粗雑である。肩部には段を有し、内外面にも丁寧なミガキ痕が残る。117は器面が磨減しており、文様の遺存状態はよくないが、貝殻重弧文が施され、さらにそれを区切る縦方向の貝殻沈線が確認できる。肩部の段の有無は不明である。118は肩部文様帯の上下にタテハケによる段が形成されている。無鋸歯の二枚貝腹縁による斜格子文が巡る。内外面ともハケ目痕が多くみられ、胴部外面に僅かにミガキ痕が認められる。119～127は胴部または胴部である。文様帯には貝殻有軸羽状文(119)、貝殻有軸羽状文と貝殻鋸歯文の組み合わせ(120)、貝殻羽状文と貝殻山形重弧文の組み合わせ(121・122)や貝殻羽状文と貝殻木葉文、貝殻重弧文の組み合わせ(124)がある。123には刺突文と貝殻木葉文が確認できる。125の肩部文様帯には上から貝殻斜格子文、貝殻重弧文が施される。126は肩部に三角凸帯を付し、その直上に2条、直下に3条の刺突文が巡る。さらにその下に貝殻羽状文が確認できる。127には縦方向のハケ目調整がなされ、さらに横方向に5条1組の溝描直線文が施される。119・123・124・125は肩部に段を確認できる。128は壺形土器の口縁部である。朝顔形に大きく開く。口縁部上面に肥厚帯を付し、ヘラ描鋸歯文が巡る。129は壺形土器である。胴部最大径部に幅広の凸帯を付し、3条のヘラ描沈線が巡る。胴部上半全体が文様帯である。頸部には7条のヘラ描沈線を施す。胴部には貝殻羽状文、貝殻鋸歯文を施し、それらは縦方向の貝殻有軸羽状文によって区切られる。

130～133は壺形土器の口頸部である。頸部には多条の沈線が巡り、130は二枚貝の腹縁、131～133



はヘラ状工具によるものである。130には口縁部上面に肥厚帯を、やや下がった位置に内面凸帯を付す。口唇部に2条の貝殻沈線を施す。131には内面凸帯を付し、口唇部に1条のヘラ指沈線が認められる。133は口唇部にヘラ指沈線が巡り、さらに刻目を施す。頸部には段を有す。134は壺形土器の頸部である。3条の三角凸帯を付す。135は直口壺の口頸部である。口唇部に刻目を施し、弱い内面突出がみられる。口縁下には2条の三角凸帯が巡る。136・137は偏球形を呈する壺形土器である。137は平底である。138～143は壺形土器の口頸部である。口縁部がいわゆる垂下口縁状(142)もしくはその兆候が認められるもの(139・140・141)や跳ね上げ状のもの(143)がある。138・139・141・142には施文原体に櫛状工具の利用がみられる。138の口縁部内面には上から3条櫛指直線文、3条櫛指波状文、3条櫛指直線文、そして2条1組の工具による刺突文が巡る。139の口唇部には3条櫛指斜格子文を施す。口縁部内面には上から4条1組の櫛状工具による山形文、二枚貝の腹縁押圧による文様が巡る。頸部に押圧凸帯を有す。141の口縁部外面には4条1組の櫛状工具による斜格子文を施し、さらに3つ1組の円形浮文を付す。頸部に押圧凸帯が認められる。142には垂下部上端に刻目、3条1組の櫛状工具による斜格子文が巡る。頸部に2条の押圧凸帯が巡る。

144～149は壺形土器の口縁部である。144は口縁部上面に平坦面をつくり、内面の突出が鋭く、口唇部は凹む。145～149は口縁部の内面突出が顕著となり、いわゆる壺形口縁となる。口唇部はコの字状を呈するか、ヨコナデ調整により凹む。145は口縁部が水平で146～149は垂下する。146は丹塗磨研の壺形土器で口縁端部に1条の沈線が巡る。胎土は精良である。149は口縁部上面に円形浮文を付し、口縁端部に竹管文が施される。144は城ノ越式、145は須玖Ⅰ式、146～149は須玖Ⅱ式併行期に位置付けられよう。150は須玖Ⅰ式併行期に位置付けられる壺形土器である。口縁部には内面突出がみられ、口唇部はヨコナデ調整によりくぼむ。頸部はしまり、胴部は球形に大きく張る。胴部には2条の三角凸帯を付す。底部外面には板状原体によるナデつけ痕がみられる。151は丹塗磨研の壺形土器である。頸部には略文がみられる。頸部と胴部の境には三角凸帯が巡り、胴部は大きく張るものと思われる。内外面には丁寧なミガキ調整が施される。

152～218は壺形土器である。

152～154はいわゆる有段壺である。口縁部からやや下がった位置にタテハケの押圧による段が形成されている。如意形口縁で、いずれも口唇部下端に刻目が施される。155～157・164・168は口縁下に1条沈線が巡る壺形土器である。155・164には口唇部に刻目が施され、168の口縁端部には2条沈線が巡る。157・164は小型の壺形土器で、口径に対して器高が低い。160～163・166・167は口縁下に2条沈線が巡る壺形土器である。161～163は口唇部に刻目が施され、166・167は刻目とともに、2条沈線が巡る。163・167は胴部が張る形態である。158は口縁部がくの字状に屈曲する壺形土器である。口唇部下端に刻目を施す。159は胴部がやや張る壺形土器である。口縁部は端部を巻き込むような玉縁状の形態である。165は小型の壺形土器である。口唇部上端に刻目を有し、口縁下に刺突文が巡る。底部はやや上げ底である。169～174は口縁下の沈線の間や沈線下に刺突文(169～173)または竹管文(174)を施した壺形土器である。口唇部下端には刻目が巡る。170には二枚貝の腹縁によるとみられる2方向の刻目が巡る。170・171は胴部が張り、171は胴径が口径を上回る。175は口唇部下端に刻目を有す如意形口縁の壺形土器である。口縁下の沈線間には不規則に施された刺突文がみられる。176

は口縁部に断面円形の粘土帯を貼り付けた壺形土器である。いわゆる擬朝鮮系無文土器であろう。177・178は口縁下に三角凸帯を有する壺形土器である。177の口唇部下端と三角凸帯には刻目が、178の口唇部にはヘラ状工具による斜格子文が施されている。179～181は逆L字口縁の壺形土器である。180は口唇部に刻目を有し、口縁下に2条の沈線が巡るが、181は無文である。182は壺形土器の底部である。上げ底で胴部との境がくびれる。

183～193は壺形口縁の壺形土器である。内面の突出は明瞭で、187～189のように口径が大きいものは口唇部が丸みを帯びる傾向がある。183には確認できないが、それ以外の口縁直下には三角凸帯を付す。器向は比較的丁寧なナデ調整により仕上げられているが、184・186・189のように胴部外面にハケ目痕が残るものもある。これらの胎土には石英・長石・角閃石等の砂粒を多く含む。焼成は良好である。これらは須玖Ⅱ式併行期に位置付けられよう。194～197は大型壺形土器で、弥生時代に北部九州地域で盛行したいわゆる成人埋葬専用壺棺の一部であると推定される。194は口縁部に口縁下に稜角付凸帯を付す。T字状口縁をなす。口縁部復元径は41.0cmである。195は胴部上半部である。口縁下に稜角付凸帯が巡る。196・197は胴部片である。2条の三角凸帯を付す。これらは同一個体である可能性が高い。内外面に丁寧なナデ調整を行ない、平滑に仕上げているため、ハケ目痕やタタキ痕は確認できない。焼成は良好で、焼き上がりの色調（器表面）は橙色を呈する。また、割れ口から観察できる器壁内の胎土の色調は暗赤褐色である。胴部が張り、全体的に非常に丸味を帯びていると考えられる。弥生時代中期後葉の須玖式壺棺であろう。付編にこれらの資料の胎土に含まれる砂礫の観察結果を掲載した。

198は口縁下に三角凸帯を付す壺形土器である。口縁部上面に肥厚帯を貼り付け二重の口縁部を形成する。田部盆地の下七尾遺跡等で多くみられる内折口縁土器の範疇に入ると思われる。口縁部の2箇所と三角凸帯の頂部に二枚貝の腹縁を押圧した刻目を施す。199～211は口縁部がくの字状に屈曲する壺形土器である。口縁直下に200～202は押圧凸帯を、203～208は三角凸帯を有する。200の凸帯押圧部にはツメ跡と思われる線状の痕跡がみられる。また、200・201・203～211は口縁端部を跳ね上げる。201・205・206・209は口唇部がくぼむ。205の内外面には丹塗が施されている。

212～216は壺形土器で、口縁端を拡張したもの（214・215）、複合口縁のもの（212・213・216）がある。213には口縁部外面に2条の沈線が、215・216は擬間線文が巡る。また、215には口縁下に櫛状工具によるノの字状文が施されている。これらは山陰系の影響を受けたものである。217・218は底部が凸レンズ状を呈する壺形土器である。口縁部はくの字状に屈曲する。218には底部内面にケズリ痕が認められる。

219はいわゆる口縁肥厚帯である。口縁部外面の肥厚帯には4条のヘラ描沈線を施す。口縁部上面は内傾する。肥厚帯には丁寧なミガキ調整がみられる。220・221は瀬戸内系の無頸壺ないし脚付鉢の口縁部と思われる。外面には頂部に刻目のある凸帯を施す。口縁部上面は内傾し、3条1組の櫛状工具による斜格子文が巡り、円形浮文を付す。内面突出がみられる。220・221は同一個体の可能性がある。

222は丹塗磨研の高杯形土器である。口縁部は動形で、内面にはミガキ痕がみられる。223は低脚杯の胴部で、ハの字状に開く。224は脚部である。中空で、5孔の円形透かしが巡ると考えられる。こ

の種の裝飾性のある脚部は備中や備後の第3様式期に散見するが、関連性の有無は定かでない。

#### 古墳時代以降の土器 (第37～39図、図版29～34・40)

225～265は古墳時代の土師器である。

225は山陰系の複合口縁の壺形土器である。口縁部は外反する。226は直口の広口壺である。227は直口の壺形土器である。丸底で、体部内面にはケズリが加えられている。228～234は小型丸底土器である。228～233は壺形土器である。口縁部が直線的に立ち上がるもの(228)と内湾気味に立ち上がるもの(229・231)がある。233は退化した極小の底部をもつ。これらには概ね口縁部にヨコナデ調整、体部外面には斜方向のハケ目調整が施され、体部内面にはケズリが加えられている。230・232には黒斑がみられる。234は鉢形土器である。直線的に外側に大きくに開く口縁部をもつ。235は底部に円盤を貼り付けた小型の壺形土器である。体部内面にはケズリが加えられている。236は口縁端部がやや広がる壺形土器である。

237は脚付の壺形土器である。口縁部は直線的に伸び、胴部内面にはケズリ痕がみられる。238～246は壺形土器である。口縁部が直線的に立ち上がるもの(242・246)と内湾気味に立ち上がるもの(240・241)、外反気味に立ち上がるもの(238・239・243・244・245)がある。また、241は口縁端部を肥厚させており、布留式甕の特徴をもつ。これらには概ね口縁部にヨコナデ調整、体部外面には斜方向または縦方向のハケ目調整が施され、体部内面にはケズリが加えられている。

247～258は高杯形土器である。247・248・251・252・255～257は有稜高杯である。口縁部が直線的に外側に開くもの(247・256)、緩やかに外反して外側に開くもの(248・251・255)がある。255・256は杯部稜線からの口縁部の立ち上がり強く、杯部が深くなる形態である。255・257の中空の脚部は裾部へ円錐状に緩やかに開き、1孔の円形透かしを有す。257の接合には充填技法が用いられていると考えられる。249・250・253・254・258は高杯形土器の脚部である。脚部が円錐状に緩やかに開くもの(258)と脚柱部から脚裾部へ屈曲して開くもの(250・253・254)がある。249には上下2段にそれぞれ2孔、計4孔の円形透かしが確認できる。249の脚柱部は中実で内面にしほり痕がみられる。その他の脚部は中空である。高杯形土器の外面は基本的には丁寧なナデ調整が行なわれている。259・260は低脚杯である。脚部はハの字形に開く。260は体部内外面に丁寧なミガキ調整が施されている。

261は大型の複合口縁の壺形土器である。口縁部への立ち上がりはほぼ直立的。口径22.2cm、頸部内面径14.5cmを測る。体部外面と頸部内面にハケ目痕が残る。体部内面にはケズリ痕が多くみられる。体部には黒斑がみられる。

262は碗形土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が行なわれている。263～265はミニチュア土器である。これらは碗形や鉢形を呈している。

266～277は須恵器である。266～269は杯壺である。天井部中央に266には宝珠状つまみを、267には鉦状つまみを付す。268・269には輪状つまみを付す。270～276は杯身である。270～274の底部には高台を付す。270・271の外面には自然釉が付着している。272の底部内面には「×」と思われるヘラ記号がみられる。すべてロクロ整形。回転ヘラ切り痕はナデ消されている。277は長頸壺である。口縁下に段を有し、頸部に1条の沈線を巡らす。

278～281は土師器碗である。278・280・281は体部が内湾しながら立ち上がる。279は体部がやや内

湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。これらには断面台形もしくはそれに近い高台を付す。279には底部外面に回転糸切り痕が残る。280の底部切り離しは回転ヘラ切りによる。278・281の底部外面の切り離し痕は不明である。282～285は土師器杯である。体部がやや内湾気味に立ち上がるもの(282)とほぼ直線的に立ち上がるもの(283～285)がある。底部外面には回転糸切り痕が認められる。286は土師器皿である。体部が内湾気味に立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りによる。

287～294は緑釉陶器の椀である。291～294の底部にはハの字状に固く高台を付す。胎土は橙色の土師質のもの(287・289～291・293・294)と灰白色の須恵質のもの(288・292)がある。293の釉薬は黄褐色である。

295～302は輸入磁器である。295・297～299・301・302は青磁碗で、296・300は白磁碗である。297の内面にはヘラ状工具や櫛歯状工具による花文が施される。外面には櫛目がみられる。301の足込みには陰刻で花文が施される。302の内面には櫛目がみられる。

303～306は六連式の製塩土器である。内面にはヘラ状工具によるナデつけが行われており、布目痕は不明である。外面には指頭圧痕が認められる。305は底部外面が黒色に変色しており、これは二次焼成によるものと思われる。

#### D区遺物包含層出土土器(307～325)(第40図、図版34～36・40)

307は縄文土器の深鉢形土器である。内外面とも二枚貝の条痕による調整であるが、内面は大部分がナデ調整によって消されている。内面口縁下に1条の沈線が、胴部屈曲部外面の上に二枚貝による2条凹線が巡る。縄文時代晩期前半の岩田Ⅳ類古段階に位置付けられる。

308～313は弥生土器である。308は甕形土器の肩部で段を有す。縦方向の3条貝殻沈線が貝殻状文を区切る。内外面にはミガキ痕がみられる。309は甕形土器の口縁部である。口縁部肥厚帯上面に貝殻鋸歯文を施す。310は口縁部を欠く甕形土器で、丸底気味の底部を有する。311は口縁部と胴部下半を欠く甕形土器である。形態は球形を呈すると思われる。外面にはハケ口痕がみられる。312・313は甕形土器の口縁部である。退化した跳ね上げ口縁で、外面にはハケ口痕が認められる。

314～323は古墳時代の土師器である。314～320は甕形土器である。口縁部が直線的に立ち上がるもの(314～317・319)と内湾気味に立ち上がるもの(318)、外反気味に立ち上がるもの(320)がある。315・317・318・320は胴部が大きく張る。これらには調整が不明であるものを除き、概ね口縁部にヨコナデ調整、体部外面には斜方向または縦方向のハケ口調整が施され、体部内面にはケズリが加えられている。321は広口壺の口縁部である。口縁部は外反気味に立ち上がる。322は高杯形土器の口縁部である。有稜高杯で、緩やかに外反して外側に開く。323は椀形土器である。体部下半内外面に指頭圧痕が残る。

324は緑釉陶器椀の底部である。底部に貼付高台を付す。色調は釉薬がオリブ黒色で、胎土が橙色である。325は土師器皿である。器面が磨減しており、底部外面の切り離し痕は不明である。

#### 5 土製品(第41図、図版36)

**土鍾(326～348)** 23点の土鍾が出土した。土鍾の出土は遺跡が日本海に注ぐ栗野川に隣接しているという地理的要因によるのであろう。326～347は中心部に孔がある筒形の管状土鍾、348は両端

部に孔を開けた棒状上錘である。329は球形の上錘である可能性もある。336・337は他と比べて大きく、杓錘形を呈する。装着した網や対象とした魚の違いを表すのかもしれない。表面はナデ調整が行われており、指頭圧痕が残るものもある。胎土はいずれも精良な粘土である。

**土製勾玉 (349)** A区SK35より出土した。完形品で長さ4.2cm、幅1.3cm、厚さ1.1cm、孔径0.5cmである。表面はナデ調整である。

## 6 玉類 (350~353) (第41図、図版40)

350・351は碧玉製の管玉である。350は長さ9mm、径4mm、孔径2mmである。351は長さ12mm、径4mm、孔径2mmである。いずれも緑灰色である。352はA区SB8より出土したガラス小玉である。長さ5mm、最大径6mm、孔径1.5mmで、色調は淡水色を呈する。353は碧玉製の霰玉である。長さ8mm、最大径6.5mm、孔径3mmで、色調は深緑色を呈する。

## 7 古銭 (354) (第41図、図版40)

354は咸平元宝である。宋の真宗の咸平元年(998年)に鑄た。

## 8 木製品 (355~358) (第41図、図版36)

355~358はC区遺物包含層トレンチ①下層より出土した。建築材と考えられるが、加工痕は明瞭でなく、遺存状態はよくない。

## 9 石器・石製品 (第42図~44図、第2表、図版37~39)

**石鏃 (359~390)** 石鏃は32点出土した。359~389は打製石鏃である。大部分は基部の形状と茎の有無より凹基無茎式石鏃に分類されるものである。凹基の形状は抉りが浅いものが多いが、375のように深い抉りをもつものもある。両面に丁寧な押圧剝離により形態加工しているものがある一方で、片面側に素材面を多く残すものもみられる。386は剝片鏃である。石材には安山岩が多用され、一部に黒色黒曜石や姫島産黒曜石が用いられている。また、387・388は形態や剝離の規模より石鏃以外の器種の可能性もある。389は他の石鏃に比べ断面に厚みがあり、打製石鏃の可能性もある。390は泥岩製の磨製石鏃である。丁寧な研磨調整により両面に逆Y字の明確な稜を有する。よって断面形は切先部で菱形、基部で扁平な六角形を呈する。平基無茎式である。

**石錐 (391)** 391は安山岩製の打製石錐である。横長剝片を素材としており、頭部が大きい。錐部端が欠損しているが、残存部の断面形は菱形に近い。

**打製石斧 (392・393)** 392は玄武岩製、393はA区SK35より出土した安山岩製の打製石斧である。扁平打製石斧で、いずれも刃部を欠損する。表面の風化が激しい。

**磨製石斧 (394~399、403~405)** 394~397は小型石斧である。394・397はA区SK35より出土した資料である。刃部は394・395が蛤刃で、397が向刃に近い形態である。いずれも安山岩製と思われるが、表面の風化が激しく研磨痕は不明瞭である。398・399は小型柱状片刃石斧である。この種の柱状片刃石斧は断面が方形で身に抉りはない。398は左側面に研磨調整が施されていない。扁平片刃石

斧を再加工している可能性がある。石材には泥岩を使用している。399は凝灰岩製である。403～405は太型蛤刃石斧の未製品である。いずれも敲打調整段階で製作を放棄されたものと考えられる。403・405はひん岩、404は凝灰岩製である。

**打製石鎌 (400～402)** 400～402は泥岩製の打製石鎌である。400・401は本来磨製石鎌として製作されたと考えられるが、新たに刃部を作り出し、打製石鎌として使用されたのであろう。400は刃部が内湾気味である。401は使用痕の観察により複数回の刃部形成が確認できる。402はA区SK26より出土しており、破損品を再加工している。

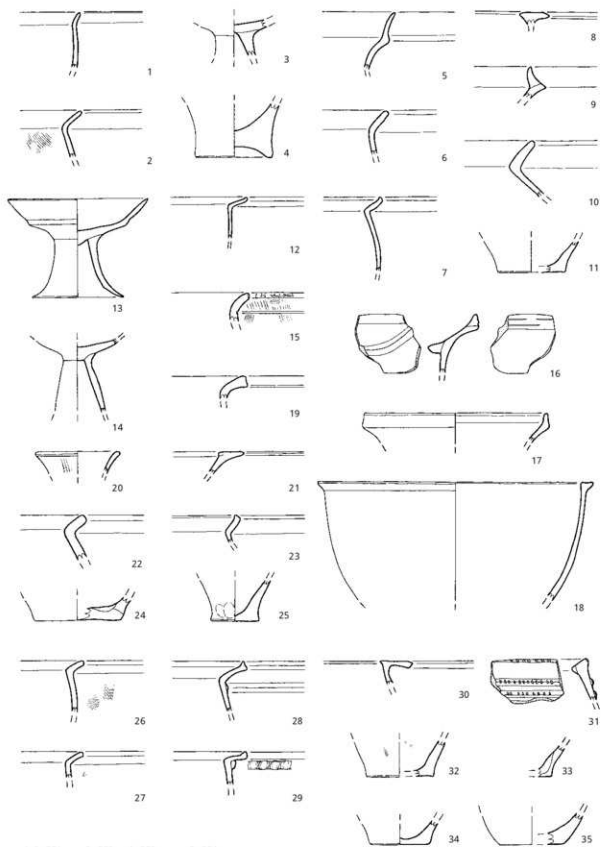
**磨製石施丁 (407・408)** 407・408は泥岩製の磨製石施丁である。407は内湾刃に外湾背を有し、鎌形に近い形態となると思われる。両刃である。408は大型品である。背が外湾するが、欠損により刃部形態は不明である。いずれも両面穿孔である。

**磨製石剣 (409)** 409は磨製石剣である。茎部は欠損している。表面の風化が激しく研磨痕は不明瞭である。身の中央の鎖はなく、断面形は扁平な六角形に近い。石材は砂岩である。

**有孔石製品 (406)** 406は砂岩製の有孔石製品である。穿孔は両面から行われている。欠損品で使用用途は不明である。

第2表 石器・石製品観察表

番号	器種	石材	形態加工	備考	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
359	凹基盤	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	18.4	13.5	2.7	0.4
360	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	18.8	15.8	3.9	0.9
361	凹基盤	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	17.3	14.1	3.2	0.5
362	凹基盤	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	25.9	13.0	3.6	1.0
363	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	18.9	19.4	3.8	1.1
364	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	19.8	12.0	2.9	0.6
365	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	16.9	13.7	3.4	0.5
366	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	18.7	14.2	4.1	0.7
367	凹基盤	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	18.3	14.0	3.9	0.8
368	凹基盤	安山岩	押圧割離	断面。	20.9	14.0	3.2	0.6
369	凹基盤	安山岩	押圧割離		11.9	12.2	3.3	0.3
370	凹基盤	黒色黒曜石	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	15.2	13.2	2.4	0.3
371	凹基盤	安山岩	押圧割離		18.7	16.5	3.3	0.7
372	石鏃	安山岩	押圧割離		12.6	11.8	3.4	0.3
373	凹基盤	黒色黒曜石	押圧割離		15.0	8.7	3.7	0.4
374	凹基盤	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	21.6	15.4	3.0	0.8
375	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	26.7	18.6	4.3	1.2
376	凹基盤	輝島黒曜石	押圧割離		29.7	25.4	6.5	3.4
377	凹基盤	安山岩	押圧割離		28.8	19.1	4.0	1.5
378	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	27.1	21.2	4.5	1.9
379	凹基盤	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	21.5	14.8	3.1	0.9
380	凹基盤	安山岩	押圧割離		20.2	15.2	4.2	1.0
381	凹基盤	安山岩	押圧割離	裏面に素材面を多く残す。	15.3	16.4	3.5	0.6
382	凹基盤	安山岩	押圧割離		20.2	17.6	2.9	0.7
383	凹基盤	安山岩	押圧割離		22.0	18.5	3.4	1.0
384	石鏃未製品	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	22.3	17.8	4.1	1.2
385	石鏃未製品	安山岩	押圧割離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	23.5	16.7	2.2	0.8
386	刮片鏃	安山岩	なし		18.7	13.3	2.8	0.5
387	石鏃?	輝島黒曜石	押圧割離		16.3	17.6	4.6	0.7
388	石鏃?	安山岩	押圧割離	石鏃に比べて割離の規模が大きい。	17.8	15.6	4.4	1.2
389	石鏃?	安山岩	押圧割離	素材打向部一部残存。石鏃の可能性あり。	21.6	12.2	6.4	1.3
390	磨製石鏃	泥岩	磨製	下溝面も磨製。	36.4	17.1	4.0	2.6
391	打製石鏃	安山岩	押圧割離		25.8	21.6	5.3	2.4
392	打製石鏃	玄武岩	直接打撃	表面風化顕著。	164.5	56.8	19.0	278.1
393	打製石鏃	安山岩	直接打撃	表面風化顕著。	92.7	49.6	21.2	127.2
394	磨製石鏃	安山岩	直接打撃+研磨	表面風化が激しく研磨痕不明瞭。	86.0	56.2	23.0	163.5
395	磨製石鏃	安山岩?	直接打撃+研磨	表面風化顕著で刃部研磨痕不明瞭。	60.2	60.4	13.7	71.5
396	磨製石鏃	安山岩	敲打+研磨	表面風化顕著で表面状態が不明瞭。	68.4	47.5	25.0	127.7
397	磨製石鏃	安山岩?	敲打+研磨	表面風化顕著で研磨面が大部分割落。	78.0	43.9	12.7	76.9
398	柱状片刃石鏃	泥岩	磨製	小型。扁平片刃石鏃を再加工か。	68.8	15.2	9.4	17.9
399	柱状片刃石鏃	凝灰岩	磨製	小型。	52.2	14.5	8.5	11.7
400	打製石鏃	泥岩	研磨+直接打撃	磨製石鏃を再加工か。被熱による表面剥離顕著。	44.6	91.3	11.3	65.0
401	打製石鏃	泥岩	研磨+直接打撃	磨製石鏃を再加工か。	43.8	118.1	14.1	103.4
402	打製石鏃	泥岩	直接打撃	破損品を再加工。	57.3	110.3	11.2	90.9
403	磨製石鏃未製品	ひん岩	敲打	大型給刃石鏃の未製品。	135.2	73.5	56.2	784.2
404	磨製石鏃未製品	凝灰岩	直接打撃+敲打	大型給刃石鏃の未製品。	160.4	66.4	57.0	938.3
405	磨製石鏃未製品	ひん岩	敲打	大型給刃石鏃の未製品。	93.9	76.0	67.5	770.9
406	有孔石鏃	砂岩	磨製	表面風化が激しく研磨痕不明瞭。	27.0	30.0	1.1	8.1
407	磨製石鏃丁	泥岩	研磨		61.0	73.6	6.9	52.6
408	磨製石鏃丁	泥岩	研磨		55.1	90.1	7.2	47.9
409	磨製石鏃	砂岩	研磨	表面風化が激しく研磨痕不明瞭。	114.2	35.4	6.3	32.1

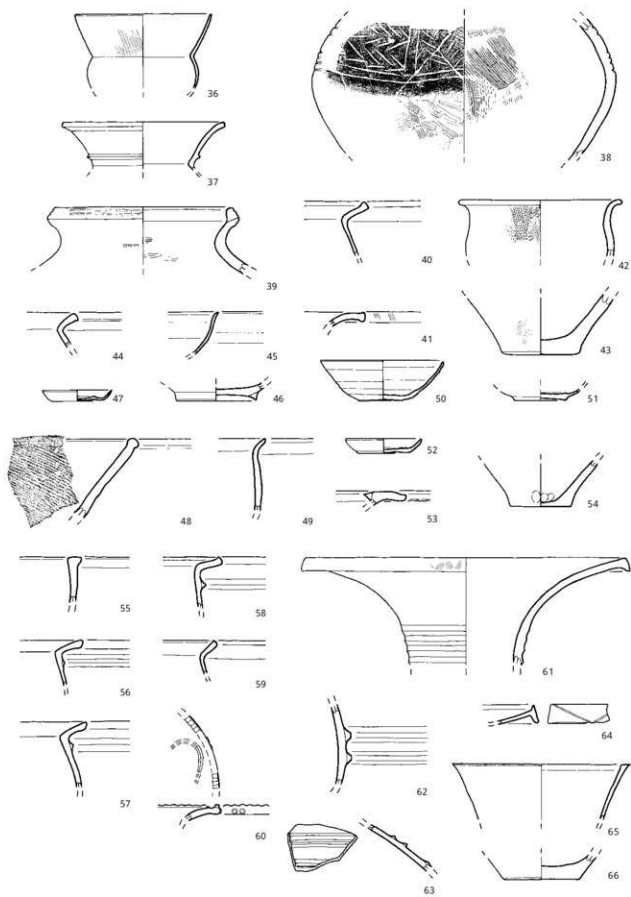


1-2 SB1 3 SB2 4 SB3 5 SB4  
 6-11 SB5 12 SB6 13-25 SB7  
 26-35 SB8

0 (1/4) 20cm

第22图 竖穴住居跡出土土器実測图(1)

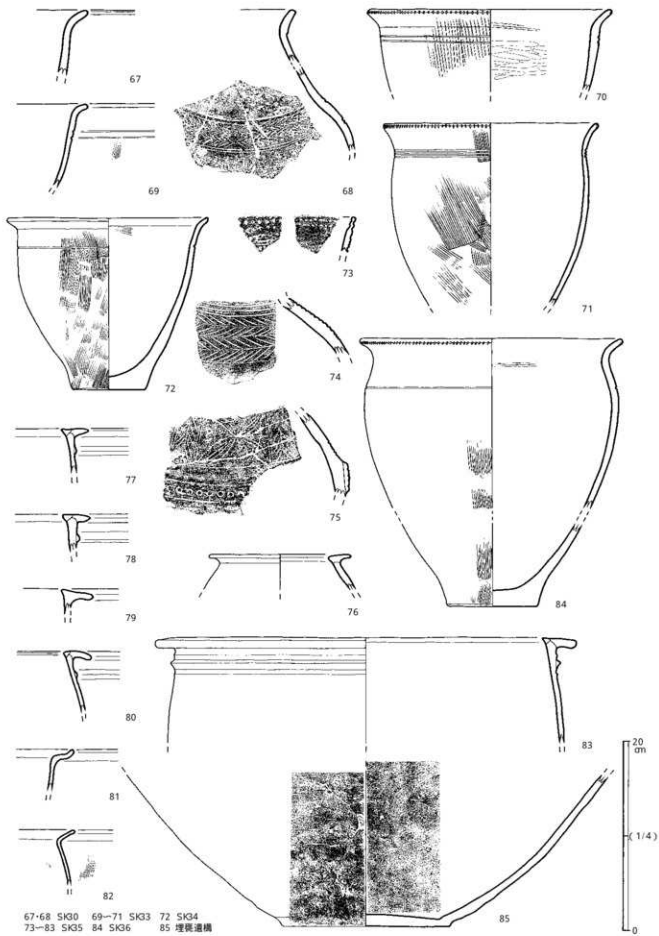




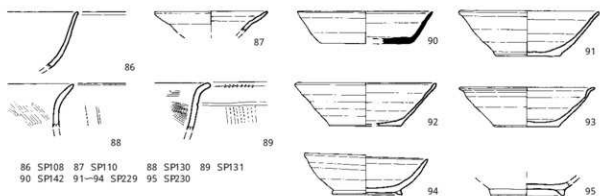
0 (1/4) 20 cm

36-40 SB 41-43 SB10 44 SK1 45-46 SK3 47 SK4 48 SK6  
 49 SK9 50 SK12 51 SK13 52 SK15 53-54 SK20 55-66 SK27

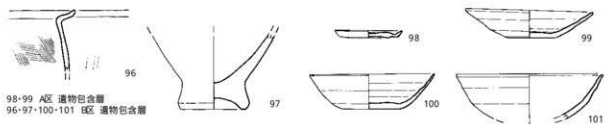
第23图 竖穴住居跡出土土器実測图(2)・土坑出土土器实测图(1)



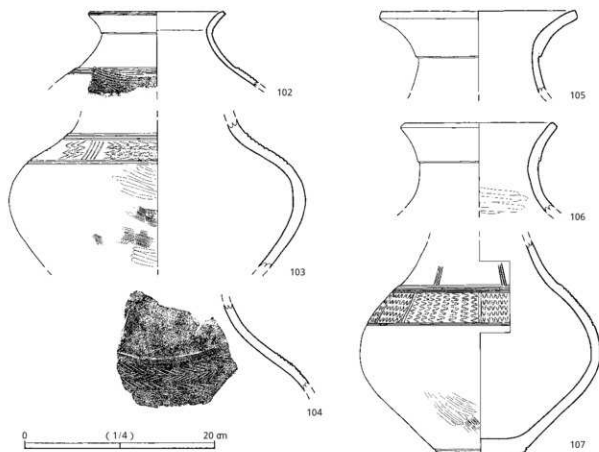
第24区 土坑出土土器実測図(2)



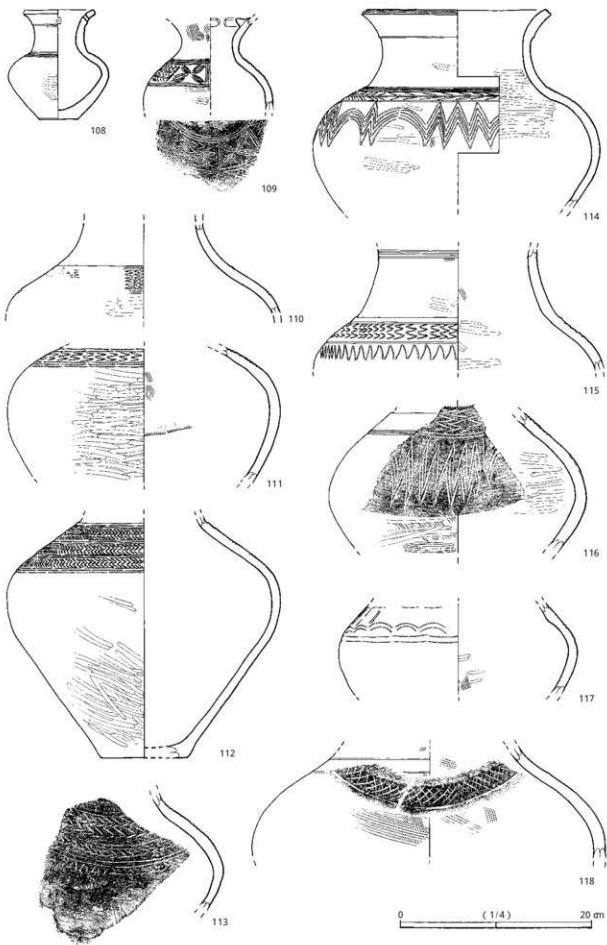
第25图 柱穴出土土器实测图



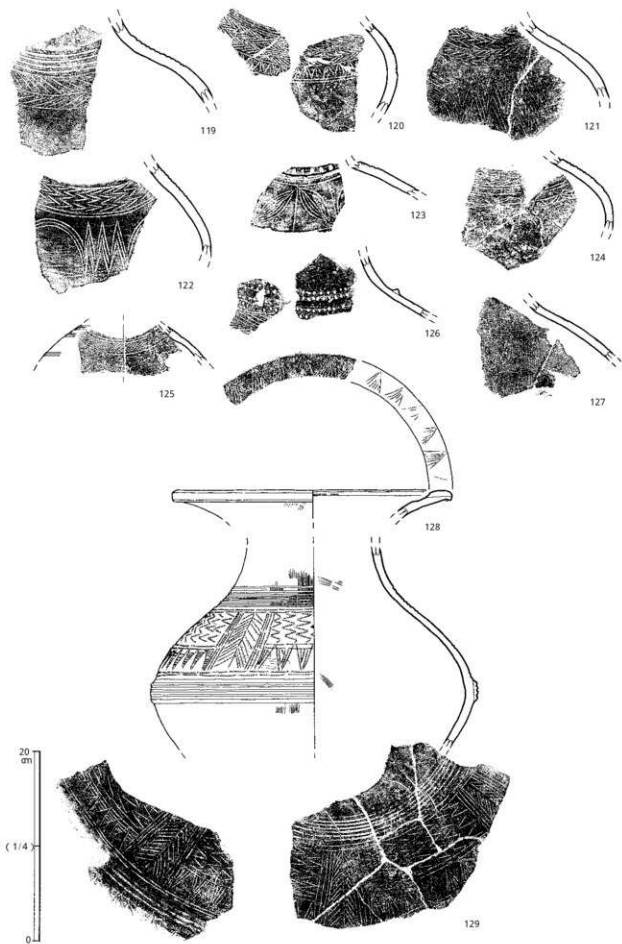
第26图 A·B区遗物包含層出土土器实测图



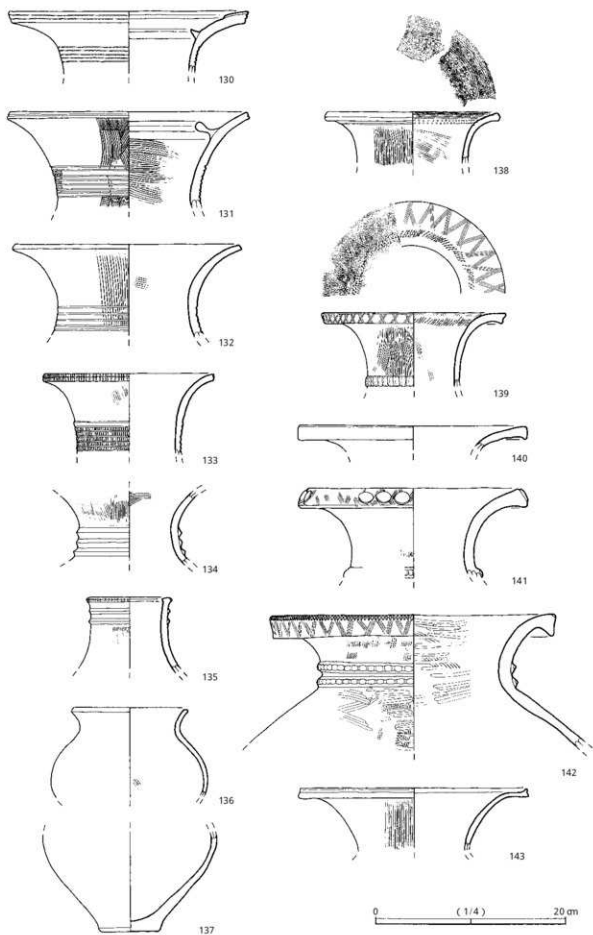
第27图 C区遗物包含層出土弥生土器实测图(1)



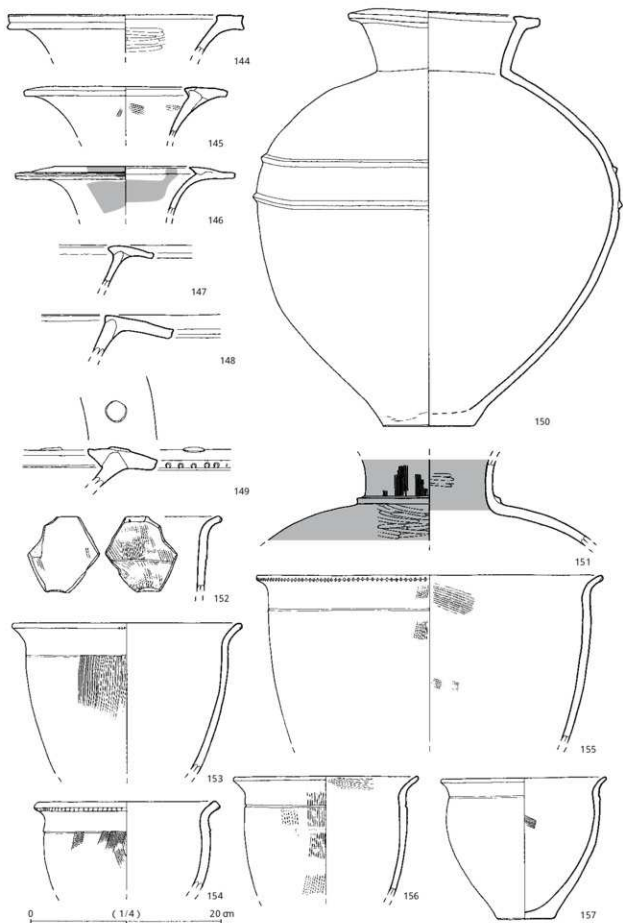
第28图 C区遗物包含层出土弥生土器实例图(2)



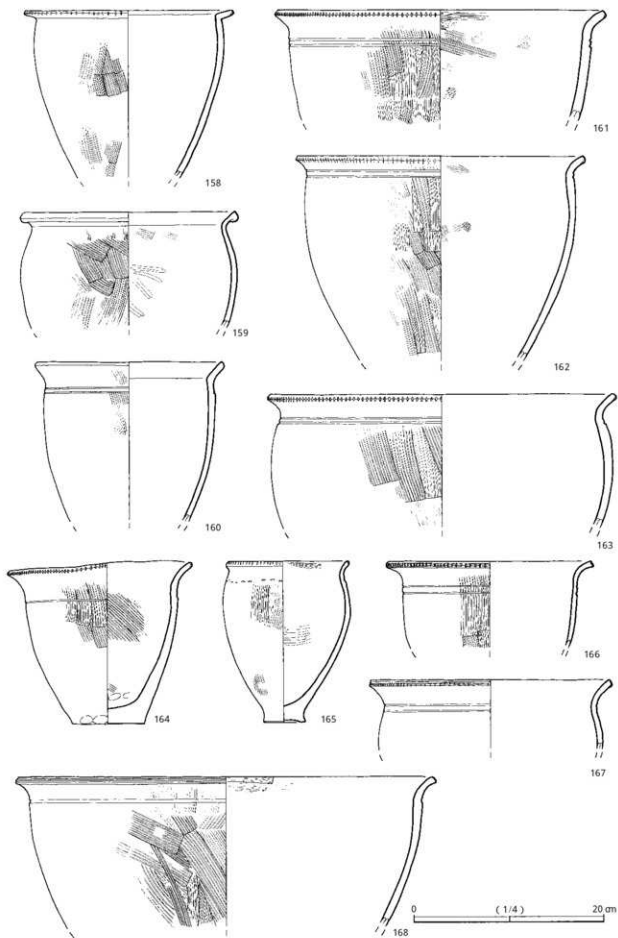
第29图 C区遗物包含层出土弥生土器实测图(3)



第30图 C区遗物包含层出土弥生土器实测图(4)

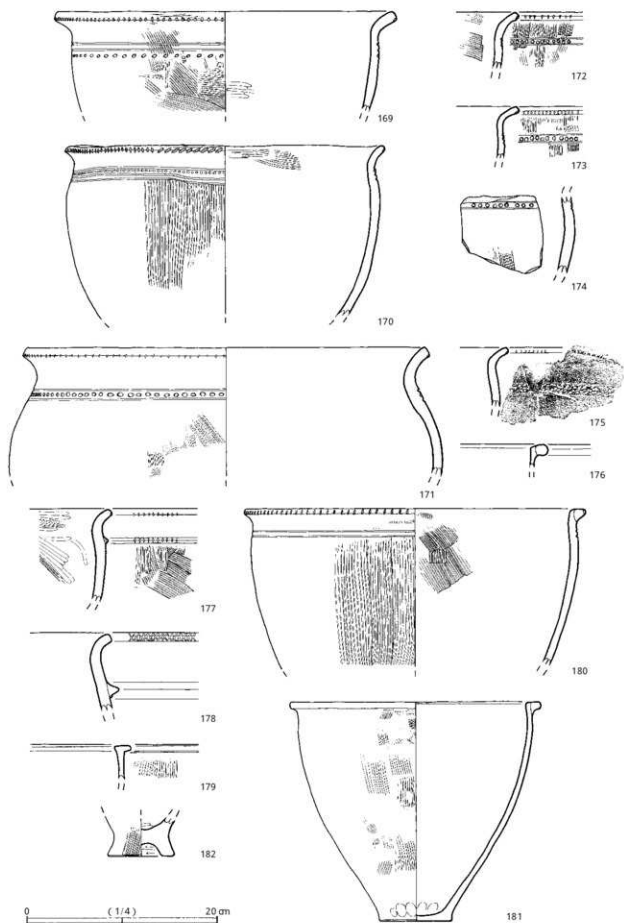


第31图 C区遗物包含层出土弥生土器实测图(5)

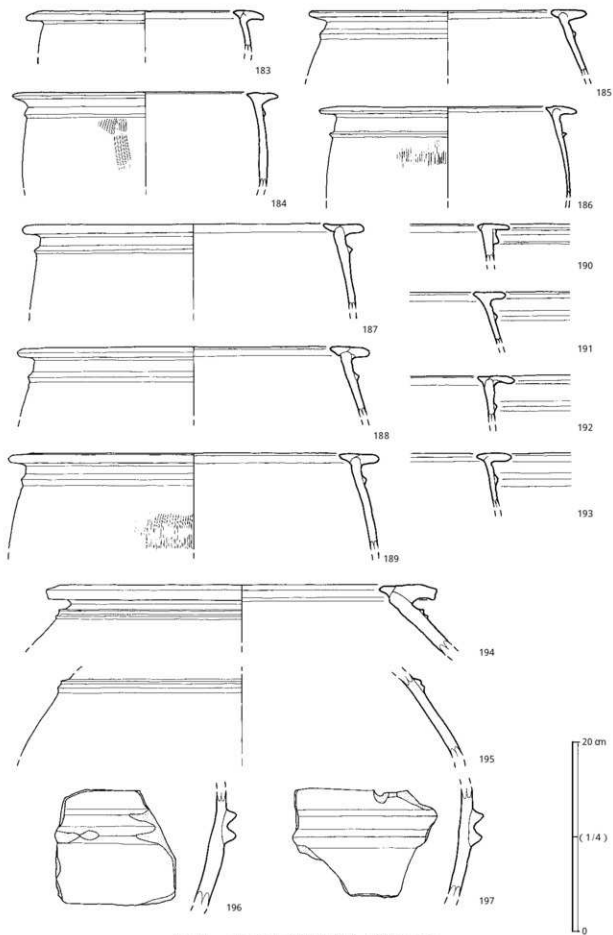


第32区 C区遺物包含層出土弥生土器実測図(6)

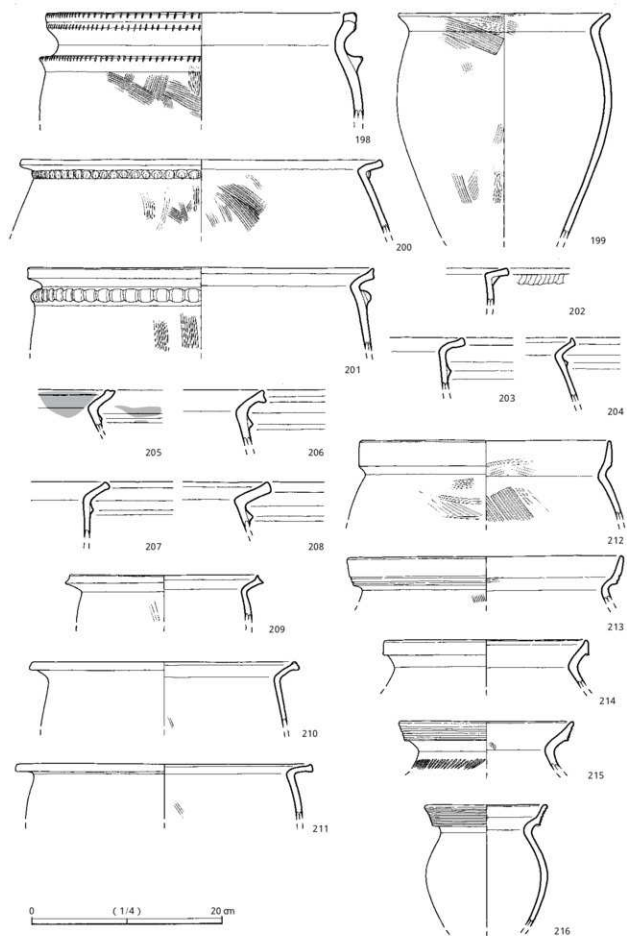




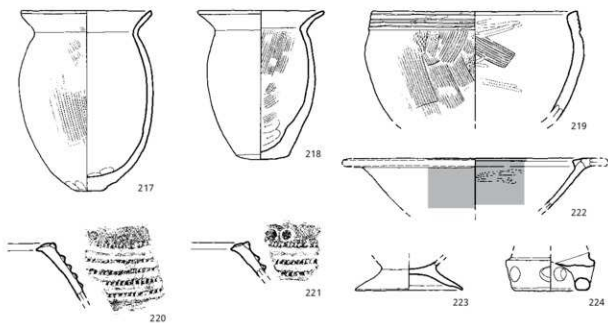
第33区 C区遺物包含層出土弥生土器実測図(7)



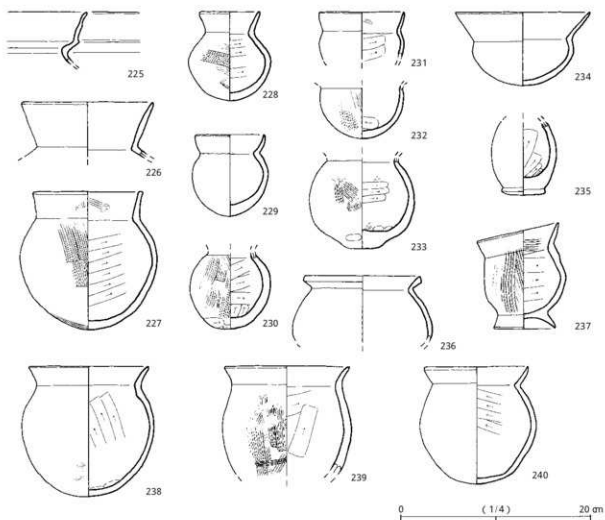
第34图 C区遗物包含层出土弥生土器实例图(8)



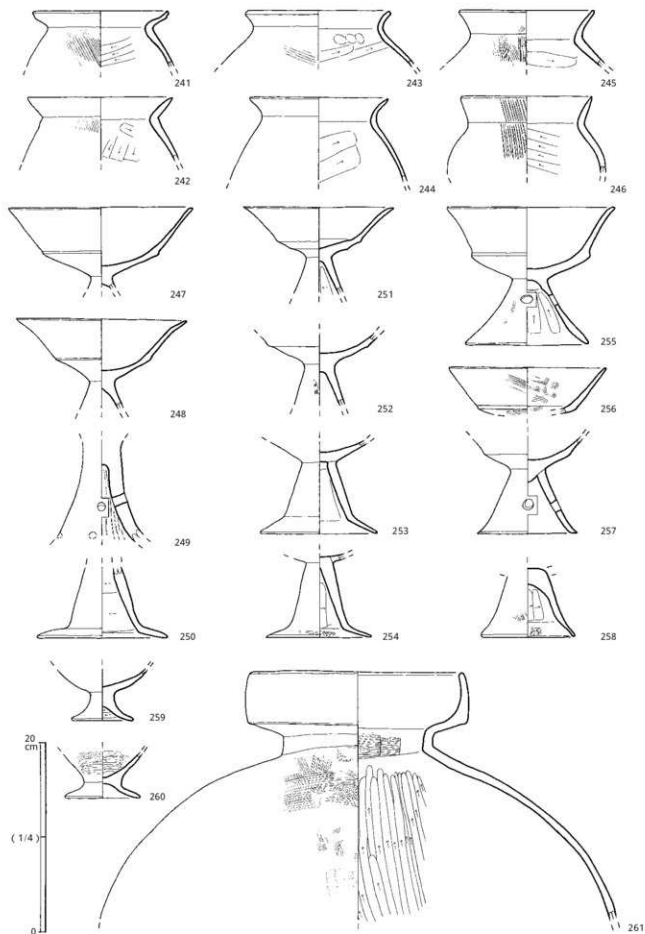
第35图 C区遗物包含层出土弥生土器实测图(9)



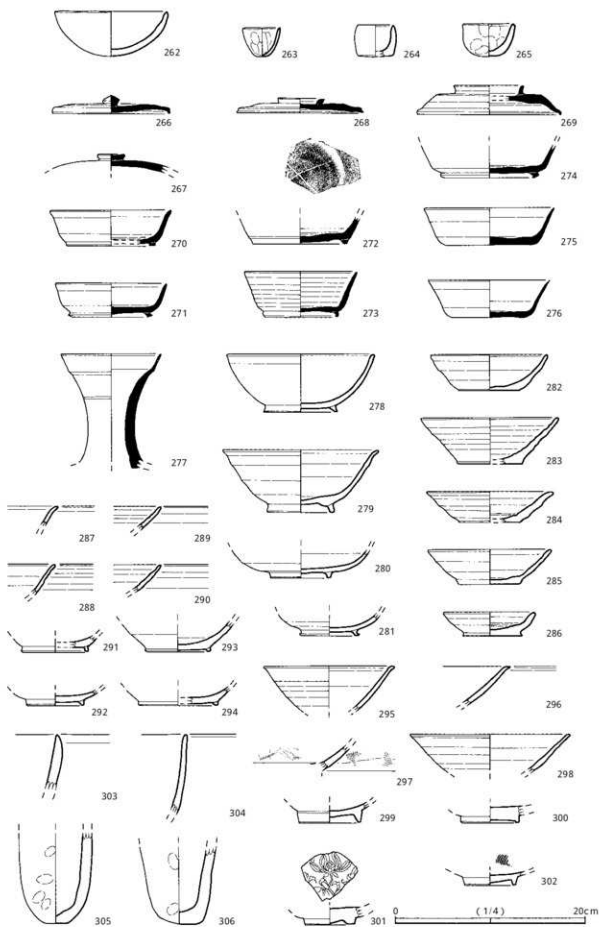
第36図 C区遺物包含層出土弥生土器実測図(10)



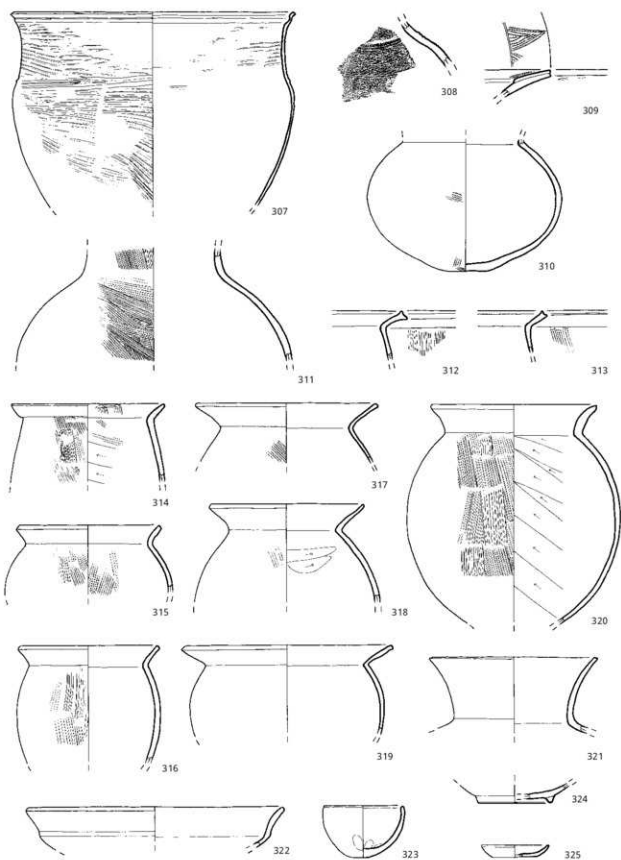
第37図 C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(1)



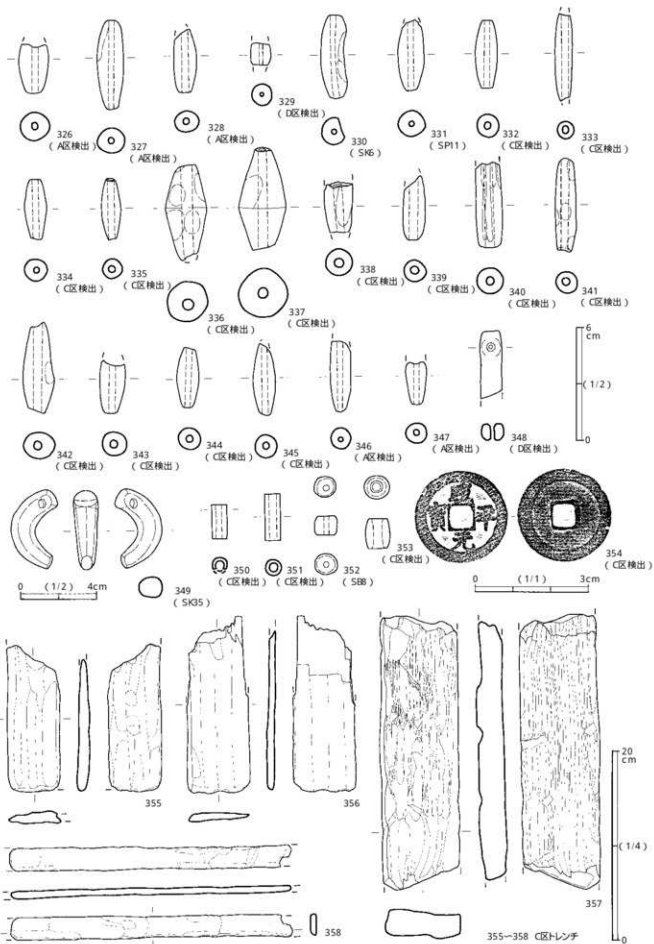
第38図 C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図2)



第39図 C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図3)

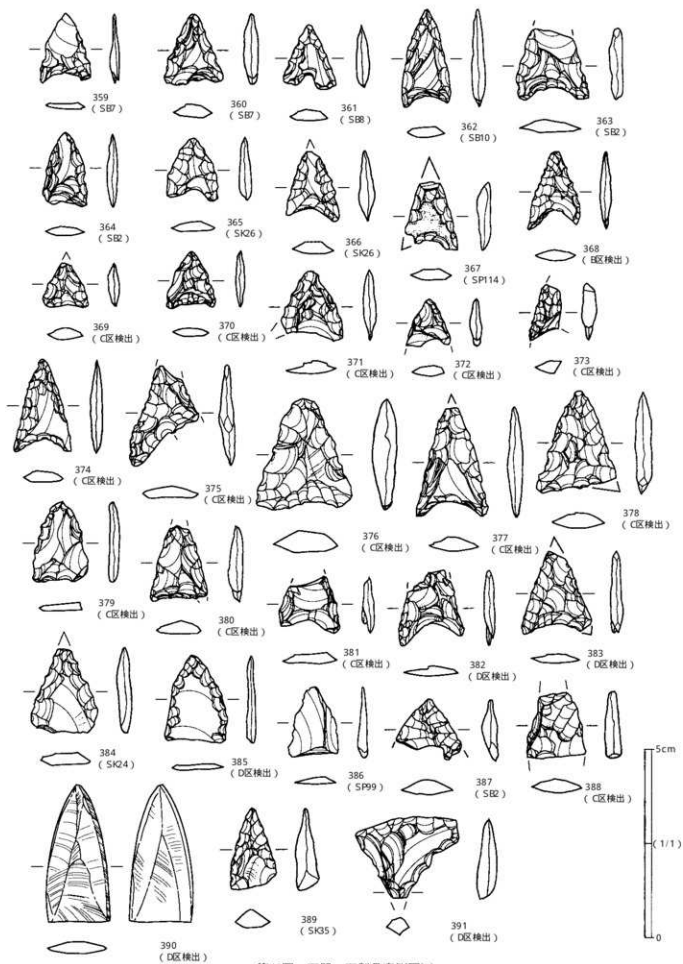


第40图 D区遗物包含层出土土器实测图

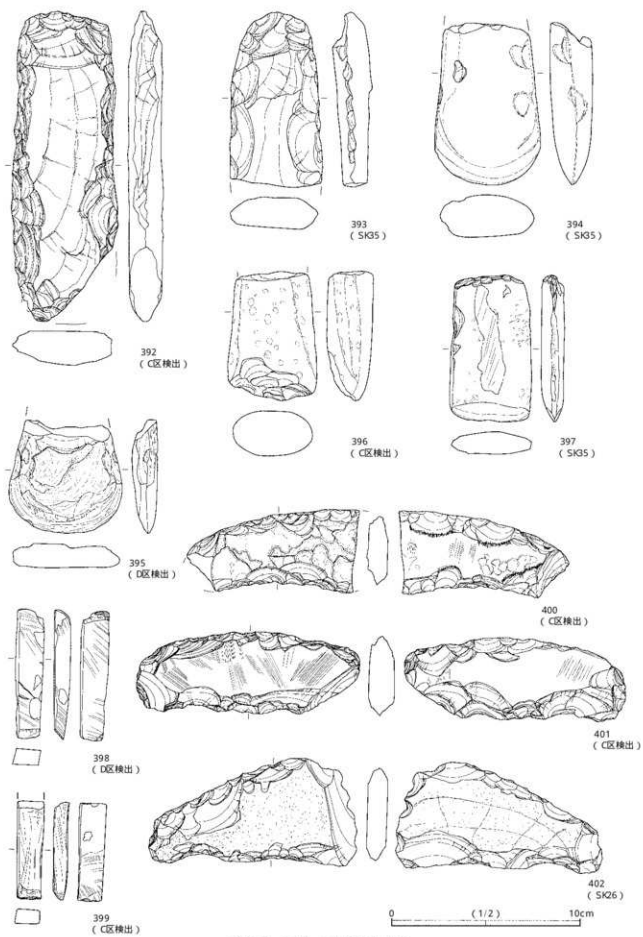


第41図 土製品・玉類・銭・木製品実測図

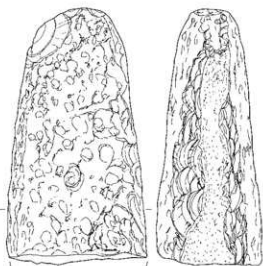




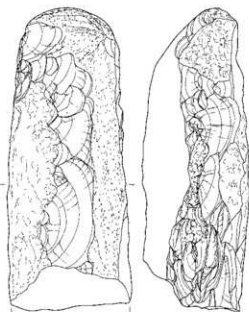
第42图 石器・石製品実測图(1)



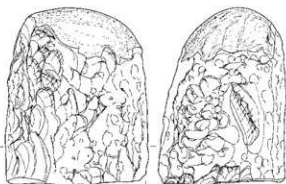
第43区 石器・石製品実測図(2)



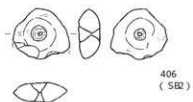
403  
(C区検出)



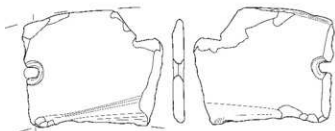
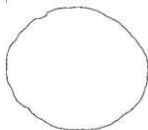
404  
(C区検出)



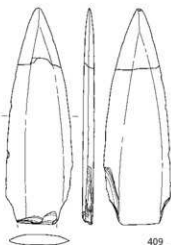
405  
(C区検出)



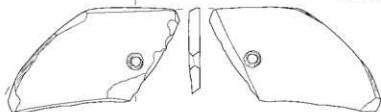
406  
(SB2)



407  
(C区検出)



409  
(C区検出)



408  
(C区検出)

0 (1/2) 10 cm

第44図 石器・石製品実測図(3)

### 3 まとめ

宮迫神田遺跡の発掘調査により検出した遺構は、弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡10軒、弥生時代～中世の掘立柱建物跡2棟、溝状遺構2条、土坑36基、柱穴600余りである。出土遺物は、弥生時代前期後半～中期後半の弥生土器や古墳時代前期初頭の土師器が中心を占め、その他に、縄文土器、須恵器、土師器、六連式製埴土器、緑釉陶器、輸入磁器（青磁・白磁）、石器・石製品（石剣、石鏃、石斧、石鎌、石庖丁、管玉、薬玉等）、土製品（勾玉、土鍾）、ガラス製品（小玉）、木製品、輸入鉄等が確認された。これらの遺構や遺物の出土状況から、山口県北西部の沿岸部近くに位置する宮迫神田遺跡では、縄文時代から中世までの長い期間にわたって、人々が間欠的に生活を営み、とりわけ弥生時代には拠点集落が形成されていたということが明らかになった。

遺構は後世の水田開発で著しい埋平を受けており、遺存状態が悪かったものの、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が10軒検出された。主柱穴や炉等はほとんど検出されなかったが、住居の形は円形や隅九方形で、円形竪穴住居跡では推定径が5～7mの中規模のものから、約10mの大型のものまでである。住居の大半はA・B区の高位で発見されたが、低位のC・D区でも1軒ずつ発見されており、ある程度のまとまりをもった集落が断続的に営まれていたと推察される。掘立柱建物跡は出土遺物はわずかであるが、中世のものが多く認められ、時期が確定できない建物についても、ほぼ同時期と考えて大過ないであろう。

遺物は多量に検出されたが、その大半がC区遺物包含層からの出土である。C区遺物包含層の層序は、最下層には弥生時代前期の土器が包含されており、時期に濃淡はあるが、基本的には上層の古代の土器が含まれる層まで累重的な堆積があったと思われる。遺物包含層からの遺物の出土量を考えると、調査区上位側にも遺構の広がりが推定される。遺構に伴う遺物は僅かでも小破片が多く、残念ながら良好な一括資料は少ない。以下、宮迫神田遺跡の出土遺物で特徴的な遺物を取り上げてみる。

A区SK35とD区遺物包含層から、縄文土器（73・307）が出土した。73はA区SK35から出土した曾畑式系の深鉢形土器口縁部片で、宮迫神田遺跡の出土遺物の中では最も古く位置づけられるものである。滑石を多く含んでおり、搬入品の可能性が高い。307はD区遺物包含層から出土した縄文時代晩期前半の岩田式（岩田4類古段階）の深鉢形土器である。

弥生時代前期後半～中期の土器では、C区遺物包含層等から、綾羅木Ⅱ式～綾羅木Ⅳ式に相当する段階の土器が多数出土している。施文構成で注口されるのは山形弧弧文を施した壺形土器（114・116・121・122）で、羽状文もしくは有箱羽状文との組み合わせをもつ。また、176は口縁部に断面円形の粘土帯を貼り付けた朝鮮系の後期無文土器で、口縁部上面にヨコナエによる平坦面がみられる。

弥生時代中期の土器では他地域から持ち込まれた搬入土器、もしくは影響を受けた外来系土器が多数出土している。127・138・139には樹描文がみられ、139には口縁部内部に樹描山形文と貝殻文が施されている。これらは弥生時代中期前半に位置づけられる。31・220・221は瀬戸内系の無頸壺もしくは脚付鉢の口縁部片で、山口県内では類例に乏しい資料である。29はSB8からの出土で、頸部に押圧凸帯が巡る跳ね上げ口縁の壺形土器片や、須玖Ⅱ式の錫形口縁の壺形土器と共存しており、いずれも小破片ではあるが、周辺地域との併行関係を把握するうえで非常に重要な意味をもつと思われる。北部九州系の土器は城ノ越式から須玖Ⅰ式、須玖Ⅱ式併行期のものが出土しており、最も数が多いの

は須玖Ⅱ式併行段階の上器である。また、中期後葉から中期末にかけての周防部で盛行する跳ね上げ口縁の甕形上器も多く出土していることから、この時期が宮迫神田遺跡のひとつのピークである可能性が高いであろう。151は丹塗磨研上器片であり、須玖Ⅱ式古段階のものと思われ、後述する須玖式の壺棺片とはほぼ同一地点より出土した。弥生時代後期に相当する遺物は少なく、再びまとまった遺物の出土がみられるのは古墳時代からである。

C区遺物包含層トレンチ①からは北部九州系の壺棺片が出土した(194・196・197)。復元した口縁部径の大きさや器壁の厚さ等から、北部九州地域で盛行したいわゆる成人用壺棺の一部と考えられる。また、トレンチ周辺の遺物包含層掘り込み時にも、破片(195)が出土した。橋口達也氏の編年観(橋口1979)を援用するならば、概ねKⅢa式の範疇に入ると思われる<sup>11)</sup>。日常土器では須玖Ⅱ式古段階に相当し、弥生時代中期後葉(川上1994・平2004)である可能性が高い。

その他、弥生時代後期中頃の口縁部に擬凹線文を施した山陰系の複合口縁甕(212-216)が出土している。また、SB9からは山陰系の鼓形器台(37)が小型丸底土器と伴に出土しており、古墳時代初頭に位置づけられる。

C区遺物包含層の北平西側上層では、古墳時代の高杯、甕、鉢や壺の小型丸底土器、ミニチュア土器等の祭祀にかかわったと思われる土器が、使用後に一括廃棄された状況で検出された。また、その下層においても、弥生前期末の壺や甕の原形をとどめる土器が一括廃棄された状況で検出された。弥生土器と伴に石剣も検出され、祭祀に使用された土器が一括して廃棄されたものと判断される。この辺りが栗野川の河岸や水辺に近かったこともあり、水に係る祭祀との関連も想定されよう。

今回の出土した土器が県北西部における良好な資料として、この遺跡の特性を踏まえながら山口県西部(長門地域)での編年作業や山口県東部(周防地域)とのかかわり、さらには、北部九州、山陰、瀬戸内地域等の資料との比較検討のうえで有効に活用されとともに、それによって今後、宮迫神田遺跡の性格やこの地域の歴史の中での位置づけがより明らかになることが期待される。

註

1)橋口達也氏は大形壺棺をKⅠ-KⅤ期に大別し、中期を口縁下に凸帯がない時期と、口縁下凸帯出現以降の時期に二分し、前者をKⅡ期(KⅡa-c)、後者をKⅢ期(KⅢa-c)としている。また、KⅢa期の壺棺は森貞次郎氏の分類では須玖式壺棺に相当する(森1968)。

橋口達也 1979「壺棺の編年の研究」『九州総合自動車道関係埋蔵文化財報告』XXXI 中巻 福岡県教育委員会。

〔参考文献〕

川上洋一 1994「弥生時代の北部九州における壺棺と日常土器の併行関係に関して」『櫻原考古学研究所論集』第11期 55周年記念 櫻原考古学研究所 吉田弘文館。

平 美典 2004「北部九州における中期-後期前半の上器と併行関係」『第53回埋蔵文化財研究集會弥生中期上器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会 第53回埋蔵文化財研究集會実行委員会。

森貞次郎 1968「弥生時代における細形銅剣の流入について-細形銅剣の編年の考察-」『日本民族と南方文化』金岡丈夫博士古墳記念委員会編 平凡社。

## Ⅳ 的場遺跡

### 1 調査の方法と経過

的場遺跡は釜ヶ岳の西側ふもとの緩やかな斜面に位置している。そのため、調査対象となる4区画の水田には若干の比高差がある。よって、調査区を標高に準じて設定した。標高10.81mで最も高い地点にあるA区からB区、C区とし、最後に標高39.31mの区画をD区とした。調査は、予察調査の結果をもとに重機による表土除去から始めた。まず、A区では現地表面から約30cm下で柱穴と黒褐色の薄い粘土層を確認した。B区の中央からC区に向けては、地山層とは明らかに違う堆積層を北側で確認したために、C区に向けて2本のトレンチを設けて調査することとした。C区では、大小さまざまな礫が露出し、ポイントを決めて深掘り調査をすることとした。B区南側においては花崗岩バイラン質の土層からかなり多くの柱穴を確認することができた。B区東端では、青灰色粘質土の下から湧水し、そのためB区東端は谷部にあたると考え、トレンチ調査のみを行うこととした。D区は予察調査の段階では未調査だったがB区南側の柱穴群の検出状況から遺構の密度が濃いと考え、慎重にトレンチ調査を行うこととした。また、B区とD区の区界において水田改修の跡や、それに伴うであろう整地土層が現れ、従来より約50～60cm深掘りをしたところ、縄文土器片が数点と石器の一部が出土した。そこで中世の遺構の下に、縄文時代の遺構の埋存が予想された。

これらの重機による表土除去やトレンチ・深掘り調査の結果を基にA区から遺構の検出・掘り込みを開始した。A区は薄い遺物包含層が認められ、その下からSK9が検出された。B区中央は、著しい削平を受けた様子で遺構の遺存状態は不良であった。また、C区との区界においては水田改修による整地土層を確認した。しかし、その下からSK8を検出した。また、C区では、遺構を検出することはできなかった。D区ではB区南側に続いて、遺構を検出することができた。また、南端でも遺構面と異なる地積上の範囲を確認し、同時にその境界を区画にするような状態で石列が出土した。そこで、トレンチを設定し、上層の確認を行ったが、水田改修に伴う整地上であることが判明した。その後、グリッド実測、ついで空中写真撮像を行い、中世遺構の調査を終了した。

続いて、縄文土器片と石器が出土した遺構密度の濃いB区南側とD区にそれぞれ3本ずつトレンチ(南北方向)を設けて、縄文土器が出土する上層面の範囲を確定し、重機による中世の上層除去を行った。その後、人力で縄文土器を含む上層面を検出した。その結果、縄文土器を含む上層は一定の範囲にのみ存在していることが判明し、単なる遺物包含層ではなく意図的に土器を廃棄した場所と考え、この範囲を大きく一つの遺構とした。そして、多量の縄文土器および13点の石器が出土し、土坑2基と柱穴23個を確認した。また、B区東端のトレンチ調査の結果、弥生時代中期の壺がほぼ完形で出土した。更なるトレンチ調査及び掘り込みを続けたが、激しい湧水のため調査を続けることが不可能となった。その後、遺構の平板実測を行い、的場遺跡の発掘調査を終了した。



第45図 的場遺跡調査区設定図



第46圖 的場遺跡遺構配置圖



## 2 調査の成果

### (1) 遺構 (第47～55図、図版43～49)

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡8棟(中世)、土坑14基(中世12基・縄文時代2基)、柱穴522個(中世499個・縄文時代23個)である。これらの遺構のほとんどがB区とD区に集中しており、B区に関してはD区との区界の斜面上で大半が検出された。また、C区は試掘調査においては数点の遺物が確認されていたが、削平が著しく、遺構がほとんど遺存していなかった。特徴的な遺構としては多量の縄文土器が出土した「土器溜状遺構」があげられる。

#### ① 掘立柱建物跡(第47～49図、第3表)

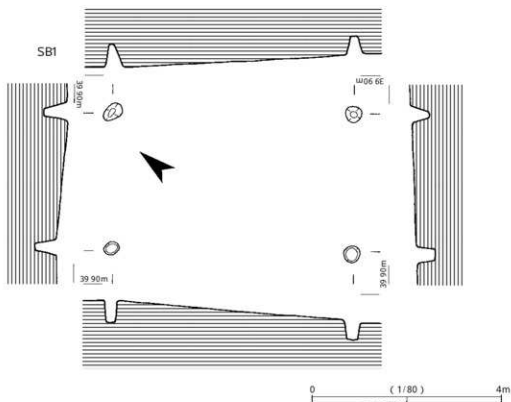
今回の発掘調査で、中世の遺構面から検出された柱穴群において、B区で4棟、D区で4棟、合計8棟の建物が復元できた。

##### SB1 (第47図)

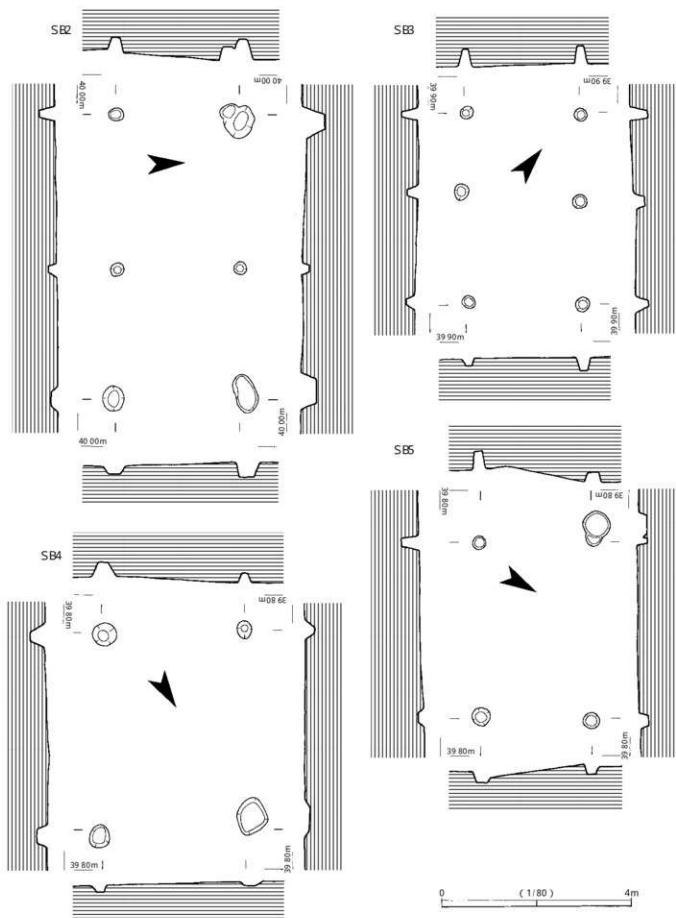
B区東端に位置する。1間×1間の建物で、棟方向はN39°Wである。建物規模は桁行5.08m×梁行2.88mである。柱穴の規模は径32～44cm、深さは40～52cmを測る。3個の柱穴からそれぞれ1点ずつ土師器の小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

##### SB2 (第48図)

B区中央部に位置する。2間×1間の建物で、棟方向はN88°Eである。建物規模は桁行6.04m×梁行2.60mである。柱穴の規模は径28～80cm、深さは20～48cmを測る。4個の柱穴から多数の土師器片が出土しており、この建物の時期は14～15世紀頃のものとは定される。

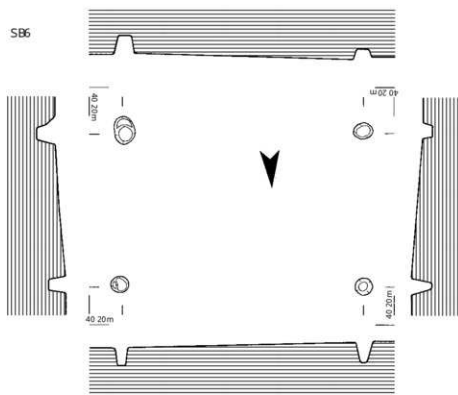


第47図 掘立柱建物跡実測図(1)

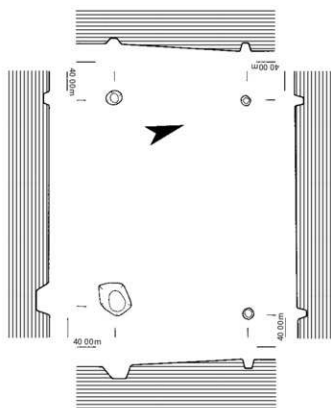


第48图 掘立柱建物跡実測图(2)

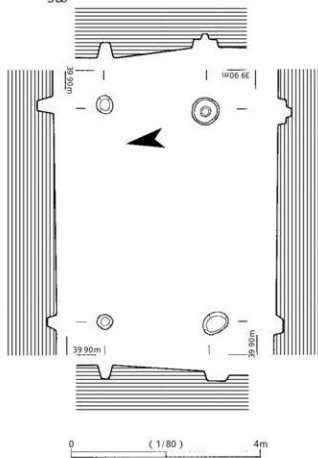
SB6



SB7



SB8



0 (1/80) 4m

第49回 掘立柱建物跡実測図(3)

**SB 3 (第48図)**

B区中央部に位置する。2間×1間の建物で、棟方向はN40°Wである。建物規模は桁行4.08m×梁行2.44mである。柱穴の規模は径28～36cm、深さは20～40cmを測る。1個の柱穴のみ土師器片が出土しており、この建物の時期は14～15世紀頃のものとは比定される。

**SB 4 (第48図)**

SB2・3の西に位置する。1間×1間の建物で、棟方向はN62°Eである。建物規模は桁行4.20m×梁行3.00mである。柱穴の規模は径36～84cm、深さは12～32cmを測る。2個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は15～16世紀頃のものとは比定される。

**SB 5 (第48図)**

D区東側に位置する。1間×1間の建物で、棟方向はN25°Eである。建物規模は桁行3.72m×梁行2.36mである。柱穴の規模は径28～76cm、深さは16～40cmを測る。3個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は13～14世紀頃のものとは比定される。

**SB 6 (第49図)**

D区西側に位置する。1間×1間の建物で、棟方向はN78°Wである。建物規模は桁行5.08m×梁行3.28mである。柱穴の規模は径36～60cm、深さは24～44cmを測る。2個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は14～15世紀頃のものとは比定される。

**SB 7 (第49図)**

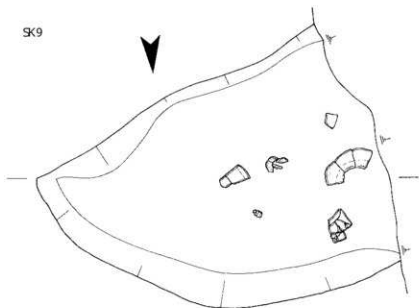
SB5と重なり合うように位置する。1間×1間の建物で、棟方向はN79°Wである。建物規模は桁行4.40m×梁行2.80mである。柱穴の規模は径24～80cm、深さは16～28cmを測る。2個の柱穴から少量の土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

**SB 8 (第49図)**

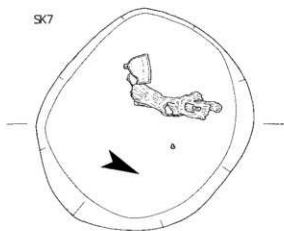
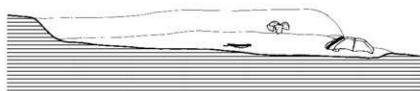
SB6とはほぼ棟方向を同じくし、重なり合うように位置する。1間×1間の建物で、棟方向はN82°Wである。建物規模は桁行4.56m×梁行2.20mある。柱穴の規模は径32～56cm、深さは24～36cmを測る。3個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は15～16世紀頃のものとは比定される。

**第3表 掘立柱建物跡一覧表**

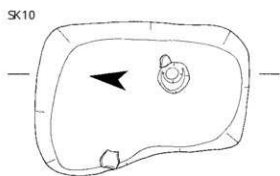
遺構番号	規模(間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時 期
			桁 行	梁 行		
			建物の南東隅から(m)	建物の南東隅から(m)		
SB 1	1×1	N39°W	5.08m	2.88m	土師器片	時期不確定
SB 2	2×1	N88°E	6.04m(2.72m・3.32m)	2.60m	土師器片	14～15cか
SB 3	2×1	N40°W	4.08m(2.40m・1.68m)	2.44m	土師器片	14～15cか
SB 4	1×1	N62°E	4.20m	3.00m	土師器片	15～16cか
SB 5	1×1	N25°E	3.72m	2.36m	土師器片	13～14cか
SB 6	1×1	N78°W	5.08m	3.28m	土師器片	14～15cか
SB 7	1×1	N79°W	4.40m	2.80m	土師器片	時期不確定
SB 8	1×1	N82°W	4.56m	2.20m	土師器片	15～16cか



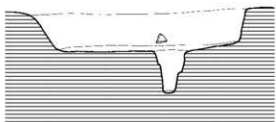
41.30m



38.80m

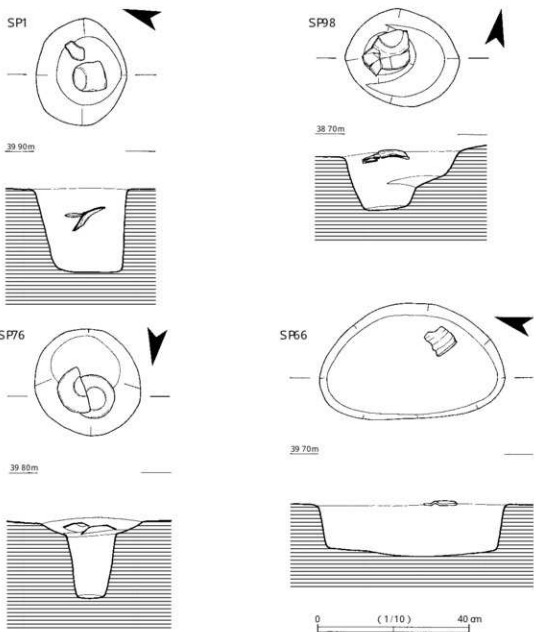


39.00m



0 (1/20) 1m

第50図 SK7・9・10実測図



第51図 SP1・66・76・98実測図

② 土坑 (第50・52~55図、図版43・44・47~49)

今回の発掘調査でA区で1基、B区で4基、D区で9基、合計14基の土坑が確認され、特にD区では2基の縄文時代の土坑を検出した。埋土はほとんどが単層である。A、B区においては不整形なものが多く、D区では円形のものが多い。以下、代表的な5例(中世3基、縄文時代2基)と縄文時代の「土器溜状遺構」を取り上げ、説明を加えたい。

SK7 (第50図、図版43)

D区西端に位置する。円形で、規模は長径120cm、短径102cm、深さは約20cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土(10YR4/2)の単層である。残度の高い瓦質の足鍋が埋土中から出土していることから、遺構の時期は16世紀後半と比定される。また、足鍋に作ってかなり多くの炭化物も出土したが、用途は不明である。

### SK 9 (第50図、図版43)

A区北側の薄い包含層の下から検出された。埋土は灰黄褐色粘質土(10Y R 4/2)の単層である。最大幅1.30mで、遺構の西側は後世の開発によって削り取られている。土師質の捏ね鉢や杯が出土した。これらのことから遺構の時期は15世紀頃と比定される。

### SK 10 (第50図、図版44)

D区東端に位置する。隅丸方形で、規模は長軸110cm、短軸70cm、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂質土(10Y R 4/1)の単層である。また、径15cm、深さ23cmの柱穴が検出された。その柱穴の中から遺物は検出されなかったが、埋土中から備前焼の甕の底部が出土している。このことから、遺構の時期は中世と比定される。

### 土器溜状遺構 (第54・55図、図版47~49)

B区とD区の区界に位置する。縄文土器が意図的に廃棄されたと思われるこの範囲を大きくひとまとめとし遺構とした。中世の遺構面の下から、この遺構は検出された。南に緩やかに傾斜し高低差は約90cm、上部にテラスを伴った楕円状の遺構である。また、埋土は最大幅約40cmの6層からなり、上層から最下層に至るまで万遍なく多量の縄文土器が出土した。出土した遺物から、縄文時代後期前葉の土器溜状遺構であると考えられる。柱穴は23個検出され、約半数にあたる10個の柱穴から遺物が出土し、時期は縄文時代後期前葉と比定される。上部中央に溝のような遺構を検出したが、用途は不明である。また、底面より2基の土坑を検出した。以下に説明を加えたい。

### SK 13 (第52・54図、図版48)

「土器溜状遺構」東側に位置する。円形で、規模は長径98cm、短径80cm、深さ38cmを測る。埋土に大量の石が含まれていたため集石遺構かと思われたが、確定できず遺構の性格は不明である。遺物は円孔を伴った縄文土器の口唇部片が1点出土している。遺構の時期は縄文時代後期前葉と比定される。

### SK 14 (第53・54図、図版48)

「土器溜状遺構」中央に位置する。長円形で、規模は長径2.56m、短径2.04m、深さ1.30mを測る。この遺構の掘り込みが1mを越えたあたりから湧水が激しくなったため、掘り込みを中断した。この遺構全体からはかなりまとまった数の土器が出土したが、それ以外の遺物や柱穴は確認できなかった。遺構の時期は縄文時代後期前葉と比定される。

### ③ 柱穴 (第51図、図版44~46)

今回の発掘調査では、掘立柱建物を構成するものも含んだ522個(縄文時代のものは23個)の柱穴が検出された。また、その中で234個の柱穴から遺物が出土した。以下、代表的な4例を取り上げ、説明を加えたい。

### SP 1 (第51図、図版45)

B区西側に位置する。円形で、直径28cm、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色砂質土(10Y R 4/1)の単層である。土師質の皿片と杯が出土しており、15~16世紀初頭の遺構と比定される。

### SP 66 (第51図、図版45)

SB 8を構成する柱穴の1つである。長楕円形で、直径49cm、深さ14cmを測る。瓦質の鍋の口縁部片が出土しており、15~16世紀頃の遺構と比定される。

S P 76 (第51図、図版46)

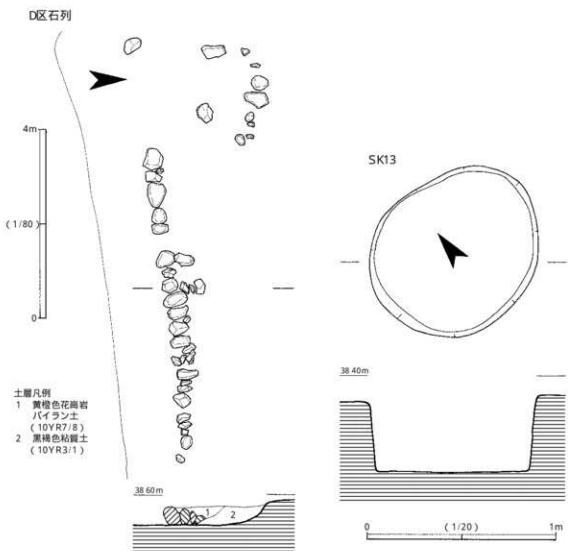
D区西側のB区との区界に位置する。円形で、直径29cm、深さ22cmの中段を伴った遺構。土師質のほぼ同型同大の杯が下向きの重なった状態で出土しており、遺構の時期は15世紀頃と比定される。

S P 98 (第51図、図版45)

D区東側のS B 7の中に位置する。円形で、直径30cm、深さ14cmの中段を伴った遺構。土師質の杯が出土しており、15世紀頃の遺構と比定される。

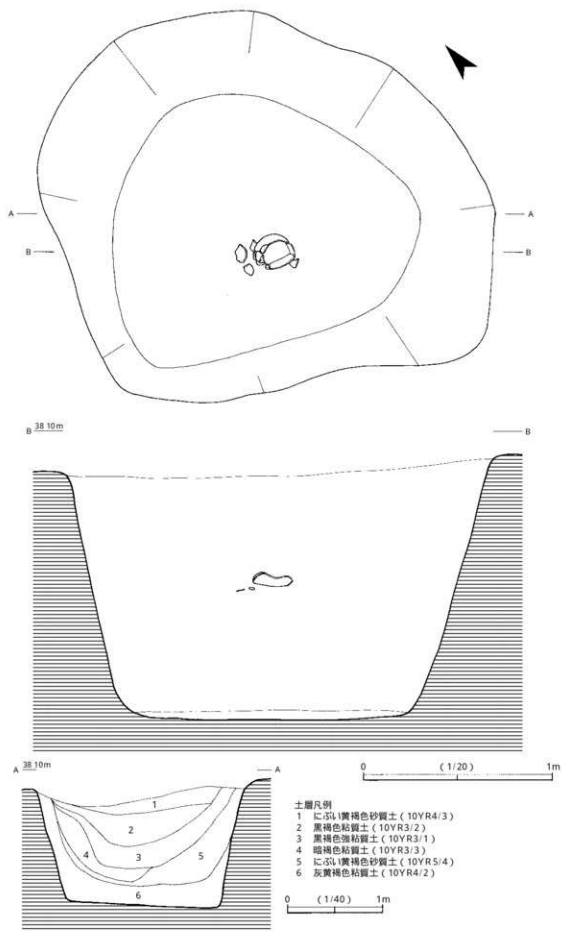
④ 石列 (第52図、図版46)

今回の発掘調査で、D区南端に東西に延びる約6.40mの石列を検出した。2層の整地土によって地山部分が広げられ、堰き止めるようにして石が置かれていた。大きさは20cm前後程度で、しっかりとした組み方の石列ではない。検出した石列の続きを確認することもできず、D区南端部分だけのために設けられたのではないかと考えられる。このことから、中世以降の水田改修による石列と推測する。

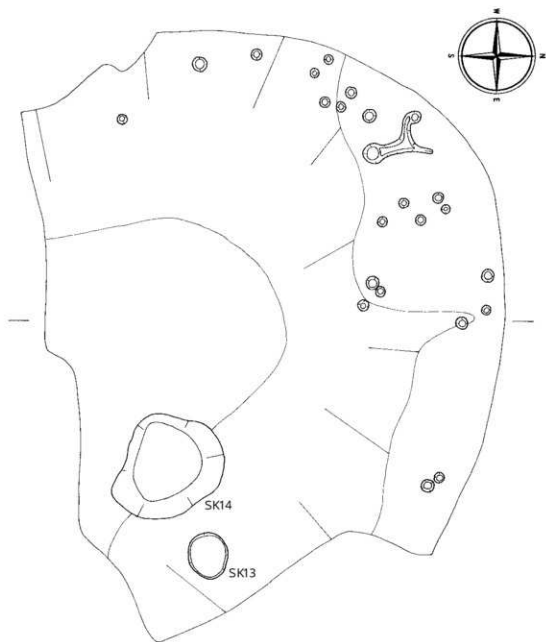


第52図 D区石列・SK13実測図

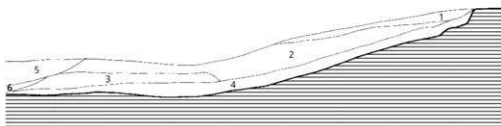




第53図 SK14実測図



40.00m

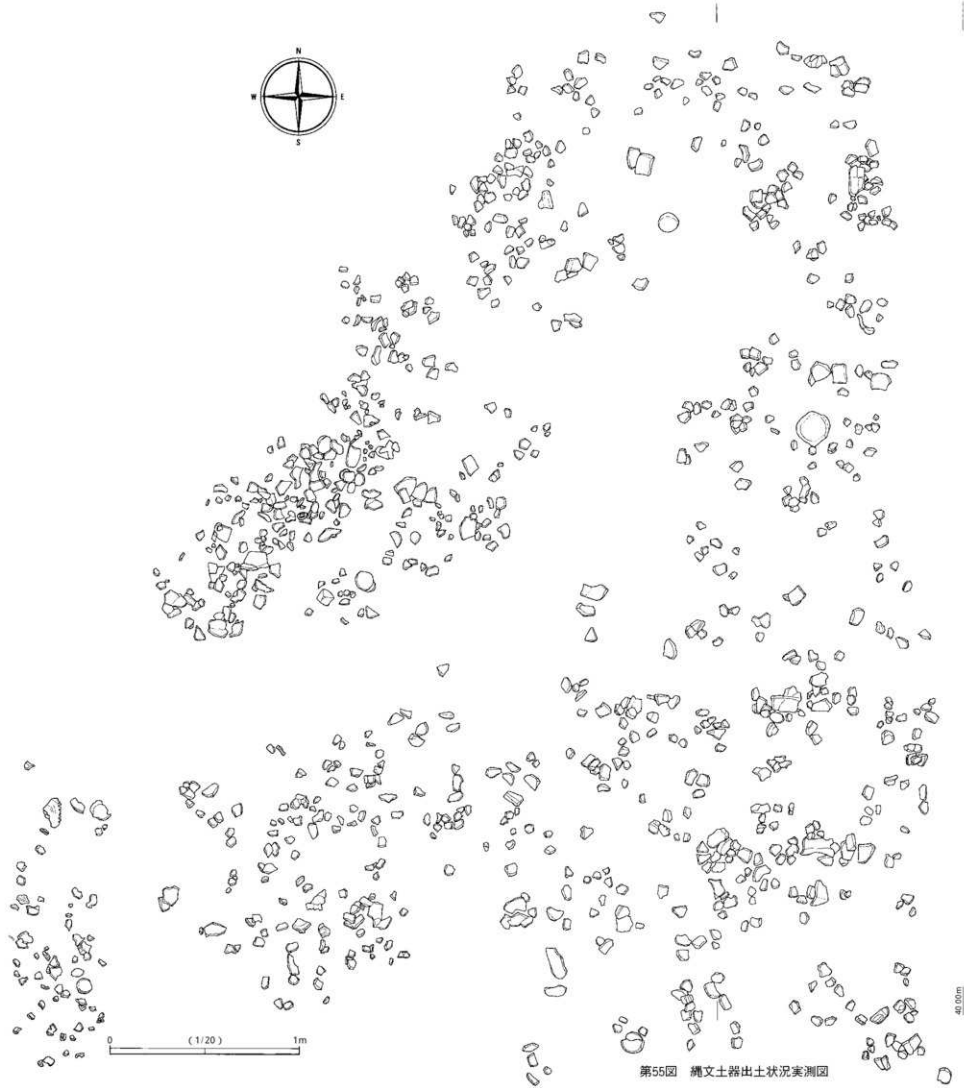


土層凡例

- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 1 褐色粘質土 (7.5YR4/6)    | 4 黒褐色強粘質土 (7.5YR3/2) |
| 2 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) | 5 灰黄褐色土 (10YR4/2)    |
| 3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) | 6 明黄褐色粘質土 (10YR6/6)  |
- (10cm大の礫を多く含む)

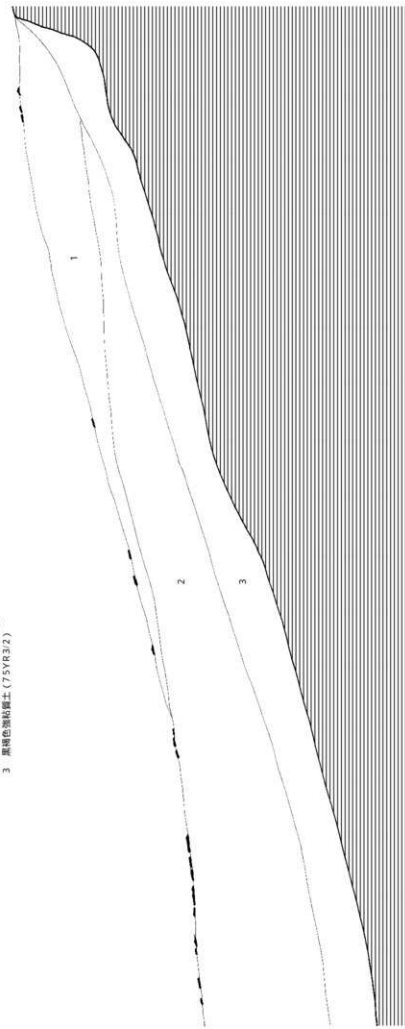
0 (1/40) 2m

第54図 縄文時代遺構配置図



第55圖 繩文土器出土状況実測図

- 土層凡例
- 1 褐色土層土 (T5YR6/5)
  - 2 灰色粘板状土層土 (DPBR4/3)
  - 3 黒褐色粘板状土 (T5YR3/2)



## (2) 遺物

### 弥生時代以降の土器 (第56図、図版50~52)

1~10・14は土師器皿である。小型で概ね口径6~8cm、器高は1cm前後である。2~7・14の底部外面には回転糸切り痕が残る。11~13・15~21・23は土師器杯である。体部がやや内湾気味に立ち上がる。12・13・15・16・19・21・23の底部外面には回転糸切り痕が認められる。全体的に色割は白色系で、器壁が薄い。粘土柱ミズビキ技法で製作されたものとする。24~26・32は土師質土器である。24は鉢の口縁部である。25は捏ね鉢である。口縁部に注ぎ口が付く。26・32は鍋の口縁部である。32の内面と外面下半にはハケ目がみられる。22・27~31・33~37は瓦質土器である。22は鉢の口縁部である。27・28は揃鉢の口縁部である。内面にはオロシ目が施される。29・30は鍋の口縁部である。31・33~37は防長型足鍋である。31の外面下部には格子目タタキ痕がみられ、ススの付着が認められる。33は口縁部、34~36は脚部である。これらの足鍋は15~16世紀の所産である。38・40は陶器碗である。透明釉を施す。40は唐津焼で見込みに砂目がみられる。41は青磁皿である。内外面にはヘラ先による線溝壺弁文が施されている。高台内には輪割ぎがみられる。39は陶器甕の底部である。内外面にナデ調整がみられる。44は弥生時代中期の小型の壺形土器である。口縁部はくの字状に屈曲し、最大径は胴部中位にある。胴部から底部にかけて黒斑がみられる。42は土師器甕のくの字状の口縁部である。43は土師器高杯の脚柱部である。柱突である。

### 石器・石製品 (第73・74図、第4表、図版74)

#### 石鏃 (276~278)

276~278は打製石鏃である。276・277は凹基無茎式石鏃である。表裏面に丁寧な押し剥離により形態加工しており、素材面を残さない。278は木製品で、基部の形成は行われていない。277・278は土器溜状遺構からの出土である。石材には276・278に安山岩、277に姫島産黒曜石が用いられている。

#### 打製石斧 (279・280)

279は砂岩製、280は玄武岩製の打製石斧である。280は形態が撥形の扁平打製石斧である。いずれも土器溜状遺構からの出土である。

#### 磨製石斧 (281~291)

欠損品が多く即断はできないが、断面が楕円形で、頭部が細く棒状を呈し、鋸刃であるいわゆる乳棒状磨製石斧が多く含まれていると考える。縄文時代で最も一般的な磨製石斧であり、当遺跡の主要時期とも一致する。281~288・290は縄文時代後期前葉に位置付けられる土器が多数検出された土器溜状遺構より出土している。288は磨製石斧を直接打撃により再加工している。291は刃部が欠損しており、欠損部に敲打痕がみられる。破損後に敲石に転用されたのであろう。283は身幅の狭い小型の両刃石斧か。281・284~287・289・291は玄武岩製で、282・288・290は凝灰岩製、283は泥岩製である。

**温石 (292)** D区S P 178出土の滑石製の温石である。1孔を有する有孔平板状石製品である。

第4表 石器・石製品観察表

番号	器種	石材	形態加工	備考	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
276	凹形鏃	安山岩	押し剥離		29.0	20.4	3.9	1.4
277	凹形鏃	新潟産黒曜石	押し剥離		23.3	14.3	3.8	0.7
278	石鏃未製品	安山岩	直接打撃		27.5	17.8	6.8	2.2
279	打製石斧	砂岩	直接打撃+敲打		112.3	65.8	39.6	259.4
280	打製石斧	玄武岩	直接打撃	風化顯著。	109.2	58.0	16.7	153.7
281	打製石斧	玄武岩	直接打撃+敲打	風化顯著。	65.3	38.2	20.8	61.9
282	磨製石斧	凝灰岩	敲打		65.4	43.7	30.6	88.7
283	磨製石斧?	泥岩	研磨	右側辺から直接打撃で再加工。	55.8	27.4	13.3	25.2
284	磨製石斧	玄武岩	直接打撃+敲打		57.9	60.7	25.7	121.1
285	磨製石斧	玄武岩	敲打+研磨	風化顯著。	49.0	53.5	16.7	36.8
286	磨製石斧	玄武岩	直接打撃+敲打+研磨	風化顯著、縦斧。	92.8	55.5	29.7	202.7
287	磨製石斧	玄武岩	直接打撃+敲打+研磨	風化顯著、縦斧。	93.4	50.9	26.9	162.8
288	磨製石斧	凝灰岩	直接打撃	磨製石斧を再加工、表面風化顯著で研磨痕不明瞭。	85.4	57.2	32.9	227.5
289	磨製石斧	玄武岩	直接打撃+敲打	風化顯著で刃部の研磨痕不明瞭。	140.7	50.2	24.3	205.3
290	磨製石斧	凝灰岩	敲打	板状資料。	107.8	60.3	42.7	381.0
291	磨製石斧→敲石	玄武岩	直接打撃	端部に敲打痕、風化顯著、磨製石斧を敲石に転用。	127.4	56.0	38.2	383.9
292	敲石	凝石	不明	板状顯著。	76.9	72.9	23.9	168.0

## 縄文土器 (第57～72図、図版53～73)

下関市(旧豊北町)的場遺跡における2004年度の調査では、B・D区下層で多量の縄文遺物が出土した。时期的には、以下述べるように僅か1点の例外(月崎下層式小片)を除いて全て縄文時代後期前葉に限定されており、その出土状況が示唆するように、極めて短期間のうちに多量廃棄されたかの様相を呈している。土器型式には連続する若干の時期幅が確認されており、遺物の性格についてはなお慎重に議論する必要があるが、ここではB・D区斜面テラス上付近において一括出土した土器群を「土器溜状遺構」と仮称し、その土器内容について述べていきたい。なお、同遺構底面より十坑SK13、SK14が検出されているが、それら出土遺物との時期差は全く認められなかったため、ここでは土器溜状遺構出土土器と合わせて報告することにした(SK13:168、SK14:115・135・136・170・173・174・203・217・218・227)。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、壺形、注口土器からなり、多孔底土器は全く含まない。文様系統は磨消縄文系(第I群)、沈線文系(第II群)、刻目隆帯文系(第III群)、集約沈線文系(第IV群)、無文系(第V群)に大別される。九州阿高系土器は全く確認していない。以下、深鉢・鉢、浅鉢、壺形、注口土器の順に述べるが、底部片については各型式との対応が不明瞭であるため、浅鉢の記述ののち、一括して扱うことにした。

### 深鉢・鉢 (45～196)

深鉢・鉢は全器種中の89.7%を占める(口縁部割体識別法:宇野1992)。文様系統は、磨消縄文系(第I群)、沈線文系(第II群)、刻目隆帯文系(第III群)、無文系(第V群)が識別できた。また混在資料として唯一、月崎下層式第2類土器1点を確認しているが(潮見1968)、小片のため、今回図示することはできなかった。

45～51は磨消縄文系(第I群)中津式土器。いずれも中津I式新段階(玉田1989・1990)以降の資料である。縦位展開の紡錘文を主文におく45・46は同一個体とみられる。波頂部口唇には垂下縄文帯間に刻目を加えている。48もまた横帯から垂下する紡錘文状のモチーフが窺えるが、詳細意匠は不明である。調整は、46が巻貝条痕後撫で、48が二枚貝条痕後撫で、47の内外面には山陰東部～近畿北部で顕著な板状工具による細密条痕が用いられている(横山1978・1979、谷門2004)。45内面、49外面は磨減が著しく、調整は不明である。

52～54は概ね中津II式併行期に伴う沈線文系(第II群)土器。いずれも横長丁字文等を主文におく横位展開を基調とし、文様の多段化傾向が窺える。52内面、53外面には一部巻貝条痕が残る。

55～63は磨消縄文系(第I群)稲田K2式土器。三条沈線の例はないが、細い二条縄文帯が横位基調で交叉連繋する58・59や、胴部主文の発達する62・63は新相と捉えるべきであろう。58の縄文部には無節R1とLrが交互に充填施文されている。60は口縁が逆く字状に屈曲し、口縁部文様帯が独立化傾向にある新相の例で、頸部内面には、四国西南部において顕著な鋭い屈曲後線を有している。原則として、器表面には磨き調整が施されている。

64・65は深鉢注口部。64の口唇には一条の単独沈線が、65の外面には工字状の細い二条縄文帯が描かれ部分的に短節R1縄文が浅く充填施文されている。

66～110は第III群刻目隆帯文系、およびその系譜上にある未命名類型の土器。二枚貝腹縁を原体と

する狭義コウゴ-松式は皆無である(秦2000)。第Ⅲ群は4類に細分可能である。刻目隆帯文系Ⅲ-1類は口唇部に並行し、やや下がった位置に段状ないし微隆帯を設け、そこに連続した刻目文を施す例のうち、口唇にも刻目等を有する例(66~70・73~79)。拓影のように凹形刺突文を主とするが、71のみヘナタリ属小巻貝の腹部押捺による。66は部分的であるが、やや肥厚した口唇上に右斜位(右斜下方向)の太い刻目文が僅かに覆える。波状縁を成す例では二条上下の刻目帯を連絡し、垂下する刻目帯を配する例(67~69)、浅い凹点文を有する例(73・74)が主流で、口唇に刻目のない71・72にも後者と同様の凹点文が覆える。75、および76は口唇に八字状の連続刻目文が配される例。刻目のモチーフ自身は周防灘周辺で散見されるものである。76内面には、四国西南部において顕著な鋭い後縁・条が看取される。78・79は口唇部が内外に大きく肥厚し、文様が横走沈線と刻目文の組合せ(以下、刻目横線文と仮称)となる、緑帯文成立期段階に相当する例で、頸部に無文帯を発達させている。刻目帯は頸胴部界線上に位置するようになり、径3mmの小振りな凹形刺突を、極めて退化した微隆帯上に施している。器面調整は、67内面、および78・79が巻貝条痕、69外面が板状工具による細密条痕、67外面・68・70~73・77が巻貝条痕後撫である。

刻目隆帯文系Ⅲ-2類は口唇部が幅状に肥厚ないし段状に屈曲し、その端部上縁付近に刺突、ないし刻目文を配する一群(80~90)。月崎上層1c類(潮見1968)や、中村友博が問題提起した仮称、屋敷式(中村1999)と極めて類似する。Ⅲ-1類のように口唇に刻目等を付加する例は稀有である。刻目自体にはヘナタリ属小巻貝を用いる例が比例的に多く、注目される。うち80~85は回転押捺、86は巻貝尾部による刺突である。87~89は八字状の刻目文が連続施文されている。調整は全て巻貝条痕で、うち81外面・82・83・85・87内面・88・90内外面には撫で調整が加えられている。

刻目隆帯文系Ⅲ-3類は口唇部外縁端に刻目を付す例で(91~106)、無文系口唇刻目土器との峻別が困難な場合もあるが、本遺跡資料の特徴を成す類型のため、ここでは特別にⅢ-3類として扱った。これまでに下関市神田遺跡、山口市屈敷遺跡、北九州市藤円C遺跡、永夫丸遺跡、中縄手遺跡、小倉城下屈敷跡、鞍手町新延貝塚、古賀市川原西遺跡、豊後高田市森貝塚などにおいてその出土を確認していたが、纏まった出土事例は今回が初めてである。文様帯強調のため口唇部外縁を肥厚、ないし内寄屈曲させる例が多い。刻目・刺突自体には例外的に竹管小口部を用いた例(91)、ヘナタリ属小巻貝の回転押捺(92・103)、押し(93・94:同一個体)例が認められるが、多くは棒状工具による。器面は、いずれも巻貝条痕、ないし条痕後撫によって仕上げられている。

刻目隆帯文系Ⅲ-4類は口唇端部外面、ないし外縁に刻目沈線系統のモチーフを描く例で(107~110)、松ノ木式に代表される緑帯文成立期土器との関連を考慮するうえで興味深い。棒状工具による施文を基調とするが、うち107の小凹形刺突はヘナタリ属小巻貝の頂部を原体としている。

111~110は緑帯文成立期に相当する深鉢・鉢形土器。瀬戸系文系を基調に沈線文系、刻目隆帯文系との融合化を果たしている。111は口唇に1条の横走沈線を配し、端部外縁にはヘナタリ属の回転押捺による八字状の刻目が、頸部下半には沈線文系に特徴的な浅く太い横走沈線が計4条、粗粒に描かれている。このほか114・118・119にも巻貝回転押捺、117の凹形刺突は巻貝尾部を原体としている。115の波頂部には幅4~5mmの太い沈線で渦状の立体意匠が施され、頂部には竹管状工具による小刺突が加えられている。121は口唇主文部が半縁を成す例で、下弦弧状のモチーフが想定される。尚異

外縁には細かな刻目が付されている。本例と118は内外色調が橙色（5 Y R 6/8）を呈しており、瀬戸内南西方面からの搬入の可能性がある。128～129は波頂部が拡張し外縁屈曲する例で、いずれも中央には径1.5cm前後の貫通孔が穿たれている。これらには把柄の機能を有した可能性がもたれる。なお、129の口縁部外面には浅く細やかな短節L R 縄文が部分的に施文されている。130は内面施文形の例で、本遺跡では唯一の出土事例となる。楕円形区画文を幹線に上縁には刻目、下縁には深い小円形刺突文が配されている。131～140は胴部片。131の縄文原体には無節の太いL R 縄文が、133・135・136には巻貝擬縄文が用いられており（うち135・136は同一片）、該期としては特異である。139・140は胴部上半の全面に縦位短沈線文が連続施文される例で、北陸方面を起源とするモチーフの可能性が挙げられる。なお140の刺突部地文には短節R L 縄文が施されている。

141～151は無文系深鉢・鉢のうち口唇に刻目や沈線文を付加する例。141は八字状刻目、143～146・148はヘナタリ属小巻貝の回転押捺による。151は口唇上に横走沈線を施す鉢形の例で、波頂部において「フ」字状に端部が遊離している。口径は推定27.8cmである。器面は、141・143・145・149外面が撫で、147は幅広工具による磨きで、その他は巻貝条痕ないし巻貝条痕後撫でによって仕上げられている。

152～174は全く意匠を伴わない無文系深鉢・鉢のうち、波状縁ないし突起状口縁を早する例。152は注口状突起を伴う無文系としては稀有な例で、中津Ⅰ式新段階～同Ⅱ式に相当するものと推察される。153は端部が緩く不規則、かつ短い振幅を成す波状縁の砲弾形深鉢で、口径は推定で29.4cmを測る。瀬戸内地方では中期船元式段階からみられる形態であるが、本例は内外面とも巻貝条痕が明瞭であり、その出土状況から判断しても後期初頭中津式段階に収まる可能性が強いであろう。154～158・160は波頂部が鋭い三角形を呈する例で、大分県コウゴウ松遺跡など、九州東北部の後期前業段階に一定量散見される形状である。これらのうち160は内外色調が赤褐色（2.5 Y R 4/8）を呈しており、瀬戸内西南部方面からの搬入の可能性が考慮される。163・165・166は頸部が強く外反、ないし屈曲する例で、口唇はいずれも肥厚する。福田K 2式新段階～緑帯文成立期段階の資料と推定される。調整は巻貝条痕、ないし条痕後撫でを主体とするが、155・156・164は幅広工具による磨き、162は内外とも板状工具による細密条痕が採られており、東西双方の広域的な製作技法上の交流が指摘される。167～174は口唇が肥厚し、リング状突起や凹孔を有する例で、169・170を除き紐等を伴った把手機能が想定される。概ね緑帯文成立期に相当するだろう。器面は168～171については磨滅不明、167・173・174は撫で、172は巻貝条痕後撫でである。

175・177は平縁であるが、口唇が強く肥厚し、頸部の外反する器形から推察して、上記163・165～174とはほぼ同時期であると捉えることができる。

178～196は平縁の無文系深鉢・鉢。178は口径31.4cmを測るほぼ定形の例で、本遺跡では大型の器体となる。内外面とも撫で調整によって仕上げられている。当該地域周辺、すなわち山陰地方～玄界灘周辺、および瀬戸内西部（芸予諸島以西）に多い器形である。本遺跡でも砲弾形を早すると予想される例は無文系深鉢の過半数に達する。179～185は砲弾形を早する深鉢、ないし鉢形の例である。器面は撫で調整による185を除いて、いずれも巻貝条痕、ないし巻貝条痕後撫でによって仕上げられている。なお185の胎土には角閃石の含有が顕著に認められた。186～189は口縁の強く内湾する鉢で、



うち188の推定口径は23.0cmを測る。器面は186が撫で、188は削りによる擦過を伴う撫で、199は巻貝条痕後撫でである。187は粗い指頭圧痕と同擦過を伴う例で、山陰地方に多い調整手法である。色調はにぶい橙色(7.5Y R 6/4)を呈している。188の胎土中には角閃石が、189には水晶、花崗岩の混和が顕著に認められた。

190~196は頸部に屈曲を有する深鉢・鉢。190は長胴かつ頸部の短く外反する例で、口径は24.4cmを測る。191は推定口径29.3cm、口縁が直口し、器高のやや低平な例。なお190・191の内外面はともに巻貝条痕後撫でによって仕上げられている。192は推定口径25.5cm、口頸部が長く外傾する例で、内外ともに巻貝条痕が顕著である。以上190~192は福田K2式一線帯文成立期に相当する。

193は頸部内面に鋭い一条の稜線を有し、口縁の短く内湾する例で、口径は27.2cmを測る。内外面とも巻貝条痕後撫で、胎土中には角閃石を特徴的に含む。色調が明赤褐色(5Y R 5/8)を呈しており、瀬戸内南西部方面からの搬入の可能性もたれる。福田K2式段階に相当すると考えられよう。194は口径31.8cmを測る当該遺跡では大型の鉢で、器高19.8cm、底径13.3cmと、ほぼ完形に復元された。頸部で緩やかに屈曲外反し、底部は凹底に仕上げる。内外面ともに巻貝条痕が顕著である。195は口径17.2cm、器高約15.5cmと推定される小型の鉢で、頸部で強く屈曲し、口縁が外傾直口する。福田K2式一線帯文成立期に多い器形である。内外面とも磨滅が著しいが、一部巻貝による横位擦過痕が遺存している。196は外面を緑帯状に肥厚させる例で、外面は撫で、内面には巻貝条痕が顕著に残されている。刻目隆帯文系に伴う無文系深鉢と推定されるが、無文深鉢・鉢総数(口縁部)559点中、この外面肥厚タイプは僅かに3点(0.5%)であった。周防灘周辺域以南との小地域差を反映している。

#### 浅鉢 (197~224)

浅鉢は全器種中の10.3%を占める(口縁部個体識別法:宇野1992)。器形的には中華ナベ形(G類)と皿形(皿B類)が主流で、ボウル形(F類)が一定量、緩「く」字状(D類)や瀬戸内の福田K2式段階に顕著な内傾屈曲口縁の浅鉢(C類)は、当該遺跡では原則として存在しない(分類:幸泉2004c)。文様系統では無文が86.8%(口縁部計73点中)で圧倒的主体を占める。有文では器面調整の丁寧な磨消縄文系(第I群)が主流で、沈線文系(第II群)、刻目隆帯文系(第III群)、集約沈線文系(第IV群)の割合は極めて少ない。

197~205・207・211は磨消縄文系(第I群)浅鉢である。211以外は全て福田K2式併行期に相当する。197は口径35.3cmを測る大型の浅鉢で、口縁が強く内傾する。口縁部には杵状の区画文が、胴部には大振りの鉤手状J字文が横位連繋によって繰返し描かれている。縄文原体は短節RL、無文部および内面には丁寧な軋広工具による磨き調整が加えられている。198もまた同等の器形を採る浅鉢で、縦位板状の把手が貼付けられ、口縁両翼には弧状縄文帯が、胴部には横長鉤手状の連繋意匠が描かれている。器面は内外とも軋広工具により丁寧に磨かれている。199~201は口縁端部を欠き、全形が皿状を呈する例。うち201は僅かながら破面外縁に屈曲稜線が残されており、短い反口縁をさらに付設して、本来は鋭い「く」字状口縁を呈していたものと予想される。内面には浅い隆帯による「の」字状意匠が施されている。

202~204は大型皿状を呈する例で、頸部内面にはいずれも段状の稜線が設けられている。口唇部には一条の横走沈線が配されており、204の例から何らかの正文が施されていたものと推定される。器

面は内面側を中心に巻貝条痕後磨き調整が加えられている。205・207は中華ナベ形を呈する例で、T字状に肥厚する口縁端部外縁において二条沈線刻口帯が描かれている。207例から主文部には下弦弧状文等のモチーフが配されていたものと推定される。211は外面が緑帯状に肥厚するボウル形浅鉢で、本遺跡では唯一の出土事例となる。緑帯部意匠は上縁の開放する区画文を主文に下弦弧状の意匠で連続しており、区画外には短節LR縷文が施されている。緑帯文成立期に相当する。

206は刻日隆帯文系（第Ⅲ群）浅鉢で、本遺跡では唯一の出土例である。やや肥厚した口縁部の外縁側に連続した直刻文を施文する。調整は粗雑で、外面は粗い撫で、内面には密な巻貝条痕を加えている。208～210は四国南中央域に分布する松ノ木式に特徴的な集約沈線文系（第Ⅳ群）、あるいはその系譜上にある例。208はボウル状を呈し、ヘナタリ隅小巻貝による擬似縄文地に連続する弧状沈線の描かれる例で、器形および意匠に幾分、第Ⅳ類との類似性が窺える例。209・210は器面を幅広くにより平滑に磨き上げる集約沈線文系（第Ⅳ群）浅鉢で、重畳する菱状、あるいは横走沈線文が連続施文されている。これらは緑帯文成立期に相当する。

212～224は無文系（第Ⅴ群）浅鉢。うち212～217は口唇に刻目等を付す例。212は口径23.0cm、器高9.8cm、底径9.0cmを測る厚く深手の例で、口唇は平縁であるが、推定四箇所において五回前後の小刻目を付している。器面は内外とも巻貝条痕後撫である。213～215は皿形の例。調整は213が巻貝条痕後撫で、214・215は二枚貝頂部による肌理細かな条痕を施す例で（中村2003）、出雲地方周辺で比較的多く認められる手法である。216・217は中華ナベ形の例。いずれも緩やかな波状縁を呈する。調整は巻貝条痕によるが、217内面については幅広く工具による丁寧な磨き調整が加えられている。なお217口唇の付加文はヘナタリ隅小巻貝による擬似縄文である。

218～224は完全な無文浅鉢である。218はボウル形、219～221は中華ナベ形、222は緩「く」字状、223・224は皿形を呈し、うち221は口縁部内面が緑帯状に肥厚する。器面は219・222が内外巻貝条痕後撫で、220・223が巻貝条痕後磨き、221・224は幅広く工具による磨きによって仕上げられている。法量は、220の口径が27.6cm、224は口径19.5cm、器高3.3cm、底径11.1cm、223は口径38.7cm、器高11.6cm、底径9.8cmを測る。なお224については内面に稜線を伴うやや特異な小皿形に復元したが、本来蓋形となる可能性が残されている（幸泉2004c）。

#### 底部（225～266）

225～260には深鉢・鉢底部、261～266には浅鉢底部片を纏めた。225～235は平底。うち225～228・230～232・235は中央が極めて浅く（3mm以内）凹む平底Ⅱ類（幸泉2002a・2002b・2003・2004a）で、平底の主体を占める。229～231は円盤部の器壁が厚く、うち229・230は外縁が僅かに張るなど、九州北部、特に速賀川以西の製作技法に近い。器壁が薄く外縁を意匠的に拡張させる234については、北九州市市街周辺からの影響が想定されよう。底径は、順に9.5cm、9.9cm、12.8cm、13.3cm、11.0cm、11.0cm、10.7cm、12.5cm、12.5cm、13.8cm、11.4cmである。径9～12cmに取まる例が全平底中の64.1%を占めた。236～255は高台底。外縁隆帯は八字状に張る例が多いが（236～238・240・241・244～247・250・251）、隆帯高5mm未満の例が殆どであり、石見西部～広島湾沿岸周辺地域とはこの点が異なっている。

252～255は山陰地方中部、出雲周辺に多い低平高台で（幸泉2004a）、本遺跡においても一定量の

出土を確認している。底径は順に10.7cm、11.1cm、11.7cm、10.4cm、7.8cm、8.6cm、9.2cm、10.2cm、11.0cm、10.4cm、11.0cm、11.6cm、10.3cm、11.0cm、12.2cm、13.4cm、11.3cm、12.5cm、11.4cm、10.0cmである。径9～12cmに収まる例が全高台底中の71.2%を占めた。256～260は凹底。256は外縁に明瞭な断面三角形の粘土紐を貼付ける例で、底径は6.3cmと小型である。257～260は平底Ⅱ類と製作技法が類似する例で、本遺跡出土の凹底は、殆どがこのタイプである。ここでは深さ3mm以上の例を便宜上、凹底と分類している。底径は257から順に9.2cm、9.4cm、10.8cm、9.7cmである。

261～266は浅鉢底部。261は外縁を僅かに隆起させる低平高台、262～264はいずれも高台底である。器向は261が巻貝条痕後崩き、262～264は崩きによって仕上げられている。底径は、順に8.9cm、10.5cm、10.5cm、10.9cmである。265・266は丸底片。内外とも撫でによって仕上げられている。浅鉢丸底の出土総点数は僅か3点であり、全浅鉢底部中の4.3%を占めるに過ぎない。

#### 壺形土器・注口土器 (267～274)

267～273は壺形土器片。全器種組成中に占める割合は僅か0.1%である。267は無頸の広口壺で、辛泉分類の壺Dに相当する(幸泉2004c)。外面には区画状沈線文が描かれている。268は胴部が算盤下状に鋭く張る例で、上半の二条L R縄文帯下には極細線による浅い矩形の意匠が連続施文されている。269～273は把手片。縦位貫通孔を有す269・270、横位貫通孔の271・272、貫通孔のない273に分類できる。270は凹線と低い隆帯、273は刺突と沈線を組合わせた施文である。274は縹帯文成立期前後に相当する注口部片である。注口部全長3.5cm、外径1.8cm、開口部内径は7mmと小振りである。外器面は撫で調整によって仕上げられている。

#### 「的場遺跡土器溜状遺構出土縄文土器の学史的意義」

以上、下関市的場遺跡で検出された土器溜状遺構出土資料を中心に説明を加えてきた。帰属時期は僅か1点の例外(刀崎下層式小片)を除いて、全て縄文後期前葉に限定された。型式学的には福田K2式併行～縹帯文成立期が圧倒的主体であり、若干の中津Ⅱ式土器を含んでいた。これらのなかで、本遺跡においては、まず刻目隆帯文系(第Ⅲ群)土器の成果を挙げねばなるまい。未報告資料を含めた有文深鉢・鉢の組成比(口縁部識別法)によると、Ⅰ：Ⅱ：Ⅲ＝31.3：4.2：64.6(%)で、周辺遺跡の例に比べ、第Ⅱ群沈線文系土器の割合の低さと、第Ⅲ群刻目隆帯文系土器の卓越を指摘できる。従前より、この刻目隆帯文系土器が瀬戸内西部～九州東北部地域において比較的多く発見されることが知られており、四国西南部の宿毛式、九州東内陸部のコウゴ-松式それぞれの一翼を成す類型として、古くから認識されてきた。あるいはまた、両型式が九州御手洗A式のプロトタイプとして何段階とする見解も以前に出されている(西脇1990)。しかしながら、前者の宿毛式は二条縄文帯を地文に、また後者のコウゴ-松式の場合、厳密には二枚貝腹縁圧痕を原体にするなど、小地域的差異が顕著であり、地域間関係の解明が課題となっていた。

幸泉は文様系統の再整理から刻目隆帯文系という包括的名称を提起し、瀬戸内西部域における同系統の再整理を行ったが、当時の資料不足から系譜関係、および地域間関係について充分言及することができなかった(幸泉1999)。同年、中村友博は中国縄文研究会香川大会において山口県出土の刻目隆帯文系土器をもとに、屋敷式の仮設定と問題提起を行ったが、標式とすべき土器が小片僅か枚

点であることに加え、組成比上の割合が不安定で、さらに磨消縄文系は他系統との共存関係すら明らかでないなど、独立型式設定を議論するには、より充実した標式資料の存在が不可欠であった（中村1999）。

そうした中、今回下関市の場遺跡において後期前葉段階に限定しうる短期形成の上器溜状遺構が検出され、該期資料が多量に得られたことは、非常に大きな成果であった。器種、文様系統の概要はこれまでに述べてきた通りであり、第Ⅲ群刻日隆帯文系に関してみても、巻貝原体を多用する点や、文様帯構成に大きく二類型が存在すること、さらには口唇部外縁端部側に刻目を付す類型が新たに明らかにされるなど、周防灘沿岸、九州東北部地域との類似性を有しつつも、長門周辺地域の独自性と呼べるものを初めて浮彫にできた意義は大きい。ここでは的場遺跡出土の刻目隆帯文系土器を「的場類型」と仮称し、今後周辺地域との系統比較を実践するうえで、布石とした。

無文系（第Ⅴ群）土器、および底部の検討では、当該遺跡が周防灘～九州東北部と、山陰中西部双方の影響を、少なからず享受していた事実を明らかにした。特に底部では響灘沿岸諸遺跡と極めて近似した特徴を有しつつも、底径が若干小さい点や、山陰地方の影響をより多く看取できる点において、小地域的独立性の保証が概ね可能となった。深鉢・鉢底部出土総数553点の組成比集計結果からは、平底：高台底：凹底＝54.2：40.7：5.1（％）という結果が得られている。周防灘沿岸～玄界灘周辺地域で主体を占める平底が底部総体の過半数を占めるなど、地理関係に起因する九州地方との交流の深さを窺わせる。低平高台をはじめとする外縁隆帯の低い高台底については相当数の出土が確認されており、日本海を介した山陰中部、出雲方面からの製作伝統についても、少なからず受け容れていた事実が明らかにされた。

器面調整については巻貝条痕の頻用が的場遺跡の特徴であるが、伴出資料に細密条痕や二枚貝頂部条痕、指頂による粗い撫で調整を施す例が一定量認められる点ではやはり、山陰方面からの影響を想定せざるをえない。このほか文様系統組成において沈線文系（第Ⅱ群）を殆ど含まない点では、周防灘北岸域との差異が指摘された。このように、的場遺跡検出の上器溜状遺構出土土器は、単に長門地域における彌年研究への貢献にとどまらず、瀬戸内海側、さらには日本海を介した九州、山陰相互の交流関係を究明するうえで、その指標とすべき重要な成果を提供したことになろう。

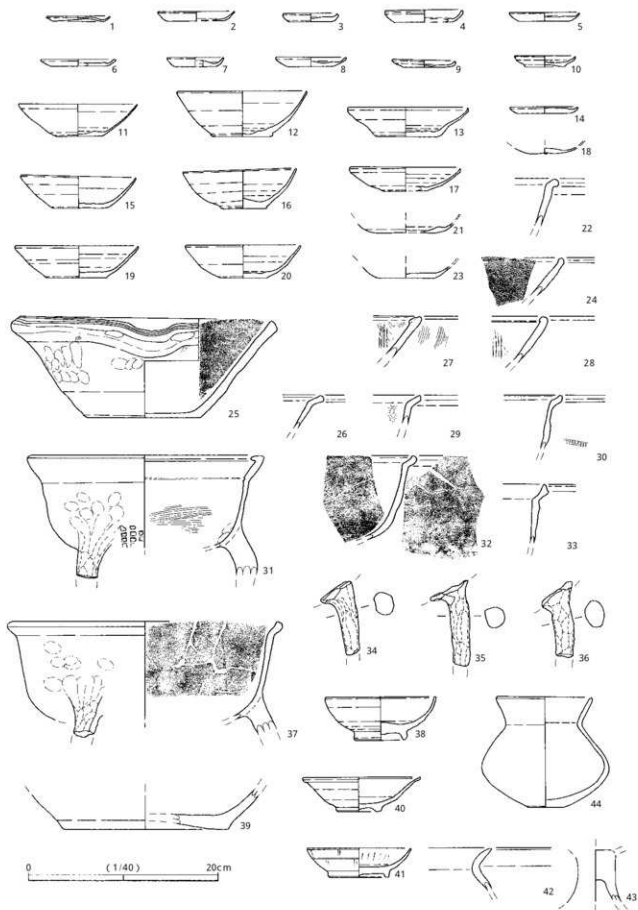
#### 縄文土製品（第72図 275、図版73）

275は、縄文後期前葉段階に形成された上器溜状遺構より出土した土製品である。用途は不明である。断面凸レンズ状、平面形は円盤状を呈する。文様は確認できない。直径9.0cm、右側縁を折損している。表面は撫で調整によって比較的平滑に仕上げているが、裏面は指頭圧痕を顕著に残す粗雑な作りである。焼成がややあまく、橙色（5Y R6/6）を呈している。

（幸泉 満夫）

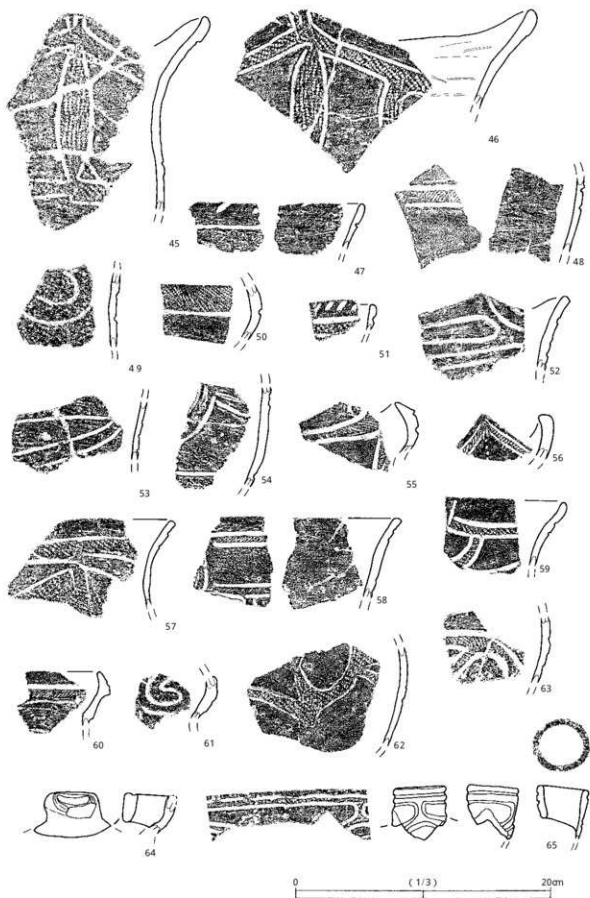
[参考文献]

- 泉 拓良・玉田芳英 (1986) 「文様帯系統論」『季刊考古学』第17号
- 宇野隆夫 (1992) 「食器針葉の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
- 幸泉満夫 (1999 a) 「西瀬戸内における九州系縄文土器」『舊来』第3号
- 幸泉満夫 (1999 b) 「包含塚出土遺物 縄文土器」・「石井国友遺跡出土の縄文後期土器について」『石井国友遺跡—第1—4次調査区—』今治市教育委員会
- 幸泉満夫 (2001) 「西日本縄文後期土器組成論」『考古学研究』第48巻第3号
- 幸泉満夫 (2002) 「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性」『四国とその周辺への考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集
- 幸泉満夫 (2003) 「土器底部から見た縄文社会の地域性」『瀬戸内考古学』瀬戸内考古学研究会十周年記念大会
- 幸泉満夫 (2004 a) 「山陰地方における縄文時代後期社会の小地域性」『考古論集』河本正利先生退官記念論集
- 幸泉満夫 (2004 b) 「西部瀬戸内」・「中津式の成立と展開」中国縄文研究会
- 幸泉満夫 (2004 c) 「土器から見た山陰域と沿岸域」『研究発表資料集』日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会
- 幸泉満夫・幸泉文子 (2005) 「九州の成立期終帯文土器」『山口県立山口博物館研究報告』第31号
- 澤下孝信 (1991) 「土器様式伝播考」『古文化談叢』第25集
- 澤下孝信 (1994) 「九州・四国巻消縄文系土器」『季刊考古学』第48号
- 潮見 浩 (1968) 「月崎遺跡」・「宇部の縄文文化—月崎遺跡の縄文式土器について—」『宇部の遺跡』宇部市遺跡跡跡学術調査団・宇部市教育委員会
- 橘 呂何圃 (1974) 『コウゴ—松造跡調査報告』大分県久住町教育委員会
- 谷口 肇 (2004) 「細密条痕」の復元」『古代』第116号
- 玉田芳英 (1989) 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観』4
- 玉田芳英 (1990) 「中津式土器」『符葉・称名寺式土器に関する交流研究会の記録』横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録第7号
- 丁 崇 盛 (1992) 「西日本縄文後期土器の二三の課題」『古代古備』第14集
- 中村友博 (1999) 「山口県縄文時代研究の現状と課題」『中・西国縄文時代研究の現状と課題』中国縄文研究会10周年記念人会資料
- 中村友博 (2003) 「刷毛目様細密条痕の一種について」『山門人学考古学論集』近藤壽一先生退官記念論文集
- 西脇対名夫 (1990) 「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』長崎県多良見町教育委員会
- 秦 広之 (2000) 「コウゴ—松式土器に関する覚書」『おおい考古』第13集
- 藤田英憲・徳永 裕・石井能彦 (2004) 『郷遺跡』山口県埋蔵文化財センター
- 前田光輝 (1994) 「宿毛式、その特質」『研究紀要』第1号、高知県文化財部埋蔵文化財センター
- 水ノ江和同 (1993) 「九州の終帯文土器」『古文化談叢』第30集上
- 柳浦俊一 (2000 a) 「山陰地方縄文時代後期初期—中葉の土器編年」『高根考古学会誌』第17集
- 柳浦俊一 (2000 b) 「山陰地方における福田KⅡ式並行の土器群について」『古代古備』第22集
- 横山浩一 (1978) 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第二十三号
- 横山浩一 (1979) 「刷毛目技法の導流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第二十四号

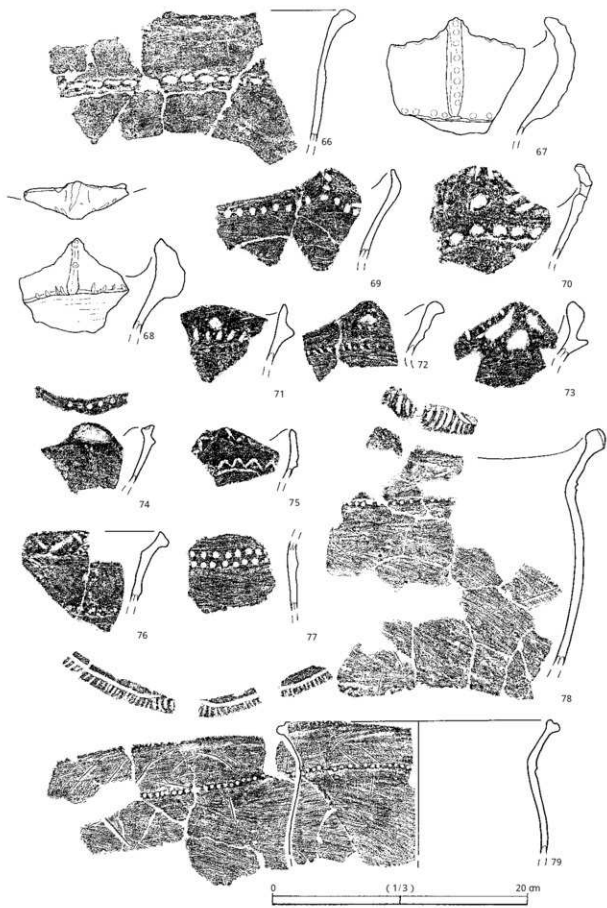


22 SK1 31 SK7 21-25 SK9 39 SK10 33 SK11 23 SK12  
 11-18 SP1 15-19 SP76 1 SP82 12 SP98 2-6 SP115 34 SP164 7 SP198 29 SP217 26 SP221 17 SB2 30 SB7

第56図 弥生時代以降の遺物

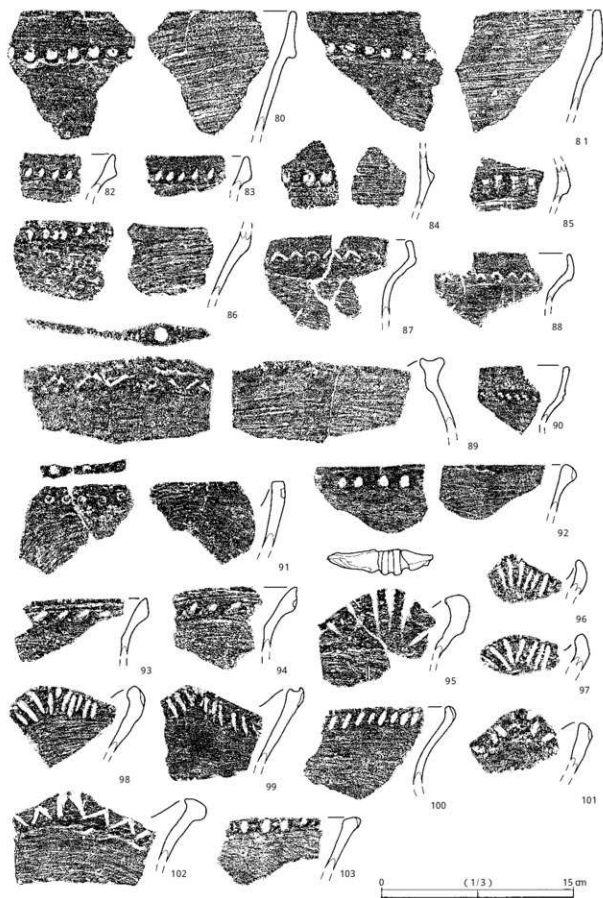


第57图 縄文土器実測图(1)

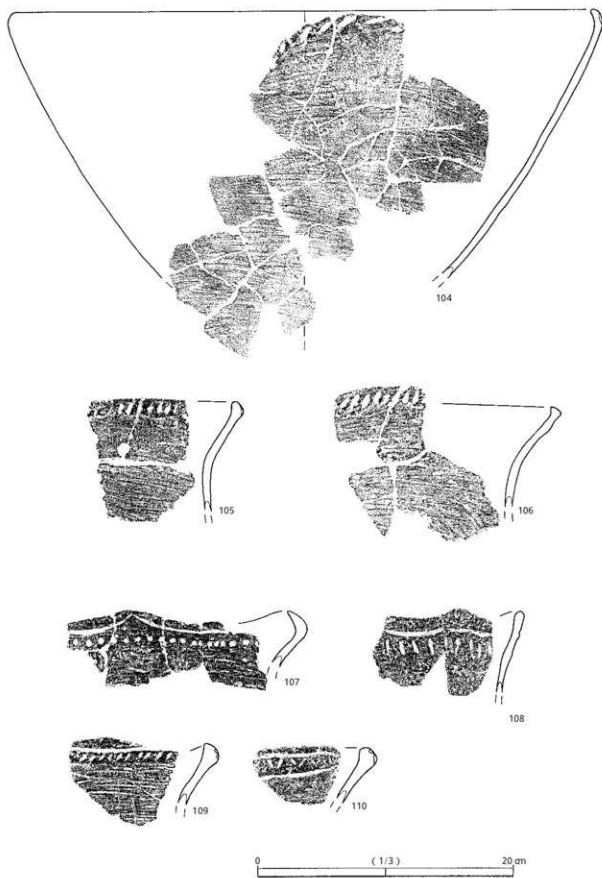


第58图 绳文土器实测图(2)

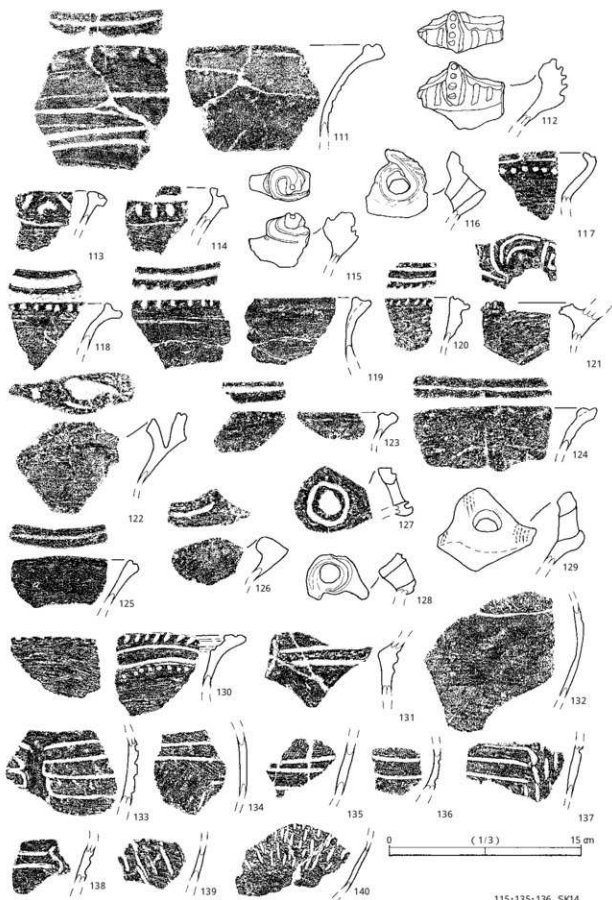




第59图 绳文土器实测图(3)

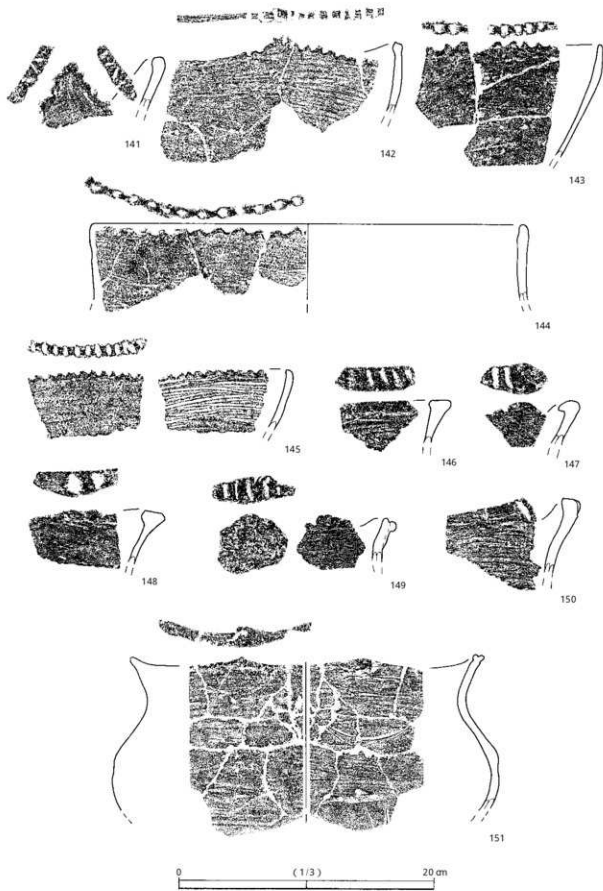


第60図 縄文土器実測図(4)

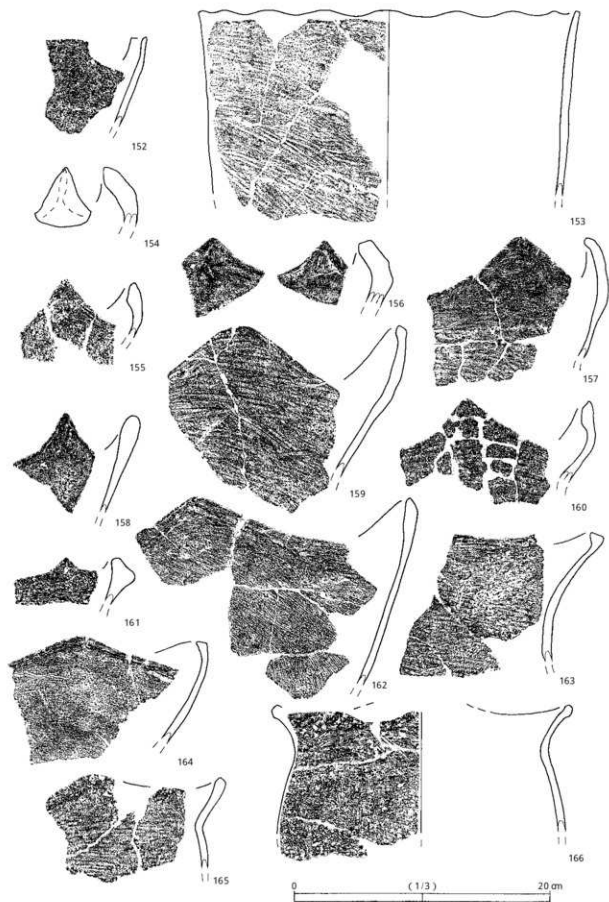


115-135-136 SK14

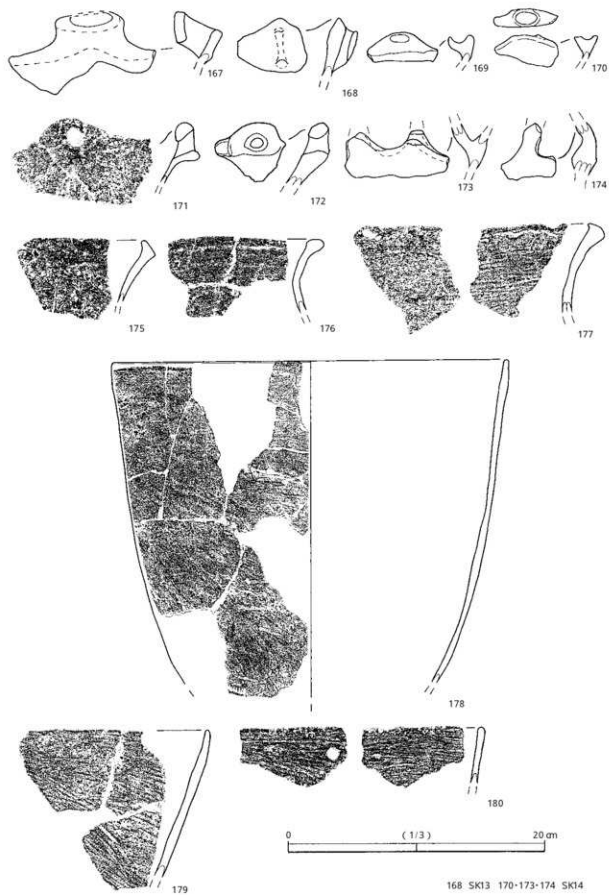
第61图 縄文土器実測图5)



第62図 縄文土器実測図(6)

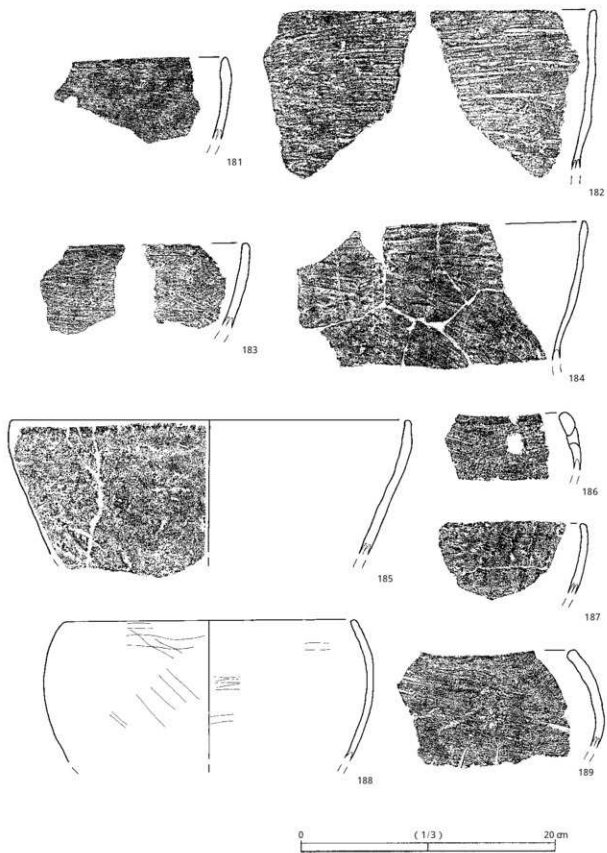


第63図 縄文土器実測図(7)

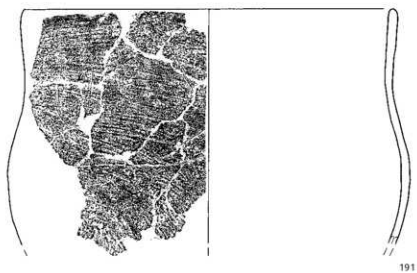
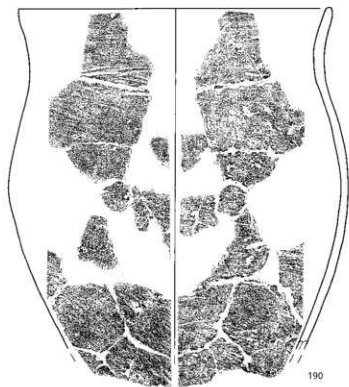


168 SK13 170-173-174 SK14

第64图 縄文土器実測图(8)



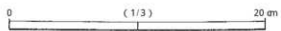
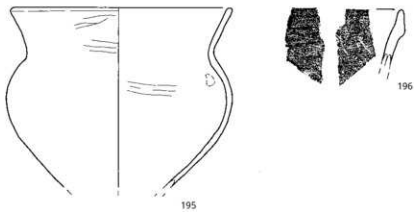
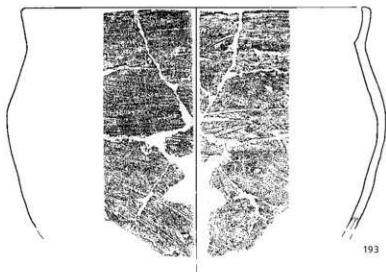
第65図 縄文土器実測図(9)



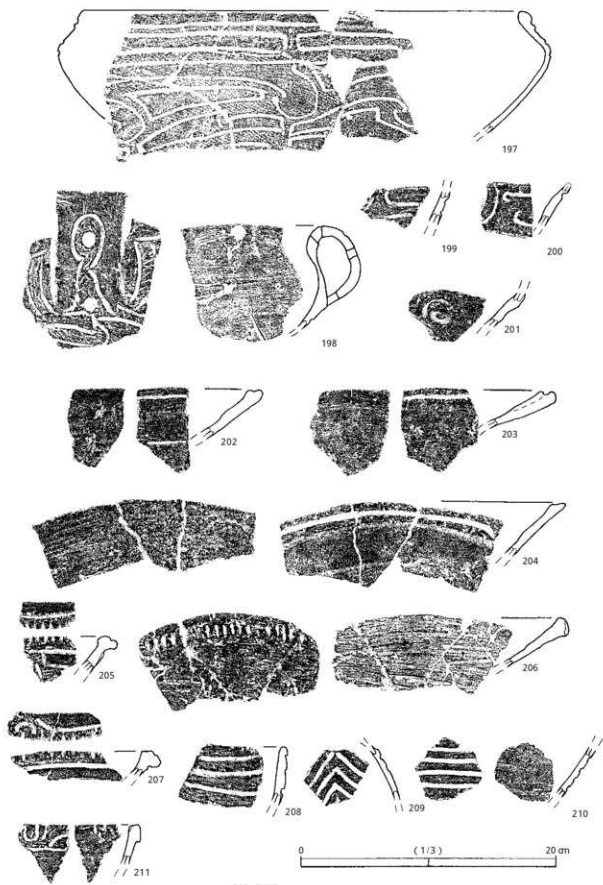
0 ( 1/3 ) 20 cm

第66図 縄文土器実測図(10)



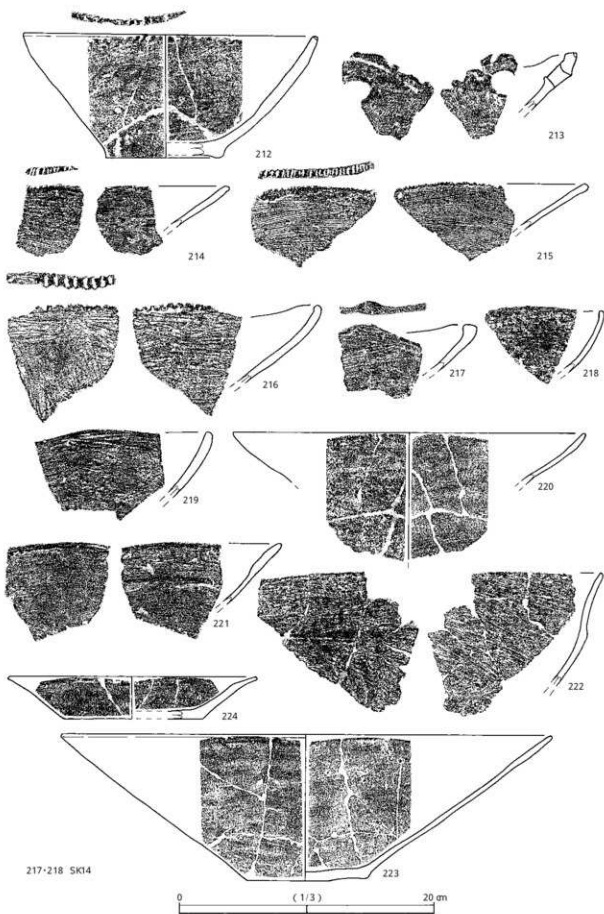


第67図 縄文土器実測図(11)

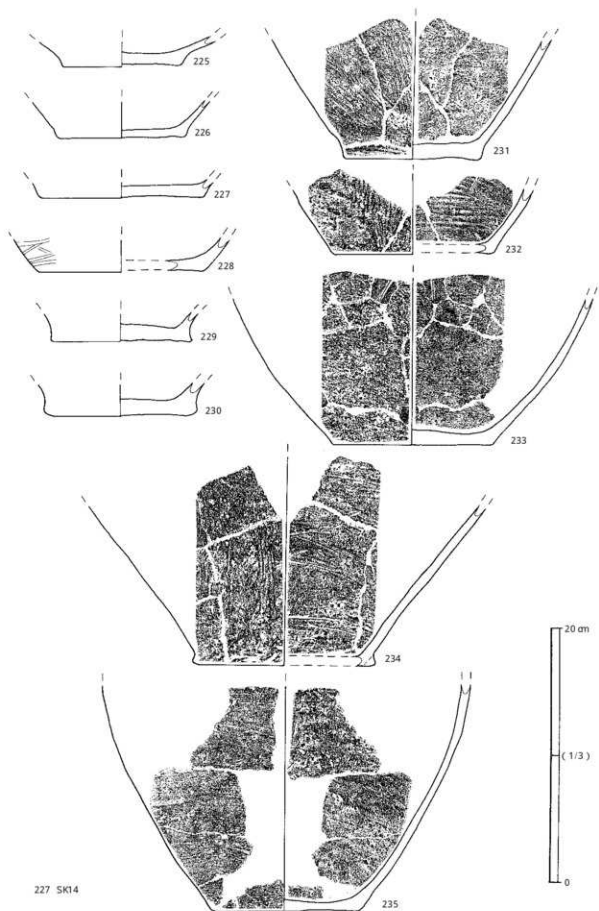


203 SK14

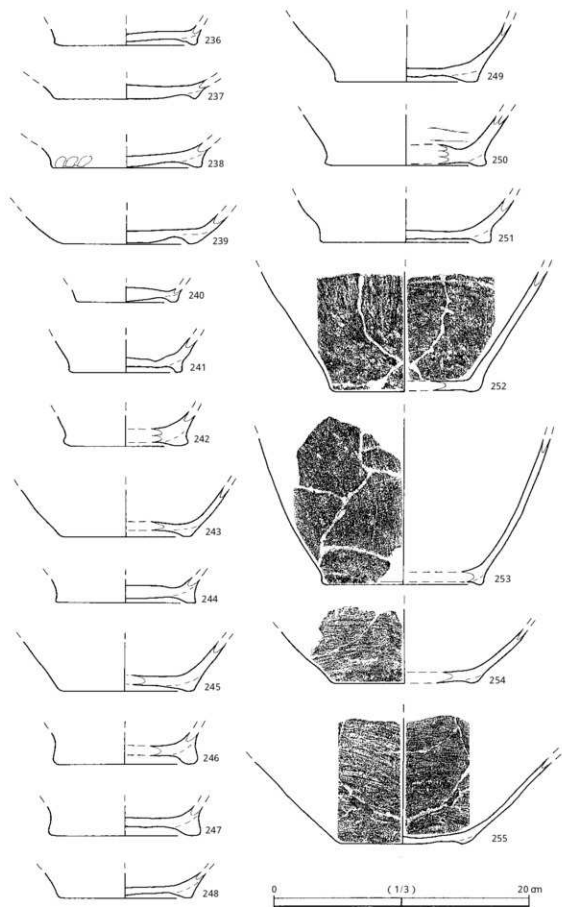
第68図 縄文土器実測図(12)



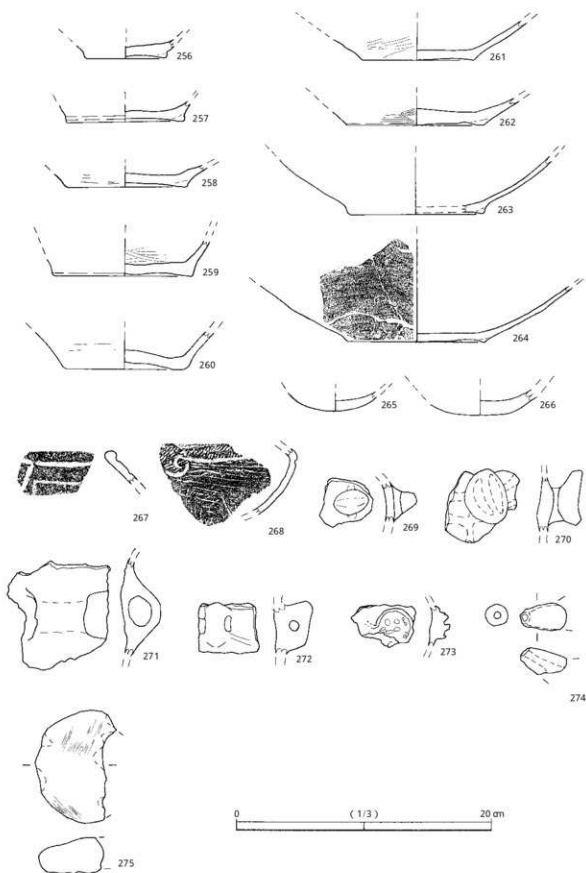
第69図 縄文土器実測図(13)



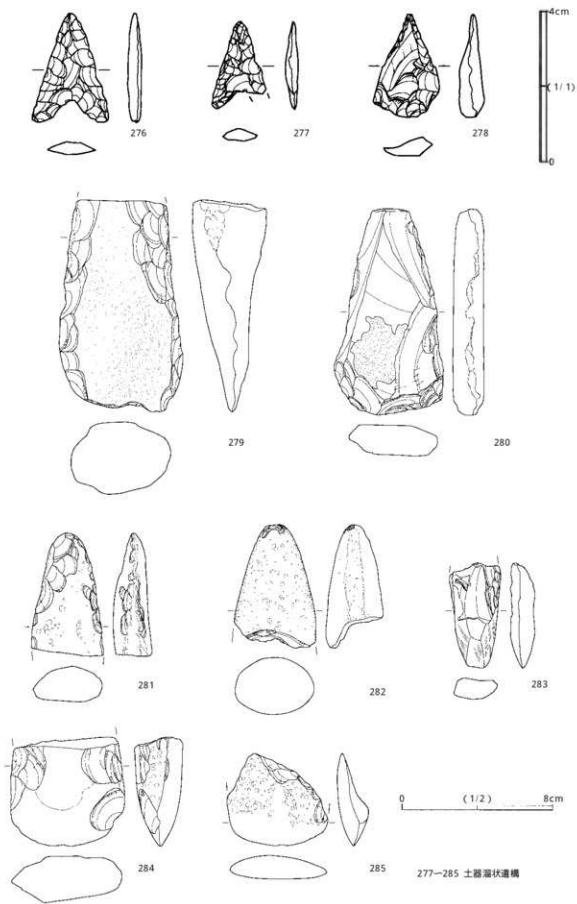
第70図 縄文土器実測図(14)



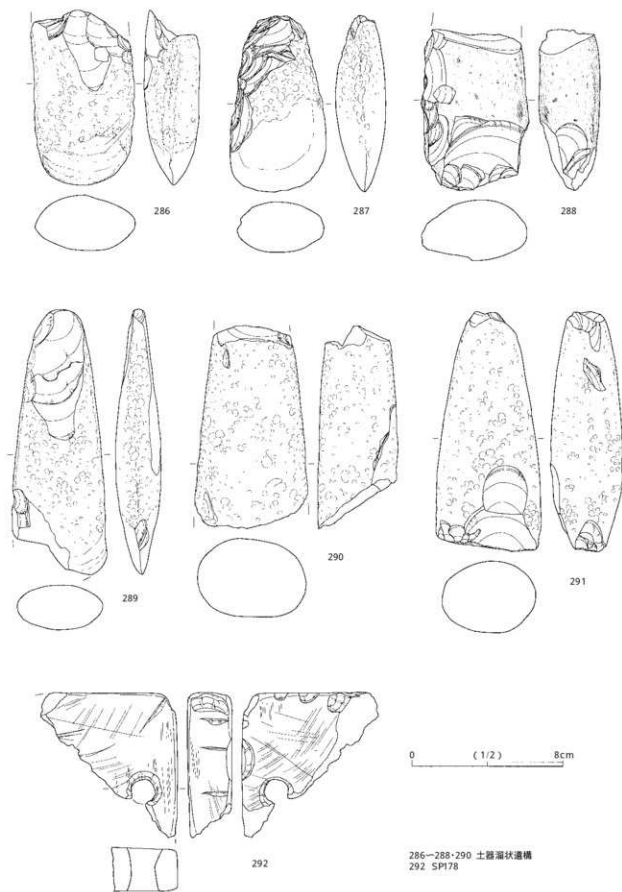
第71图 縄文土器実測图(15)



第72図 縄文土器実測図(16)



第73図 石器・石製品実測図(1)



第74図 石器・石製品実測図(2)



### 3 まとめ

今回の調査で確認できた遺構は、掘立柱建物跡8棟、土坑14基、柱穴522個、土器溜状遺構1基である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、瓦質土器、陶磁器、石製品等がある。これらの遺構や遺物は縄文土器後期中世の大別2期に分かれ、遺構の9割は遺跡の南側に集中している。縄文時代の遺構としては、土坑2基、土器溜状遺構1基、小ピット群があり、他は掘立柱建物跡をはじめとして中世に属するものである。掘立柱建物跡の柱穴には、SP1・76・98のように建物の柱を抜き取った後、意図的に土器が埋納されたと考えられる例も認められ、建物廃絶に伴う祭祀行為を窺わせるものである。中世の出土遺物は多くが土師器で15～16世紀頃のものが多く、青磁や17世紀前半の唐津焼などの陶磁器も出土している。この頃、肥中街道は人内氏により、国内外の交易ルートの中核として重要な役割を果たしている。肥中街道の通り道にあたるこの地も例外なく交易の恩恵を授かったと思われる。このことは、神田地区が中世にかなり経済的に活況であったと記録に残っていることから窺える。

今回の調査で最も注目されるのは、調査区最下層に当たる土器溜状遺構から、縄文時代後期の土器が多量に出土したことである。豊北町における縄文時代の遺跡には晩期の神田遺跡がある。また、本年度調査した宮迫神田遺跡からは、縄文時代の前期と晩期の土器が出土している。しかし、今回のように多量の縄文土器が検出された例は豊北町ではこれまでに無く、県西部においても近年類例を見ない。縄文時代後期を主体とした遺跡の調査例としては、県東部においては、内陸山間部に位置する本郷村の郷遺跡があり、400点を超える縄文土器片や17基のおとし穴遺構などが検出され、土器は後期のものが多い。また、県西部の縄文時代の遺跡として、神田遺跡が知られている。神田遺跡は本州最西端にあり、河岸段丘から海成砂堆にかけて立地した臨海遺跡であり、縄文時代の早期末から後期に及ぶがその主体は後期にある。また、貯蔵穴とみられる土坑や埋葬跡などが検出されている。それぞれ、地理的環境条件はやや異なるが、縄文時代後期という点を考えると、今回の的場遺跡における縄文土器出土は、従来の分布域の空白地を埋める重要な地理的位置を占めており、今後の広域的な土器編年や地域間交流等の研究において貴重な基礎資料を提示することとなるであろう。

的場遺跡は、わずかに張り出した丘陵上に位置し、口前の平地も狭く、周囲の山は険しい。このような地理的制約等によって、この地では大集団を構成することは困難とみられ、比較的小集団による生活が営まれていたと思われる。今回、土器溜状遺構の下位からは柱穴状の小ピット群を検出したが、建物として復元することはできなかった。しかし、多量の土器が出土した土器溜状遺構や土坑の存在は、より高位側に堅穴住居等の生活の場が形成されていたことを十分に推定させるものである。また、斜面下位側に当たる調査区南側は土器などの廃棄的な役割を果たしていたものと推測されよう。残念ながら、近世以降の水田開発によって縄文遺構の大半は失われたものとみられる。本遺跡における縄文時代の具体的な集落の様子は現段階の資料では解明できないが、さらに今後の周辺地域の調査による新たな進展に期待したい。

#### [参考文献]

- 山口県教育委員会 『神田遺跡 第1次発掘調査概要』1971年
- 豊北町史編纂委員会 『豊北町史』1994年
- 山口県埋蔵文化財センター 『切畑遺跡Ⅱ』2000年
- 山口県埋蔵文化財センター 『郷遺跡』2004年

## V 付 編

### 宮迫神田遺跡の土器の表面にみられる砂礫

奥田 高

宮迫神田遺跡から出土した土器破片の資料14点の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。最初に、資料全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察結果と推定される砂礫採取地について述べる。

第1表に示すように資料番号194①、197、194②、186、187、195は殆ど同じような砂礫構成を示すことから同じ砂礫構成の砂礫を使用しているといえる。

資料番号194①、197、194②、186、187、195：砂礫種は花崗岩・石英・長石・黒雲母・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～5mm、量が僅か～ごく僅かである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が僅か～中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が中である。黒雲母は黒色・金色、板状で、粒径が0.2～0.7mm、認められない資料やごく僅か～僅かの資料がある。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.5mm、量が僅か～中である。

当遺跡の西南方に黒雲母花崗岩が分布するが角閃石は殆どみられない。このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が比較的多いことから、近くでは糸島平野付近の砂礫と推定される。

資料番号196：砂礫種は花崗岩・閃緑岩・泥岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～3mm、量が僅かである。石英・長石が噛み合っている。閃緑岩は灰色、粒形が角、粒径が0.5～1.5mm、量がごく僅かである。石英・角閃石が噛み合っている。泥岩は暗灰色、粒形が亜角、粒径が4mm、量がごく僅かである。古期層起源の様相を呈する。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状・粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.4mm、量が中である。

このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が比較的多いことから、糸島平野付近の砂礫と推定される。また、前述の資料に比べて閃緑岩や泥岩が認められることから、同じ地点の砂礫でないかと推定される。糸島平野に流れ込んでいる雷山川の砂礫構成は前述の資料の砂礫構成に似ており、東方の櫛川や室見川では泥岩が稀に含まれる。

資料番号141：砂礫種は流紋岩・石英である。流紋岩は灰白色・灰色・暗灰色・黒色で、粒形が角・亜角・亜円、粒径が0.4～1.5mm、量が多い。石英がガラス質で、石英の珪晶が認められるものもある。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～2mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。

当遺跡の付近には閃緑岩の堆積物や流紋岩、西南方には黒雲母花崗岩が分布している。流紋岩が分布するような地の砂礫はこの資料のような砂礫構成を示す。河川等の影響により遺跡付近に分布する堆積物・流紋岩・花崗岩が混ざりような条件の地の砂礫は資料番号171の砂礫となると推定される。

資料番号151：砂礫種は花崗岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～4mm、量ごく僅かである。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.3～3mm、量が中である。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.3mm、量が僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が比較的多いことから、糸島平野付近の砂礫と推定される。

資料番号171：砂礫種は花崗岩・流紋岩・玄武岩・泥岩・片岩・石英・長石・輝石である。花崗岩は灰白色・灰色で、粒形が角、粒径が0.5～1.5mm、量が僅かである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。流紋岩は灰白色・灰色で、粒形が角・亜角、粒径が0.5～6mm、量が中である。石基がガラス質で、石英の斑晶がみられるものがある。泥岩は赤茶色・灰色で、粒形が角・亜角、粒径が1～3mm、量がごく僅かである。玄武岩は灰緑色、粒形が角、粒径が0.4～0.7mm、量がごくごく僅かである。片岩は灰色、粒形が角、粒径が1～5mm、量が僅かである。泥質片岩である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～3mm、量が多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～0.5mm、量が僅かである。輝石は暗緑色、粒状で、粒形が角、粒径が0.3mm、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は当遺跡付近で花崗岩の分布地に近い付近の砂礫と推定される。

資料番号122：砂礫種は花崗岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が多い。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.2mm、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が稀であることから、当遺跡南西方の花崗岩の分布地付近の砂礫が推定される。

資料番号200：砂礫種は流紋岩・砂岩・石英・長石・輝石である。流紋岩は白色・灰白色・灰色・褐色で、粒形が角・亜角、粒径が0.3～2mm、量が僅かである。石基がガラス質で、石英の斑晶がみられるものがある。砂岩は褐色で、粒形が亜角、粒径が1.5mm、量がごくごく僅かである。細粒砂からなる。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.1～1mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1mm、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は当遺跡付近の砂礫と推定される。

資料番号110：砂礫種は花崗岩・石英・長石・角閃石・輝石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.3～3mm、量が僅かである。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～2mm、量が中である。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.2mm、量がごくごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒形が亜角、粒径が0.1～0.5mm、量がごくごく僅かである。周囲が溶融した様相を呈する。

輝石は火山灰起源のものと形状から推定される。このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が稀であることから、当遺跡南西方の花崗岩の分布地付近の砂礫が推定される。

資料番号201：砂礫種は流紋岩・石英・長石・輝石である。流紋岩は白色・灰白色・暗灰色で、粒形が角・亜角、粒径が0.3～1mm、量が中である。石英がガラス質で、石英の産品がみられるものもある。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.1～2mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2mm、量がごくごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1mm、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は当遺跡付近の流紋岩が分布する付近の砂礫と推定される。

以上のように砂礫構成から壺棺と151の壺と186・187の甕は福岡市西方の糸島半島の砂礫と推定され、他は当遺跡付近あるいは南西方の花崗岩分布地の砂礫構成を示す。福岡県小郡市で確認した例であるが、一対となる壺棺一基のみに多量の片岩の砂礫が含まれており、朝倉山地か福岡市東方の片岩分布地域の砂礫で作られていた。吉野ヶ里遺跡で出土しているように頭部がない遺骸が埋葬されている例や漆を塗っていることから、製作に施す日数を考慮すれば、少なくとも一部の人々には埋葬容器の壺棺が用意されていたと推定される。このような推定にたてば、当遺跡の壺棺は一部の人に作って糸島から運ばれてきたものであると推定される。長門や周防付近の河川の砂礫構成が調査できれば、より詳細に在地産の土器の砂礫構成について検討できるであろう。



# 宮迫神田遺跡図版



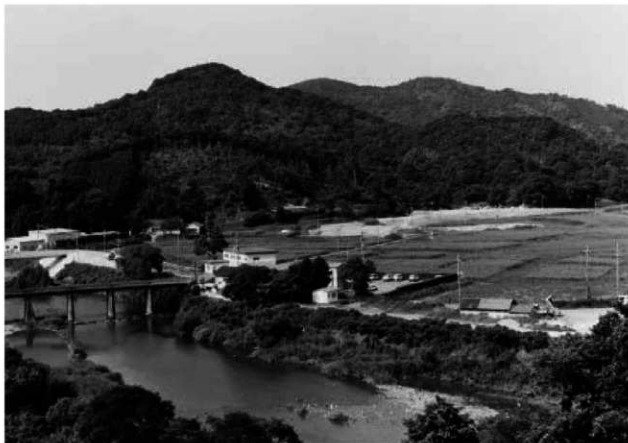


調査区透景（北から）



調査区全景





調査区遠景（北東から）



D区 全景（西から）



SB 9 遺物出土状況 (北から)



SB 8 完掘状況 (北から)



SB 4 完掘状況 (東から)



SB 3 完掘状況 (南から)



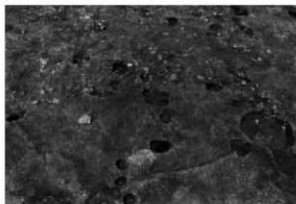
SB 5 完掘状況 (北から)



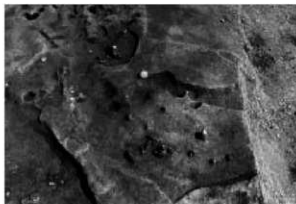
SB 2 遺物出土状況 (北から)



SB 1 完掘状況 (西から)



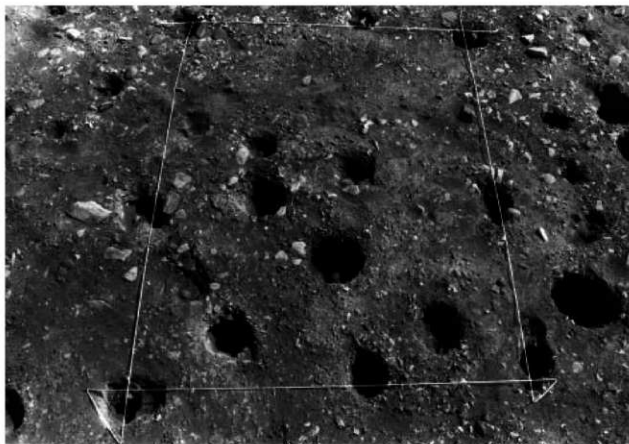
SB 6 完掘状況 (東から)



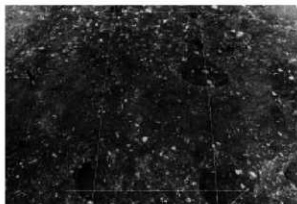
SB 7 遺物出土状況 (南から)



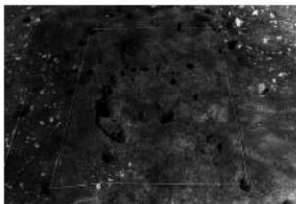
SB 7 土器出土状況 (西から)



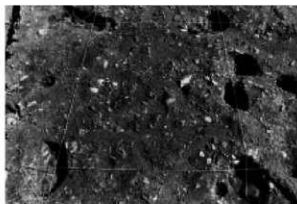
SB18 (北から)



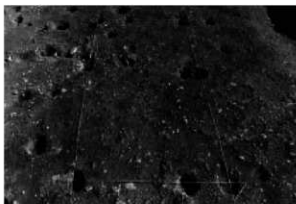
SB17 (南から)



SB21 (南から)



SB19 (北から)



SB20 (北から)



SK 35 遺物出土状況 (東から)



SK 30 遺物出土状況 (東から)



SK 3 遺物出土状況 (北から)



SK 4 遺物出土状況 (東から)



SK 6 遺物出土状況 (南から)



SK27 遺物出土状況 (西から)



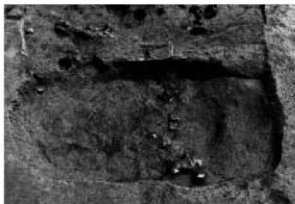
SK12 遺物出土状況



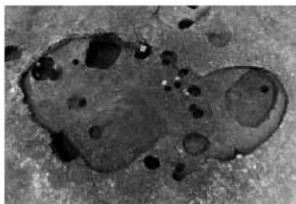
SK1 完掘状況 (北から)



SK20 遺物出土状況 (西から)



SK26 遺物出土状況 (南から)



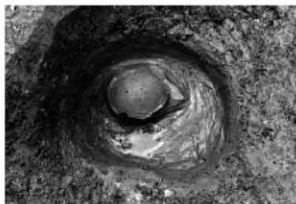
SK 9 遺物出土状況 (東から)



SK 33 遺物出土状況 (東から)



SK 34 遺物出土状況 (北から)



SP 229 遺物出土状況 (東から)



埋甕出土状況 (北から)



C区 遺物包含層 咸平元宝出土状況 (東から)



C区 遺物包含層 土器出土状況 (東から)



C区 遺物包含層 土器出土状況 (南から)



C区 遺物包含層 調査区北端下層 (北から)



C区 遺物包含層 土器出土状況 (南から)



C区 遺物包含層 遺物出土状況 (北から)

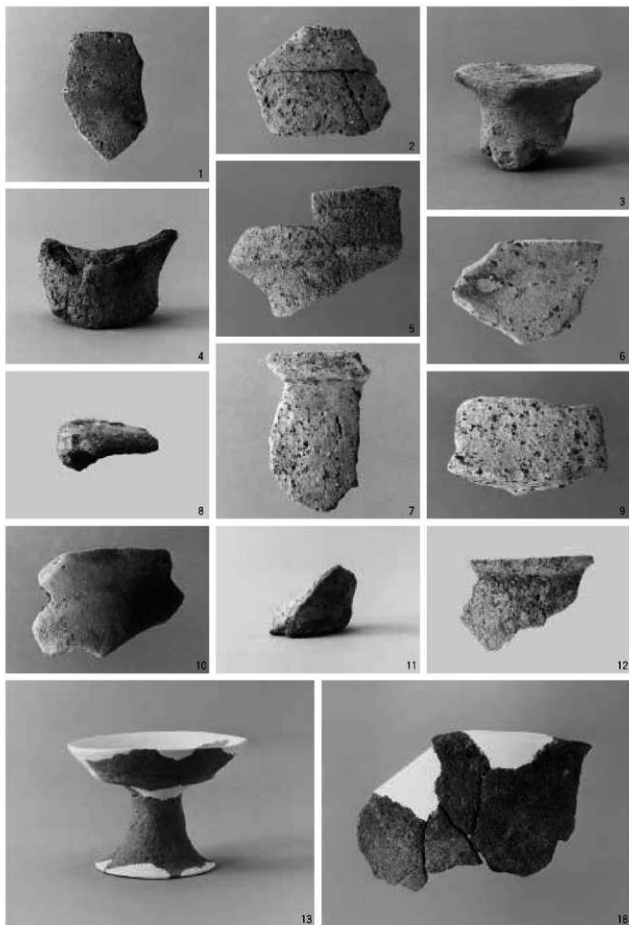


C区 遺物包含層 トレンチ③土層 (北から)

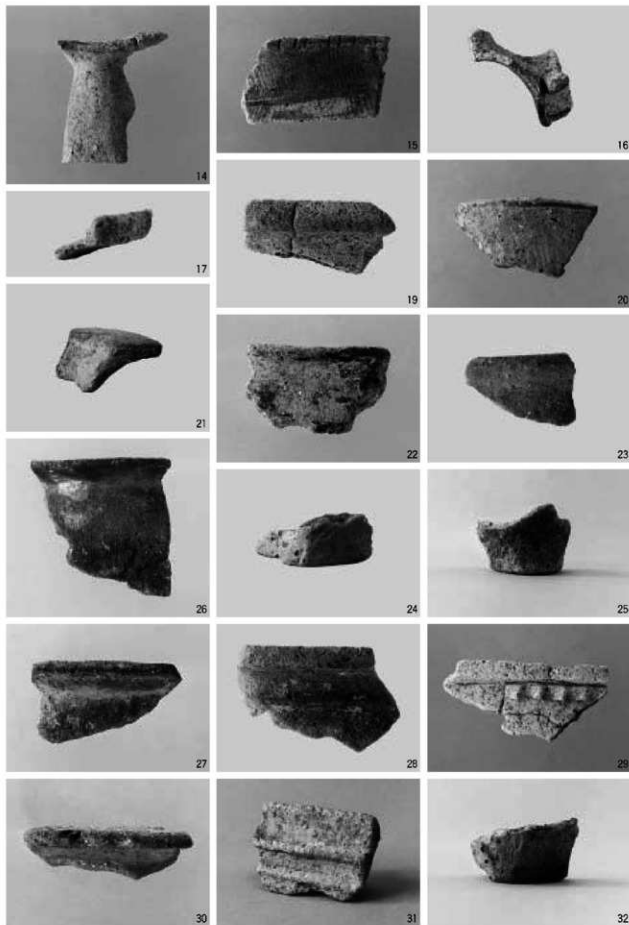


C区 遺物包含層 調査区北端土層 (南から)

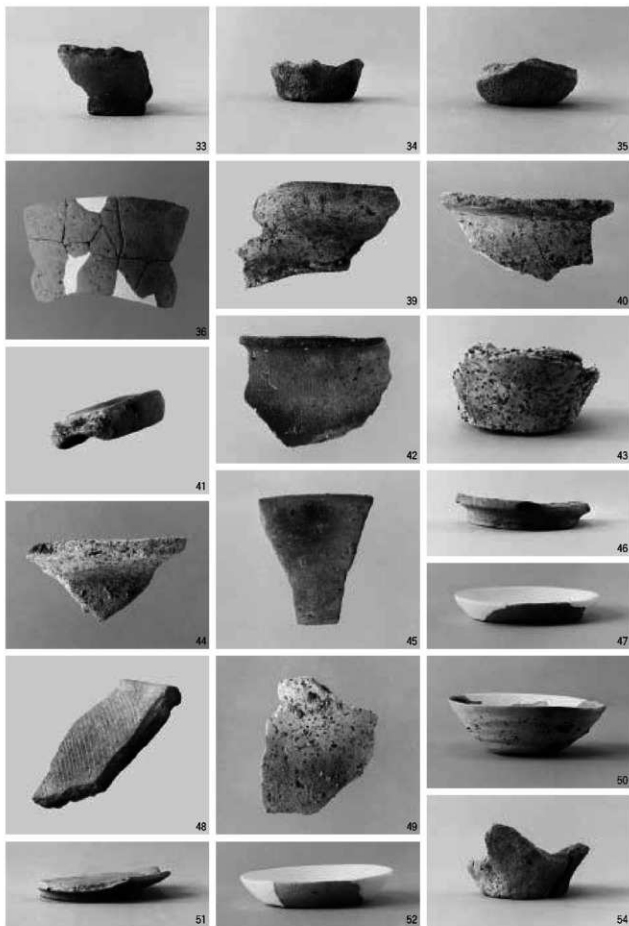




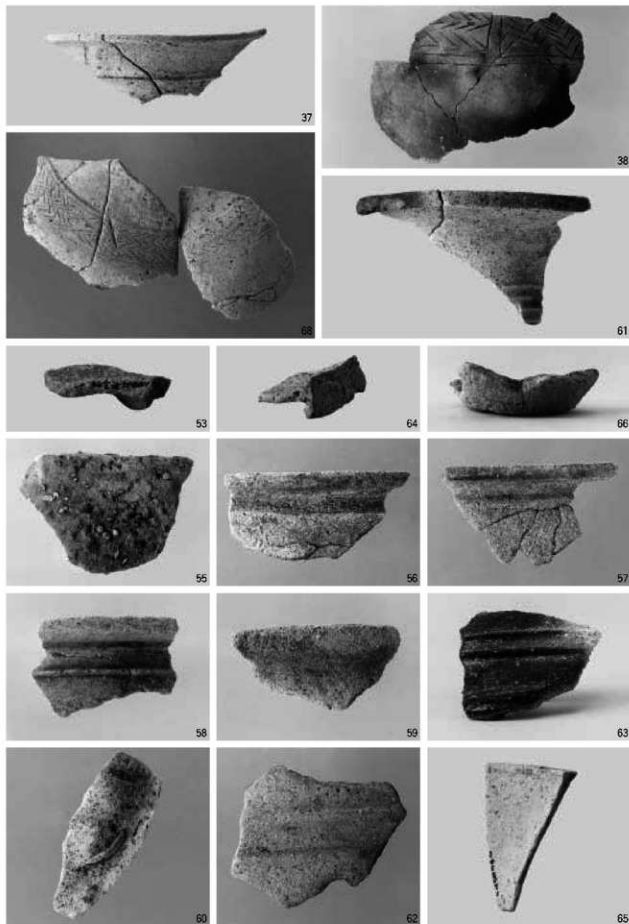
宮迫神田遺跡出土遺物(1)



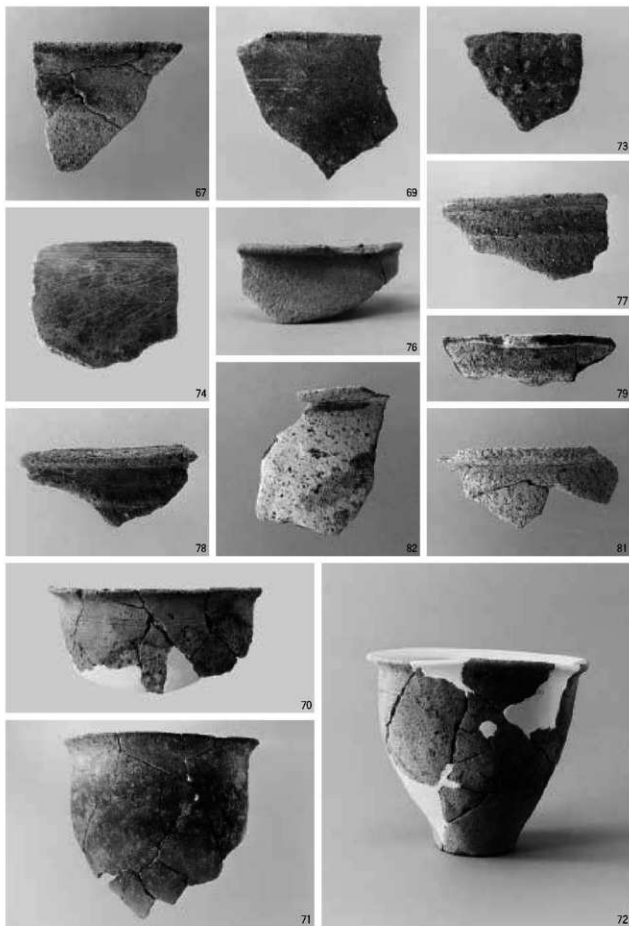
宮迫神田遺跡出土遺物(2)



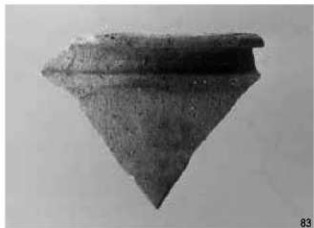
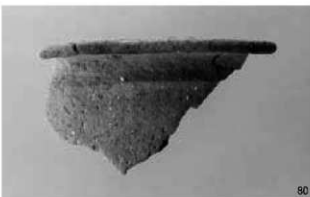
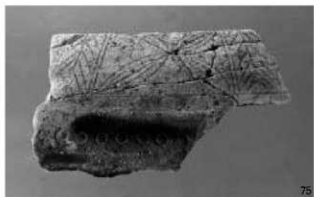
宮迫神田遺跡出土遺物(3)



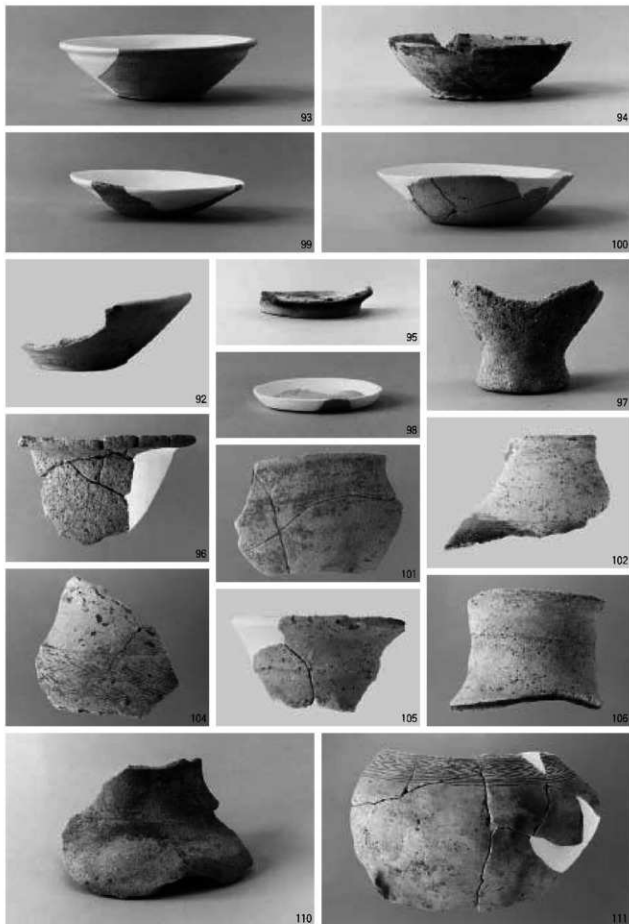
宮迫神田遺跡出土遺物(4)



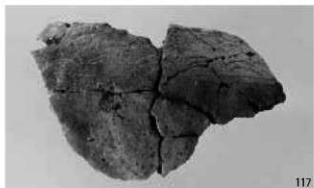
宮迫神田遺跡出土遺物(5)



宮迫神田遺跡出土遺物(6)

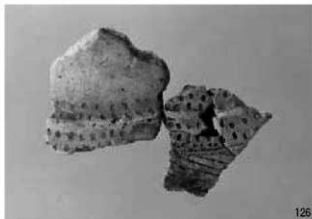
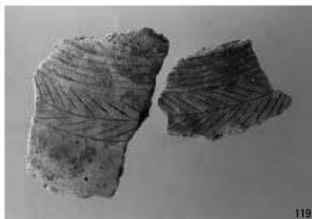


宮迫神田遺跡出土遺物(7)

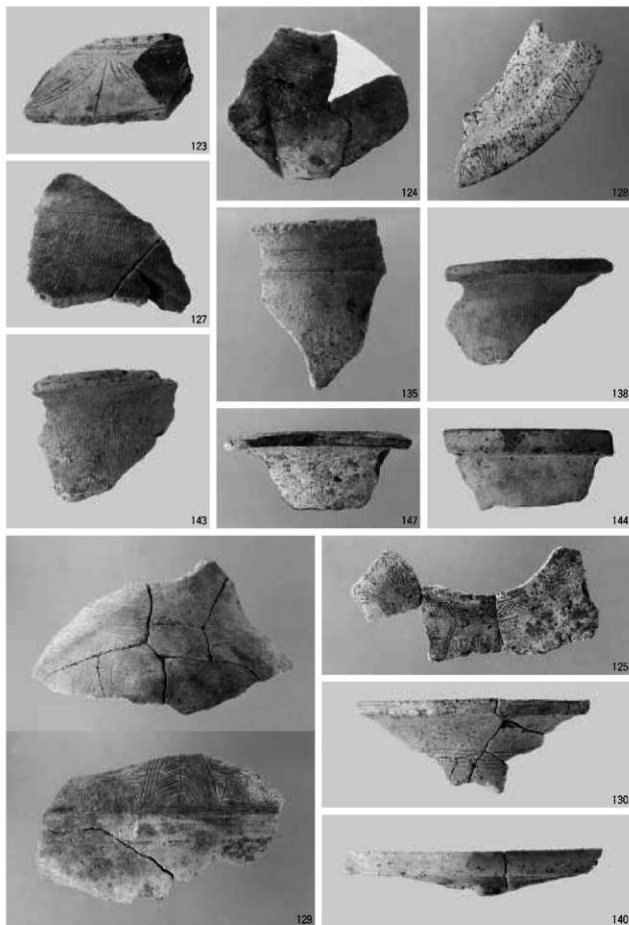


宮迫神田遺跡出土遺物(6)

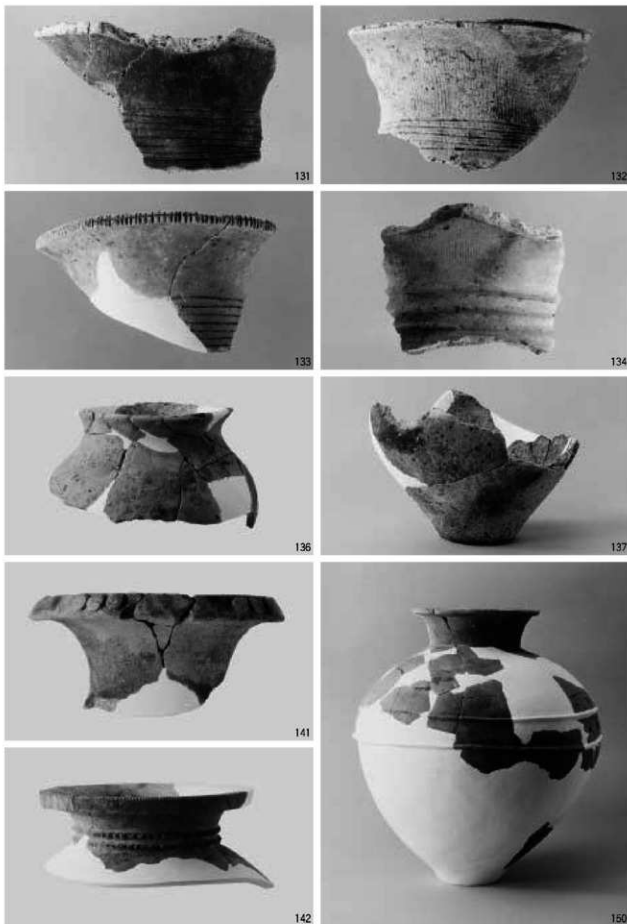




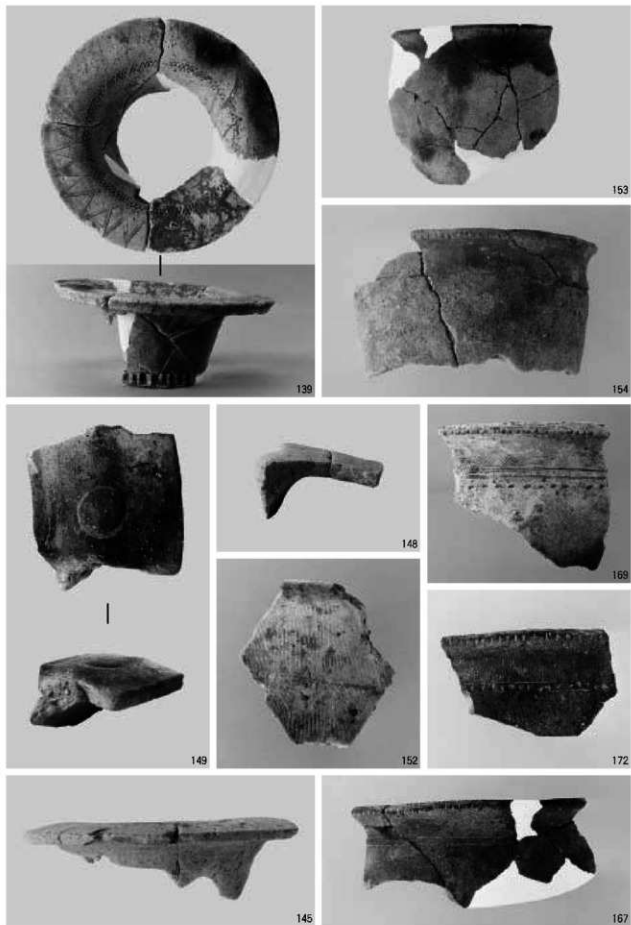
宮迫神田遺跡出土遺物(9)



宮迫神田遺跡出土遺物(10)



宮迫神田遺跡出土遺物(1)



宮迫神田遺跡出土遺物(12)



155



158



156



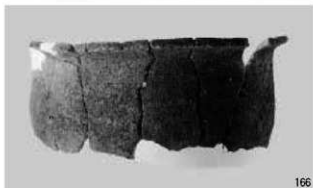
157



160



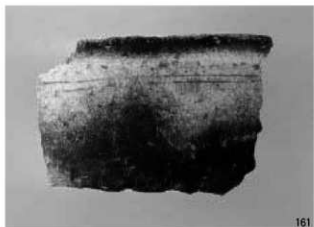
159



166



170



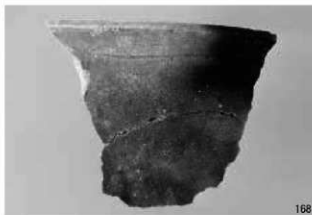
161



163



162



168



164



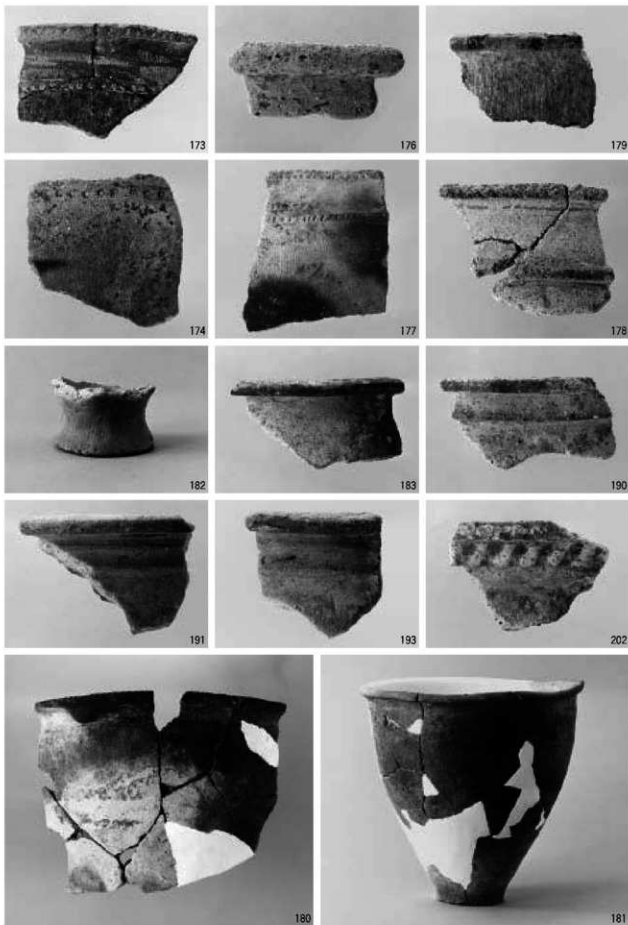
165



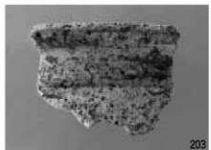
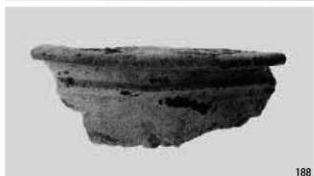
171



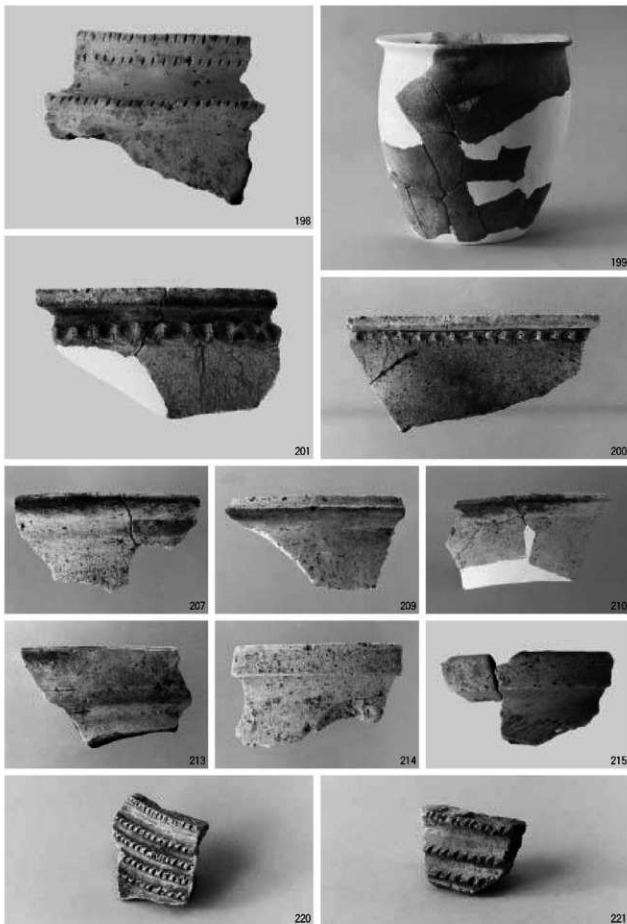
175



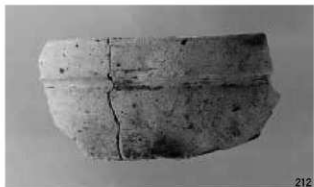
宮迫神田遺跡出土遺物(19)





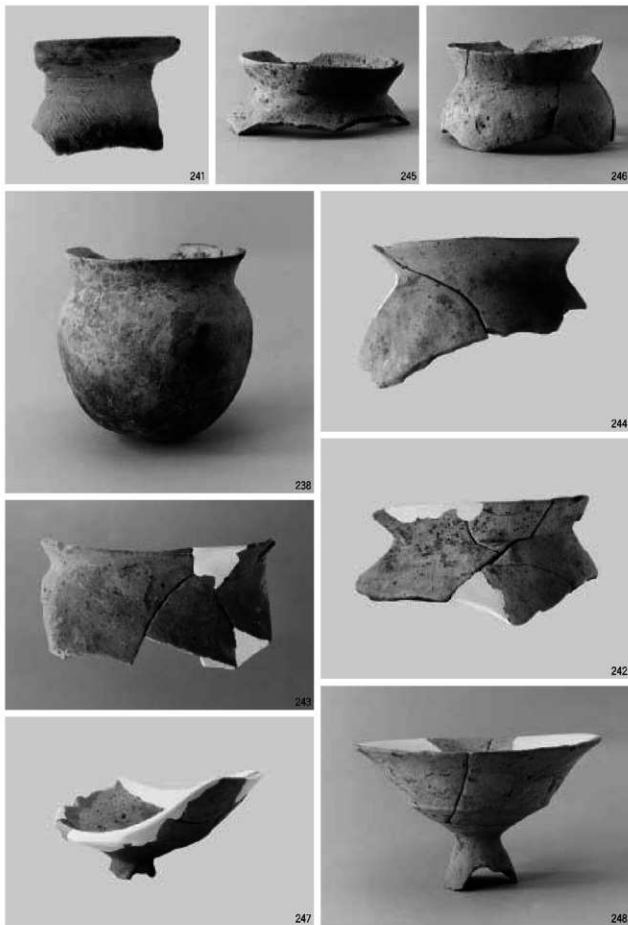


宮迫神田遺跡出土遺物(17)

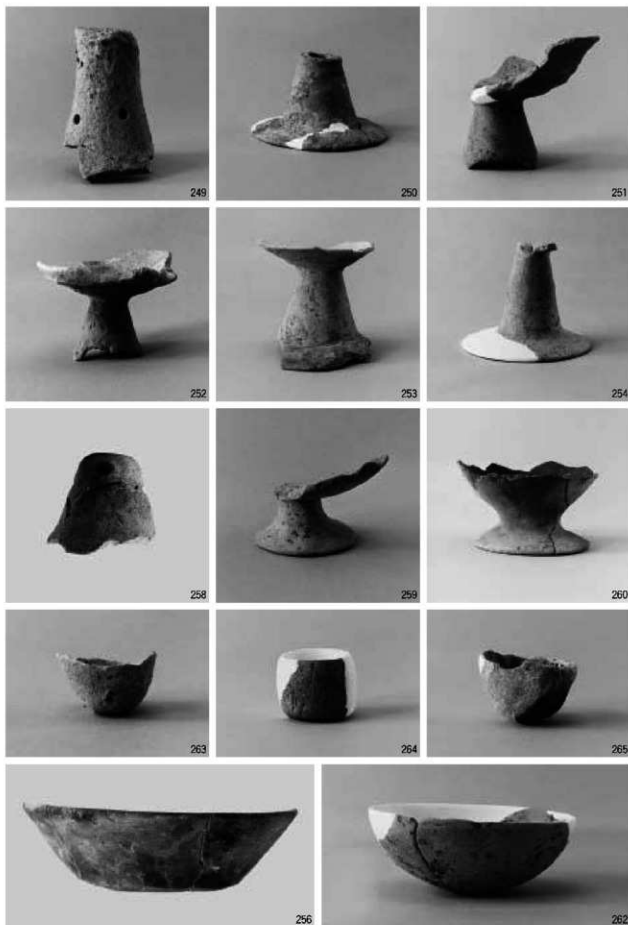




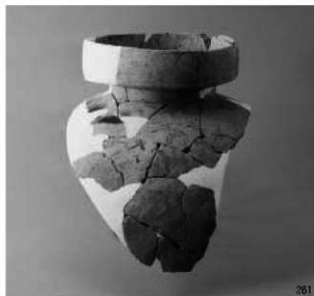
宮迫神田遺跡出土遺物(19)

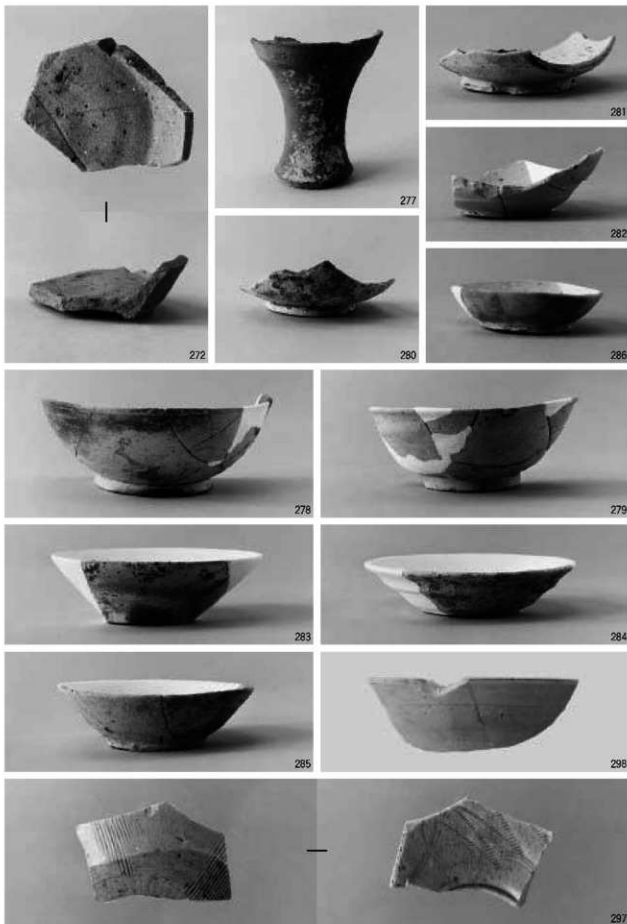


宮迫神田遺跡出土遺物(20)

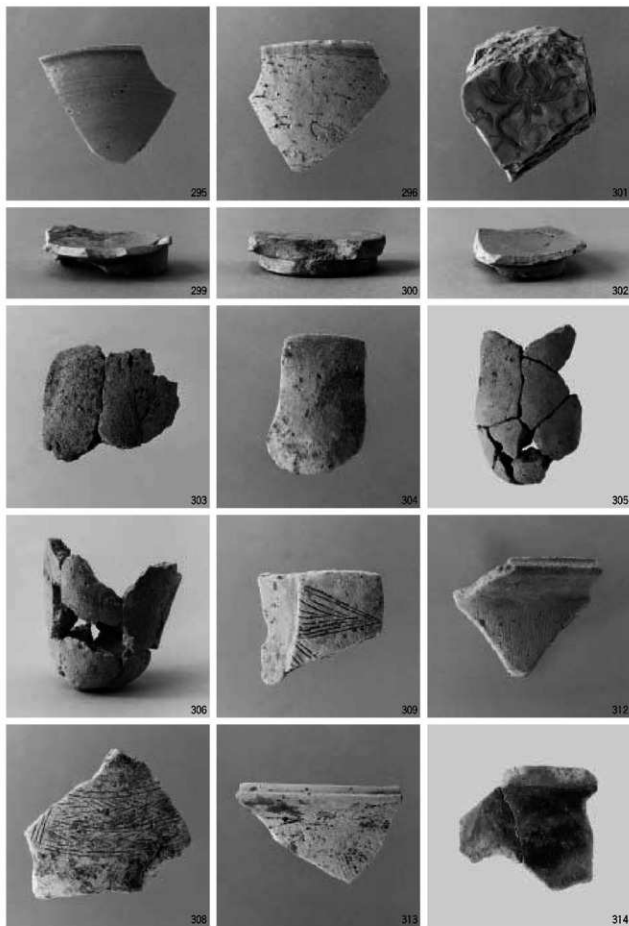


宮迫神田遺跡出土遺物(1)



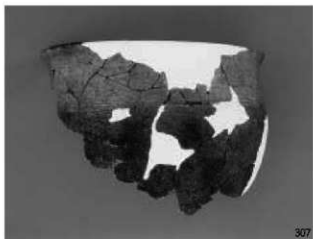


宮迫神田遺跡出土遺物(3)



宮迫神田遺跡出土遺物24





307



310



311



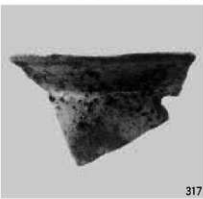
318



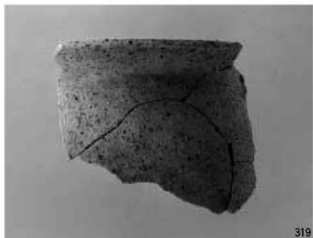
315



316



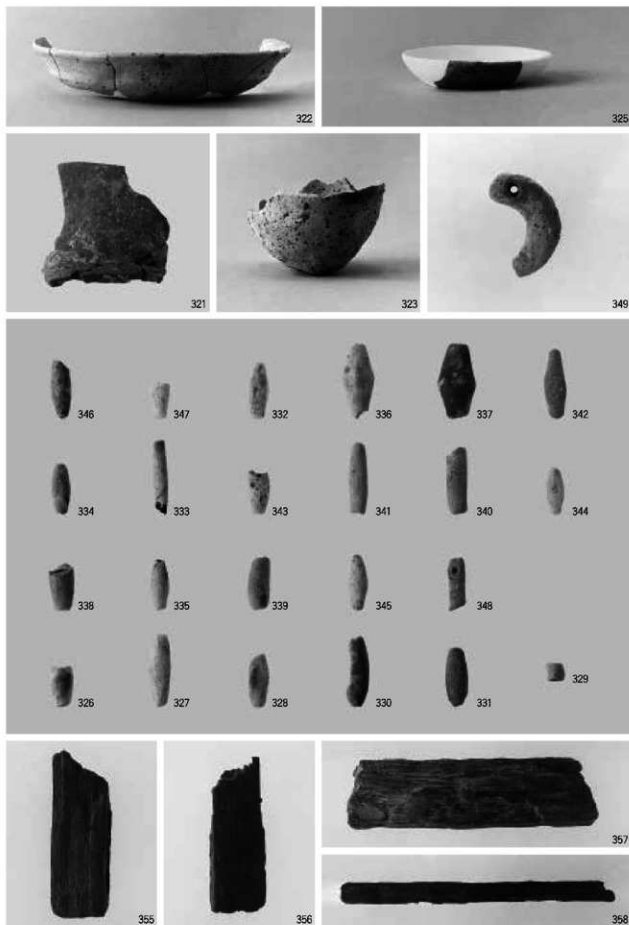
317



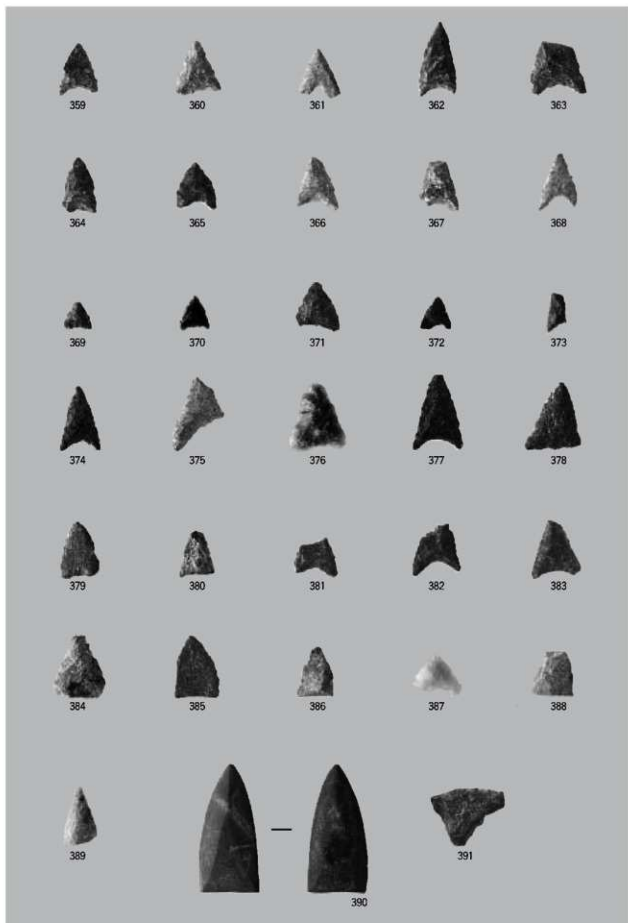
319



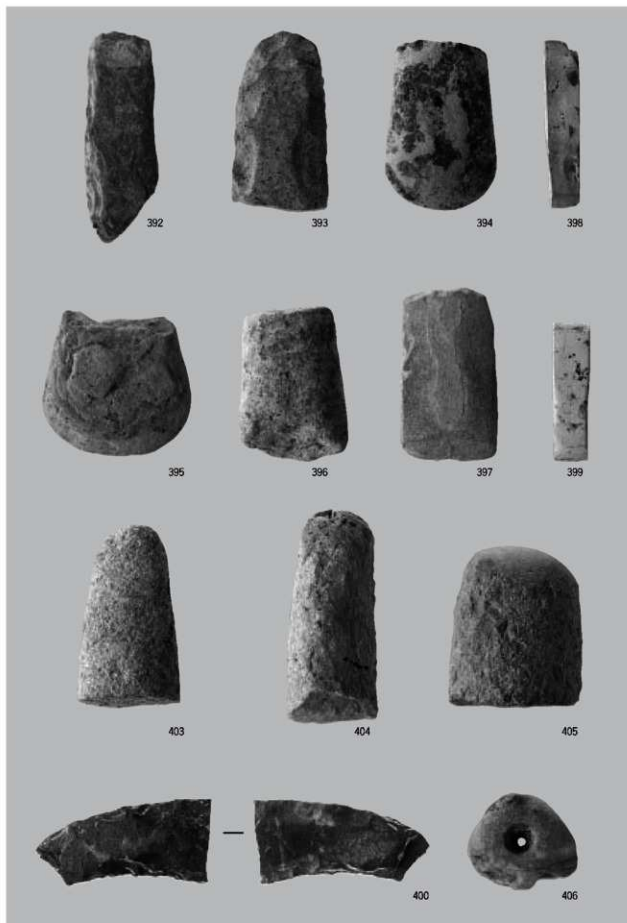
320



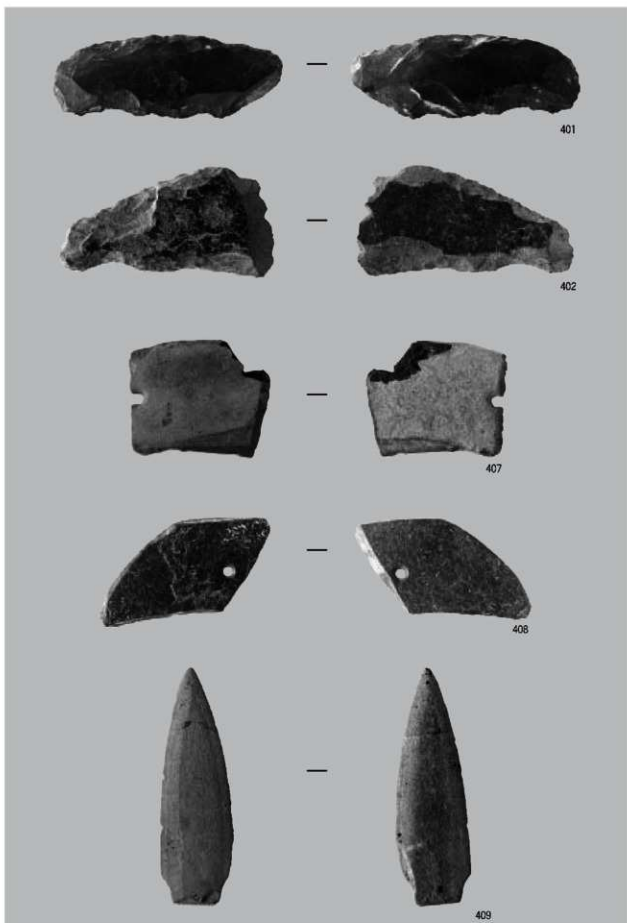
宮迫神田遺跡出土遺物(26)



宮迫神田遺跡出土遺物(27)



宮迫神田遺跡出土遺物(2)



宮迫神田遺跡出土遺物(29)



宮迫神田遺跡出土遺物(30)

# 版圖遺跡的





調査区遠景（南東から）





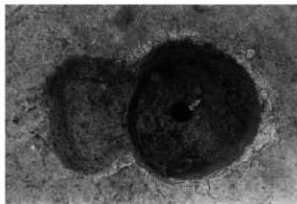
調査区全景



SK 7 土器出土状況（東から）



SK 9 土器出土状況（北から）



SK 4・5 完掘状況 (東から)



SK 8 完掘状況 (南から)



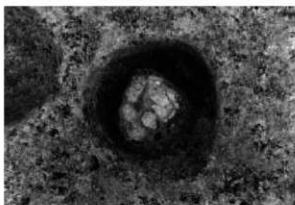
SK 10 土器出土状況 (西から)



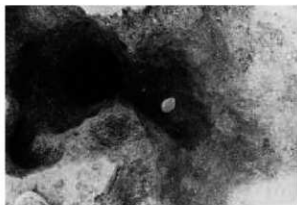
SK 2 完掘状況 (南から)



SK 12 完掘状況 (北から)



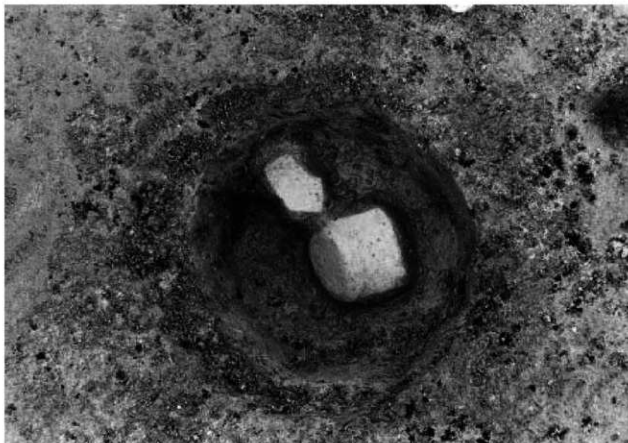
SP 3 土器出土状況 (南から)



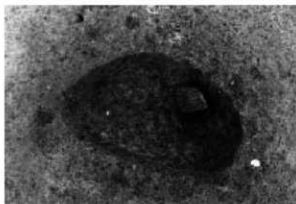
SP 18 土器出土状況 (南から)



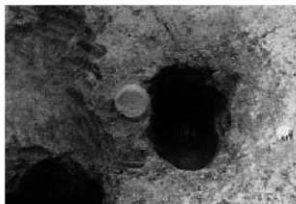
SP 40 土器出土状況 (西から)



SP 1 土器出土状況 (西から)



SP66 土器出土状況 (西から)



SP82 土器出土状況 (北から)



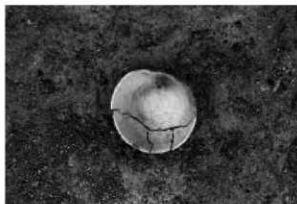
SP98 土器出土状況 (南から)



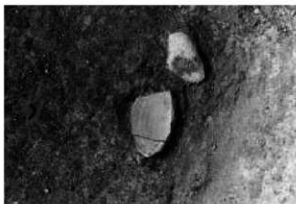
D区 遺物包含層 土器出土状況 (南から)



S P 76 土器出土状況 (東から)



D区 遺物包含層 土器出土状況 (北から)



D区 遺物包含層 土器出土状況 (南から)



D区 石列出土状況 (北から)



D区 石列土層断面 (西から)



土器溜状遺構 遺物出土状況 (東から)



土器溜状遺構 土器出土状況 (北から)



土器溜状遺構 土器出土状況 (南から)



土器溜状遺構 遺物出土状況 (東から)



土器溜状遺構 遺物出土状況 (北から)



SK14 土器出土状況 (北から)



土器溜状遺構 土器出土状況 (北から)



SK13 完掘状況 (北から)



SK14 完掘状況 (南から)



土器溜状遺構 土器出土状況 (東から)



土器溜状遺構 完掘状況（北から）



土器溜状遺構 遺物出土状況（南から）



土器溜状遺構 遺物出土状況（東から）



土器溜状遺構 遺物出土状況（西から）



土器溜状遺構 土層断面（東から）





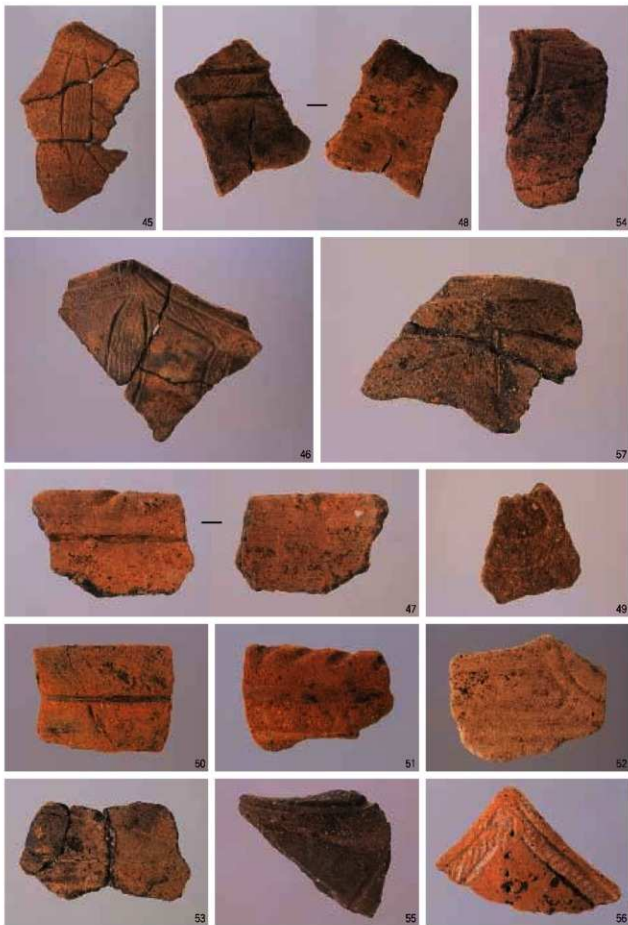
的場遺跡出土遺物(1)



的場遺跡出土遺物(2)



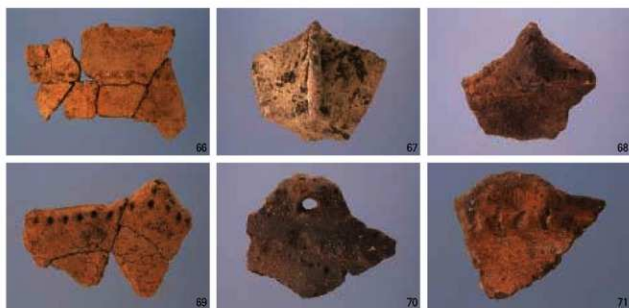
44 第56回 弥生時代以降の遺物の場跡出土遺物(3)



的場遺跡出土遺物4)



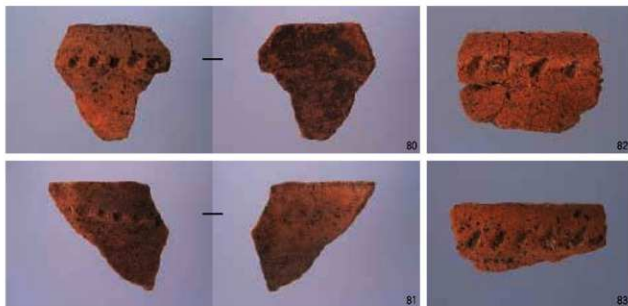
第57图 绳文土器实测图(1)



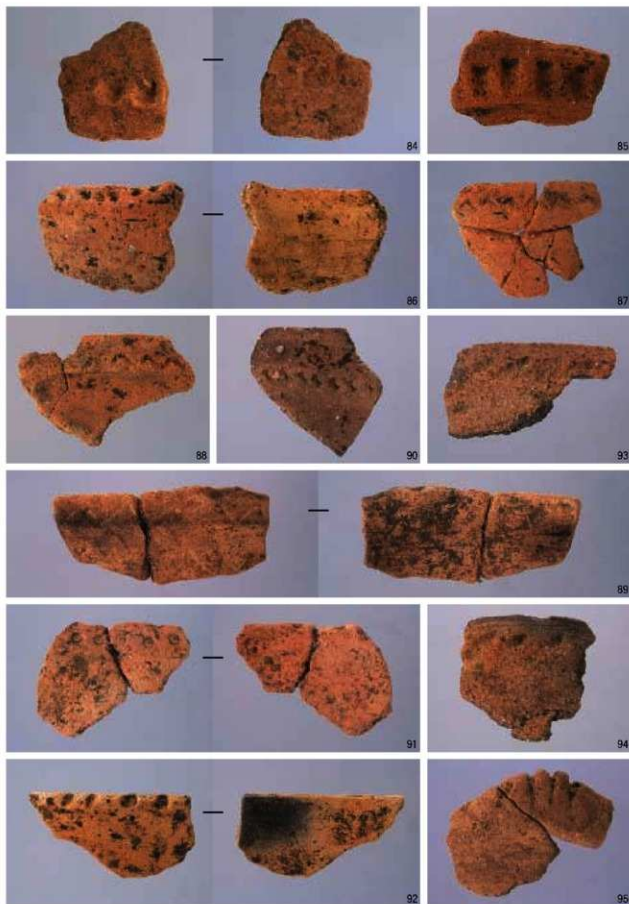
的埴遺跡出土遺物(5)



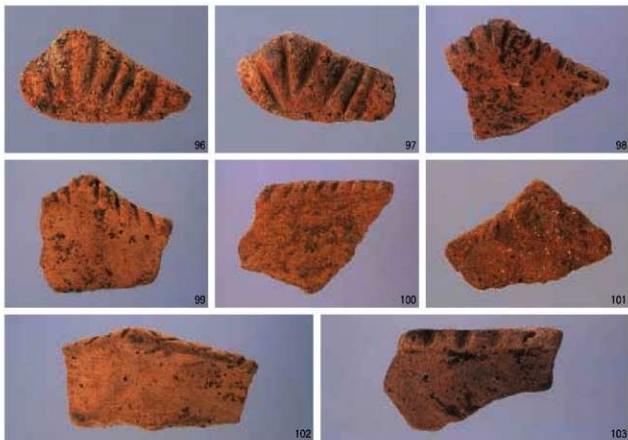
第58图 绳文土器実例(2)



的場遺跡出土遺物(6)



的場遺跡出土遺物(7)



第59圖 繩文土器美濃國3)



的場遺跡出土遺物6)





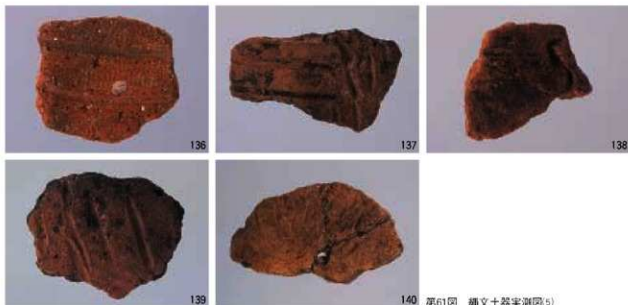
第60图 绳文土器实例(4)



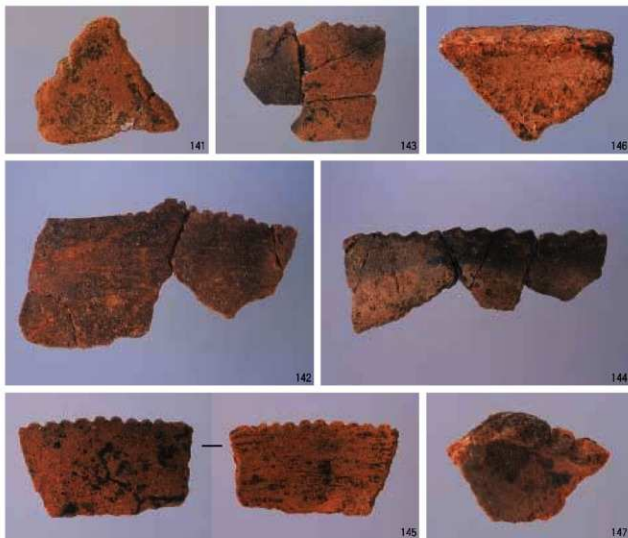
的場遺跡出土遺物(9)



的場遺跡出土遺物(10)



第61回 縄文土器実測図(5)



の場遺跡出土遺物(11)



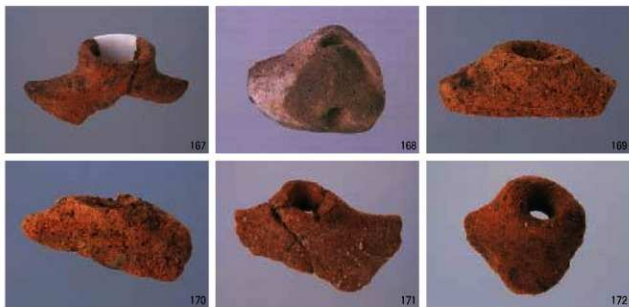
151 第62圖 繩文土器実測(同6)



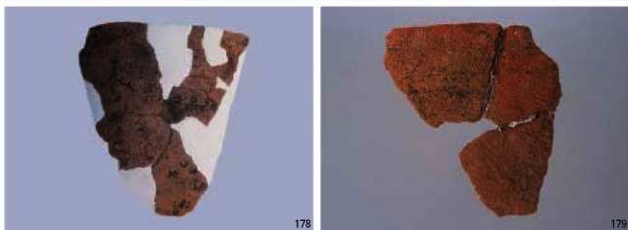
の場遺跡出土遺物(2)



第63图 绳文土器实测图7)



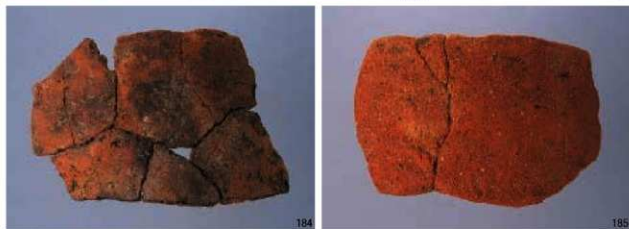
的場遺跡出土遺物(13)



180 第64圖 網文土器實測(図6)



的場遺跡出土遺物(14)



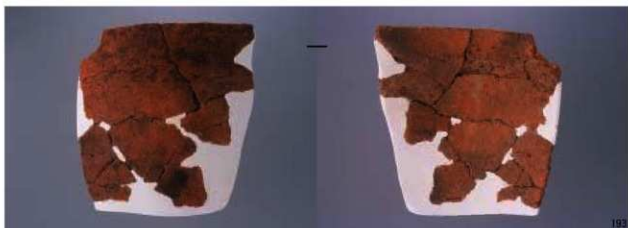
第65圖 繩文土器實測圖(9)



的場遺跡出土遺物(9)



第66圖 繩文土器実測圖10

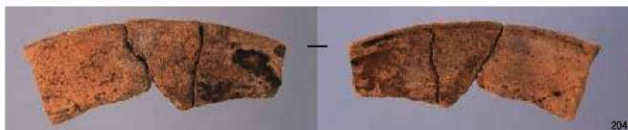


的場遺跡出土遺物16

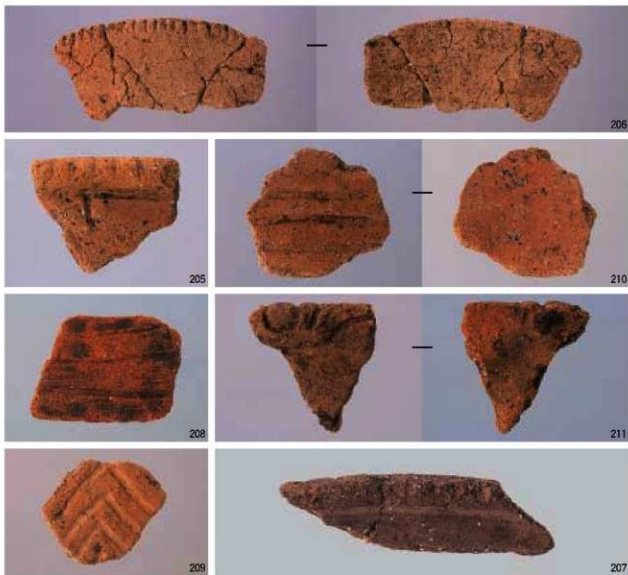




第67圖 縄文土器実測図(1)



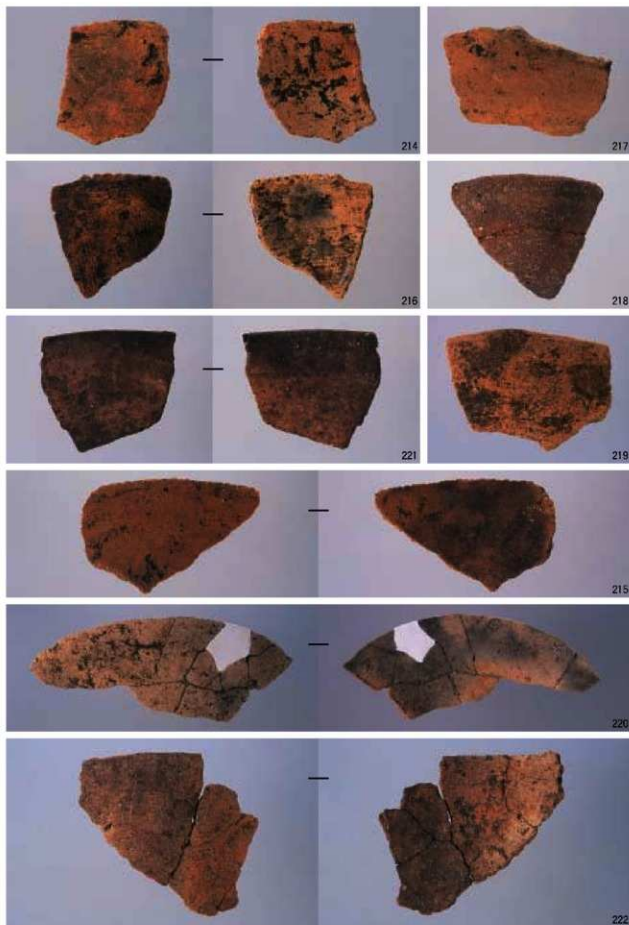
の場遺跡出土遺物(1)



第68图 绳文土器実例(1)



的場遺跡出土遺物(1)



的場遺跡出土遺物(19)



223



224

第69圖 講文土器実測圖16



225



226



227



228



229



230



231



232

的場遺跡出土遺物20



第70図 縄文土器実測図(4)



的場遺跡出土遺物(1)



的場遺跡出土遺物22



第71圖 繩文土器実測圖19



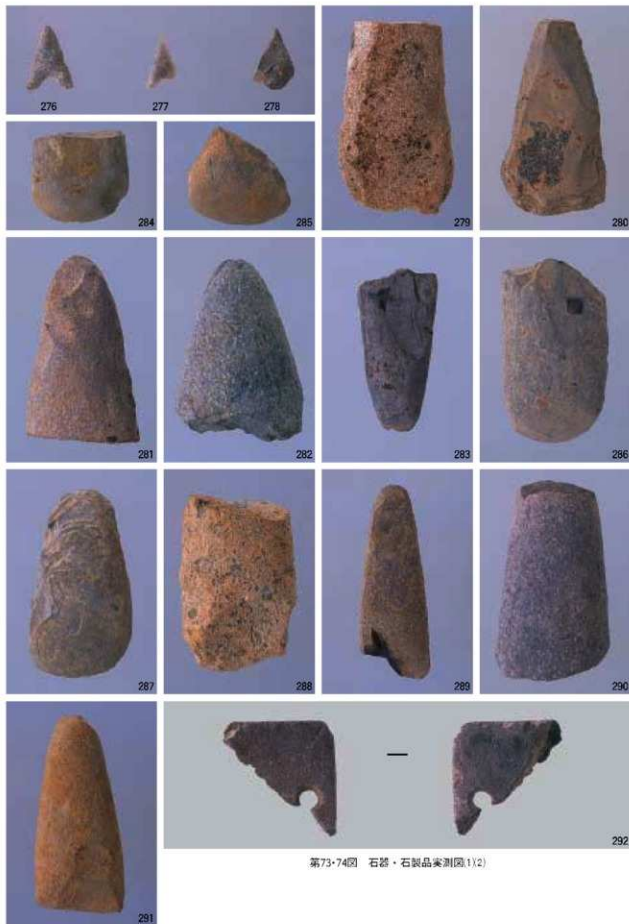
的場遺跡出土遺物23



第72回 縄文土器実測図(6)

的場遺跡出土遺物(4)





第73・74圖 石器・石製品案測圖1(2)

## 報告書抄録

ふりがな	みやざこかんだいせき・まとはいせき		
書名	宮迫神田遺跡・的場遺跡		
副書名			
巻次			
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	下関市文化財調査報告書	山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第51集	11	第40集
編著者名	堀田 浩一 竹安 昭博 石馬 啓介 幸泉 満夫	小林 善也	
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	下関市教育委員会 (十井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)	
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060	〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上891-8 TEL 0837-88-1841	
発行年月日	西暦2005年3月25日(平成17年3月25日)		

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやざこかんだいせき 宮迫神田遺跡	みやざこかんだいせき 山口県下関市 豊北町大字 粟野	352012		34°19'41"	130°58'30"	20040510 ↓ 20040820	2,300	ほ場整備
まとはいせき 的場遺跡	まとはいせき 山口県下関市 豊北町大字 神田			34°18'17"	130°55'08"	20040727 ↓ 20041104	1,300	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮迫神田遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 10軒 掘立柱建物跡 20棟 土坑 36基 溝状遺構 2条 柱穴 約600個	縄文土器 弥生土器 緑釉陶器 六連式製造土器 石剣 管玉 霰玉 ガラス小玉	弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡10軒を検出  北部九州系の甕棺片が出土。
		中世			
的場遺跡	集落跡	縄文時代 中世	掘立柱建物跡 8棟 土坑 14基 柱穴 約500個	縄文土器 土師器 瓦質土器	縄文時代後期の土器が多量に出土。

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第51集

下関市文化財調査報告書 11

山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書 第40集

## 宮迫神田遺跡 的 場 遺 跡

2005年3月

編集・発行 財団法人山口県ひとづくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口市春日町3番22号  
下関市教育委員会  
(十井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)  
〒759-6121 下関市豊北町神田上891-8

印刷 泉菊印刷株式会社  
〒752-0927 下関市長府扇町8番48号